ENERGY, IMAGINATION AND SPIRIT VOL.19

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy



Me Saco Un Ojo Records

F.O.A.D. Records

M.F.G from G.A.T.E.S Metal Punk Death Squad

メタル・パンク 必聴ディスク・ガイド

Masacre 68

Ferocious X

Elkasset

Desenterradas

Justin Marler (ex SLEEP)

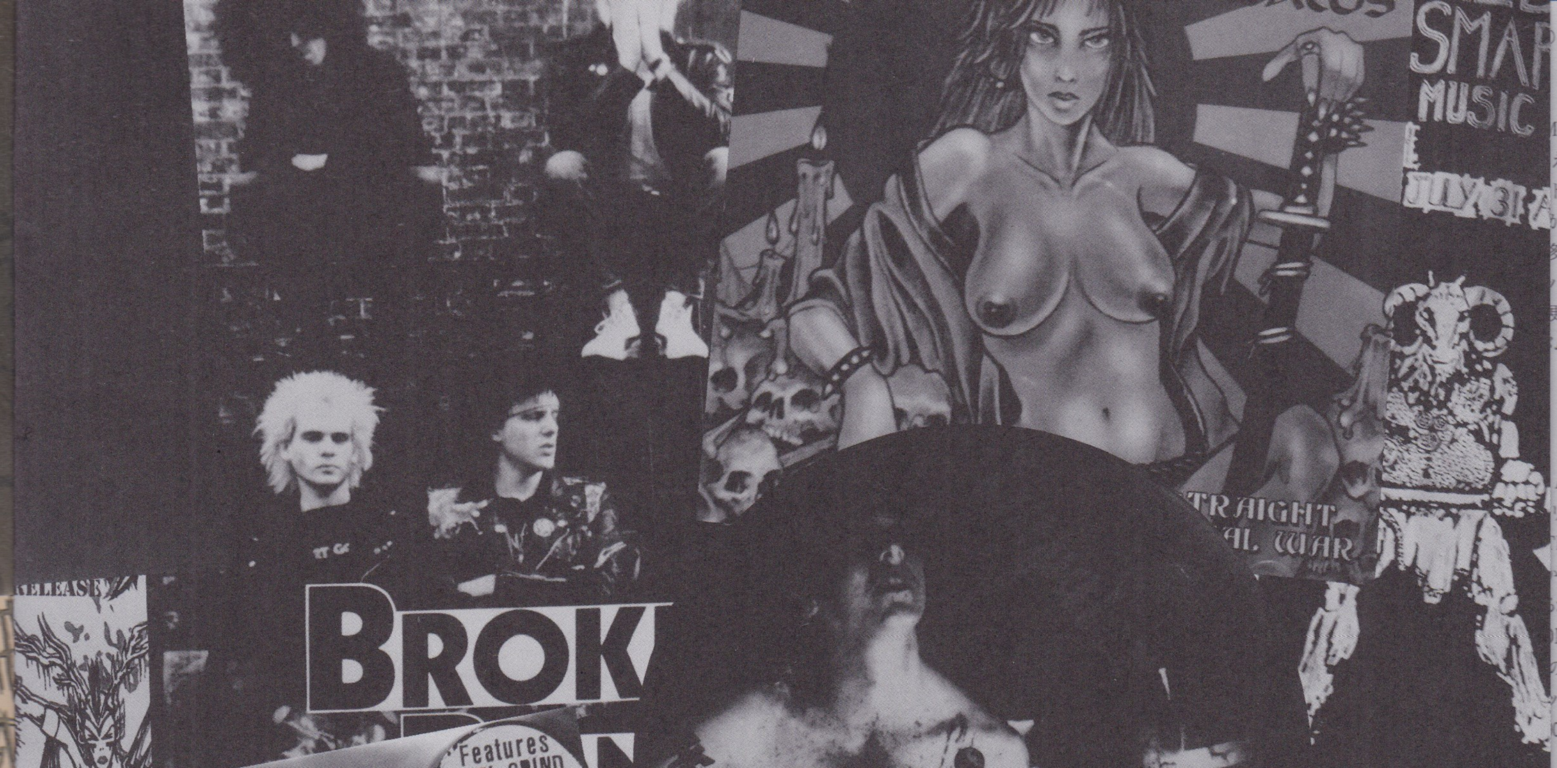
VIVISEKTIO

Punk In Australia

Deranged Insane

† METAL PUNK † IS DEAD

CONTENTS VOL.19



† METAL PUNK IS DEAD †

今号の巻頭は"METAL PUNK IS DEAD"と銘打ち、メタル・パンク特集をお送りしたいと思います!
前号にて掲載したパンク・レーベル:LA VIDA ES UN MUSと同じオフィスをシェアしている、UKの"アンダーグラウンド・デス・メタル"レーベル:ME SACO UN OJO RECORDSへのインタヴューを筆頭に、MSUOのディスコグラフィー、そしてイタリアの"メタル&パンク"レーベル:F.O.A.D. RECORDSのインタヴュー、更には久々の登場となるG.A.T.E.S/METAL PUNK DEATH SQUADのM.F.G(二ツ木正康)のインタヴューと、彼による"メタル・パンク必聴ディスク・ガイド"を以てして、濃密且つ多角的に、メタル・パンクの現状と実態に迫ってまいります!



† METAL PUNK IS DEAD †



レーベルをやってる人へのインタヴューは、本当にそのリリースが好きな人や熱心なコレクター以外あまり興味ないと思いますし、しかもMe Saco Un Ojo(以下、MSUO) Recordsはデス・メタルのレーベルなので、このMSUOオーナーJesus(いつもジーザスって呼んでますが、スペイン人なので本当はヘススって発音するようです)のインタヴューは、EL　ZINEの読者は真っ先に読み飛ばすページになるかも知れません。なので、少しでもEL　ZINE読者に手を止めてもらえるような内容にしたかったのですが、結局いつもBOYで取り扱ってるバンドや作品中心の話題になってしまいました。しかし、興味深いこともいろいろ聞くことができたと思います。

INTERVIEWED:大倉　了(RECORD BOY)　TRANSLATED:山路健二

■あなたはスペイン人ですが、ロンドンを拠点にレーベル活動をやってますよね。UKに移住したのはいつですか?MSUOを始める前に何かシーンに関わっていたら教えてください。バンドで演奏したりとか。

「俺がスペインからUKに引っ越したのは1998年のことだね。家にはほとんど寄りつかなかったし、それでロンドンに渡ったんだ。数年間はPacoのLa Vida Es Un Musを手伝っていたんだけど、その後にハードコア・レーベル、Venganza Crustを始めた。けど、そのレーベルでリリースしたのは数枚の7インチだけだったね。当時は四六時中パーティーしては呑みまくっていたからさ。しっかり続けていこうという気もなかったから、あっという間にそのレーベルは終わっちまったよ」

■Detest Recordsとの共同リリースだったフィンランドのSTENCH OF DECAYのMLPがMSUOの最初のリリースですね。その後もDetest Recordsと共同で立て続けにリリースがありましたが、レーベルをやろう、と思ったきっかけはなんだったんですか?最初からリリース予定を多く抱えてスタートしたんですか?

「その通り、最初のリリースはSTENCH OF DECAYの『Where Death And Decay Reign』で、2009年のことだ。MSUOとDetest Recordsの共同リリースだった。レーベルを始めようと決心したのも、STENCH OF DECAYのあのデモを聴いた時だよ(『Where Death And Decay Reign』のオリジナル・フォーマットはデモ・テープ)。初めて聴いた時、"これは誰かがヴィニールで出すべきだ"って思った。Detest RecordsのJerryに連絡をとって、このアイデアを彼に話したんだ。彼は完全に賛同してくれてね、俺たちは1000枚プレスして、あっという間に売り切れたよ。Pacoは俺に、メタル・レーベルをやるべきだってしょっちゅう言っててね。レコードを取り扱うっていうのは良いと思ったんだけど、Pacoみたいに一日に20時間も働くようにはなりたくなかったんだよな…」

■MORBUS CHRON、MIASMAL、NECROWRETCHは、その後Century Mediaと契約してしまいましたが、Detest RecordsのオーナーはCentury Mediaのスタッフだったんですよね?彼が横取りしたわけじゃないでしょうが、その後Detest Recordsは結局レーベルをやめちゃいましたし、MSUOとしては正直なところどういう気持ちでしたか?

「俺とJerryは3年間ほど、一緒に共同リリースをしてきたんだ。レーベルを始めたのもほぼ同時期だったしね。俺たちはできる限りバンドを売り込んでいったし、リリースした作品はどれもあっという間に売れていったよ。こんなに全てが順調にいくなんて信じられなかった。そうこうしているうちに、JerryはCentury Mediaから、"A&R(※アーティストと会社の間に立ち、契約やレコーディングにおける企画・制作・宣伝などを管理する業務)として働いてみないか"というオファーを受けたんだ。当初は、彼がCentury Mediaで働こうが、俺たちの関係に影響を及ぼすことなんてないと思っていた。だけど、ほんの数ヶ月経ったところで、俺たちが一緒にリリースした3バンドがCentury Mediaと契約しちまった。メチャクチャむかついたね。俺たちが一緒にやってきたこと、その全てを反故にされた気分だった。その後、何度かお互いを見かけることはあった。そんなときには仲良くしたけど、もう連絡することはなくなったよ。とにかく、俺たちがリリースしたそれらの3バンドのうち、聴くに耐えうるのは今ではNECROWRETCHだけになっちまった。MORBUS CHRONやMIASMALの新作なんて、まるで夢中になれないね。Century Mediaのリリースのうち、初期のいくつかは好きだけど、この20年間でリリースされ

た作品は全然好きじゃない」

■現在はUSのDark Descentと良い関係でリリースしていますね。共同リリースというのはレーベル同士がディスカッションして決定するんですか？共同リリースだと、たいして乗り気じゃないながらも渋々出したヤツなんかもありそうな気がするんですが、もし話せたら教えてください。

「MSUOとDark Descent Recordsは同じバンドに入れ込んでいたんだが、当初、Dark Descent RecordsはCDしかリリースしなかったし、俺はヴィニールしかリリースしなかった。俺はCDでリリースする気なんてこれっぽっちもなかったしな。だから、Dark Descent Recordsならお互いにとって有益なパートナーシップを築けると思ったんだ。俺たちが共同リリースしているバンドの多くは、まだデモを出したばかりの初期から、ずっとリリースを働きかけてきたバンドなんだよ。俺は好きじゃないバンドを出したことなんて一度もないぜ」

■いつもあなた自身からバンドにリリースをオファーしますか？それともバンドからの方が多いですか？

「リリースしているバンドの90パーセントは、俺が見つけ出したものさ。オンラインで新しい音源をチェックしたりショーに行くことに、俺は膨大な時間を費やしているんだ。バンドが俺に連絡してきてリリースに至った音源も、ほんの少しだけはあるけどな」

■他のアンダーグラウンド・デス・メタル・レーベルとも交友関係はありますか？Necroharmonic、To The Death、Blood Harvest、The Crypt、Memento Mori、Vic、Sepulchral Voice、Pulverised、Chaos(メキシコ)などとはどうですか？

「君が名前を挙げたレーベルの連中とは、ほぼ全員と会ったことがあるよ。そのうちの何人かとは良好な関係にあるし、特にBlood HarvestのRodrigoとは仲が良いんだ。けど、一緒にリリースをしたことのあるレーベルはThe Cryptだけだね。NECROPHILIACのダブルLPをリリースしたんだ」

■今までで一番売れたリリースはなんですか？だいたいどれもワンタイム・プレスだと思うので同じくらいの枚数だと思いますが、即完売したヤツとか、再プレスしたヤツもありましたよね。あと、セールス関係なく個人的なお気に入りのMSUOリリースは何ですか？

「一番売れたのは、恐らくUNDERGANGにMORBUS CHRON、SWALLOWED、それとKRYPTSかな。俺がリリースした彼らの作品はどれも即完売したよ。プレス枚数はレコード毎に異なっていて、その需要がなくなるまで、俺は再プレスし続けるようにしている。だからプレス枚数というのは、レコード毎にまるっきり違っているんだ。あるレコードは300枚、またあるレコードは2000枚って具合にね。INDESINENCEのダブルLPは俺が思ったほど多くは売れなかったな。でもあの作品は、DECOMPOSEDのミニLP(92年発表の『The Funeral Obsession』)以降にイングランドが輩出したデス/ドゥーム・レコードの中でも、最高の作品だったと俺は自負している。あと、誰にでもオススメできるバンドじゃないのはわかってるけど、INTEMPERATORのデモ・テープもあまり売れなかった。俺はあのデモ・テープが大好きなんだけどね」

■最近のお気に入りのメタル・バンドは何ですか？MSUOでリリースしたい、と考えているバンドはありますか？また、パンク・バンドでも何か最近のお気に入りはありますか？

「ここ数年の俺のお気に入りのバンドはBÖLZER、SWALLOWED、DROWNED、NECROMANIAC、ANHEDONIST、それにSULPHUROUS。こういったバンドは是非ともリリースしたいけど、既に他のレーベルと契約してしまっているからね。最近のパンク・バンドだと、STRESS SSにBOSTON STRANGLERS、BARCELONA、あとはSKIZOPHRENIAが大好きだ」

■前に、「MSUOはデス・メタル・パンク・レーベルだ」っていうポリシーがあると聞いた覚えがあります。確かにMIASMAL(メンバーはスウェーデンのメタル・クラスト・パンク・バンドなどでも活動中)、UNDERGANG(メンバーはデンマークのポリティカル・パンク・バンドなどでも活動経験有り)、神戸のSEX MESSIAHなどはパンク・シーンとも密接なデス・メタル・バンドですし、スペインの伝説的なハードコア・パンク、RUIDO DE RABIAもリリースしていますね。そのポリシーは今も変わりはないですか？

「あぁ、君の言う通りだ。君が言ってるバンドのメンバーは、パンク・バンドにも関わっているよね。俺がパンク・ミュージックに関心を示しているからこそ、MSUOのリリースのうちのいくつかは、思い切りパンク・サウンドなデス・メタルになっているんじゃないのかな。ただし、このレコード・レーベルのポリシーは、"アンダーグラウンド・デス・メタル"だよ。RUIDO DE RABIAをリリースしたのは、昔から大好きだったから。リリース毎にサウンドがまるで違っていたけど、初期から最期までね。RUIDO DE RABIAのサウンドとアティテュードは、他の誰よりも常に一歩先を行っていたのさ」

■2000年代前半はパンク・シーンにもデス・メタル・クラストみたいなのはたくさんいましたよね。でも今はクラスト・パンク・シーンのトレンドはニューウェーブ化だと聞いています。デス・メタルにもトレンドはあると思いますが、現在欧米のデス・メタル・シーンではどういうスタイルがトレンドなのでしょう？Raw War系ブラック・デス、AUTOPSY系、INCANTATION系、ゴア、クトゥルー、ドゥーム、プログレ/エクスペリメンタルなど、さまざまなスタイルがありますが。

「デス・メタルにおける大きなトレンドと言えば、今だとオカルトと神秘主義に入れ込むことじゃないかな。現代のブラック・メタルと同じさ。と言うより、これらのジャンルは常に、様々な面においてオカルトや神秘主義からの影響を受けてきた。今では最早、"ギグ"に足を運ぶんじゃなくて、"儀式"に参加するって具合で、ライヴをやるときも顔を黒い布ですっぽり覆って、香を焚いて詠唱をしだすバンドもある。ともあれ、俺は今でもGRAVE MIASMAやIRKALLIAN ORACLEといったバンドのショーは楽しんでいるぜ」

■あなたは日本ではパンク・バンドのミュージシャンと広く交流がありますが、日本のデス・メタルやアンダーグラウンド・メタルの関係者とはそれほど交流はないですよね？ANATOMIA、NECROPHILE、WORMRIDDEN、ex. TRANSGRESSORのTakashi氏くらいじゃないですか？日本のメタル・バンドにはあまり興味がないということでしょうか？日本のエクストリーム・メタルとハードコア・パンクについてあなたの思うところを聞かせてください。

「あぁ、そうだな。俺と日本のメタルとの関係は、俺と日本のパンクとの関係ほどには良くないね。俺が知っている日本のメタル・ミュージシャンなんてほんの少しだけさ。俺は本当に日本のハードコア・パンクが好きでね。ティーンエージャーの頃に夢中になって、それ以降、見た目もクールでノイジーなサウンドのものは手当たり次第に買い続けてきた。物凄く興味深いバンドが、日本のハードコア・パンク・シーンにはいつもいるからね。俺が日本のメタル・シーンに入れ込むようになったのは、それほど昔のことじゃない。精々が10年前くらいからだ。シーンで一体何が起こっているのか、立ち入ろうともしていないしね。正直に



GOREPHILIA


SWALLOWED

言って、パンク・バンドほど夢中になれる日本のメタル・バンドは、それほど多くないんだ。だけど、ANATOMIAやFUNERAL MOTH、DEADLY SPAWNといったバンドは気に入っているよ」

■最近のUKデス・メタル・シーンはどうですか?僕が知ってるのはあなたもリリースしてるBINAHやINDESINENCE、あとGRAVE MIASMA、LVCIFYRE、CRAVEN IDOLあたりなんですが、NECROMANIACなんかは今後かなり期待できると思いますが。

「ここのシーンは、格好良いバンドと言ったらADORIORしかいなかった10年前よりもずっと良好だよ。現在、それほど多くの新しいバンドがいるわけじゃないけど、かなり良いバンドが登場してきてはいるんだぜ。君が名前を挙げたバンドは、恐らく今のUKから出てきたバンドの中じゃベストな連中さ。それにCRUCIAMENTUM、MACABRE OMEN、THE ONEをつけ加えておこう。ロンドンからNECROMANIACが登場したのは、全くもって思いもよらぬことだったね。こういったバンドのメンバーは、他のバンド、君が言ったようなバンドでもプレイしているんだ。別にこれは秘密でもないんだけど、今のUKのベストなメタル・バンドっていうのは、一握りの同じ人物たちによって作り出されていると俺は思っている」

■ロンドン市内でデス・メタルのギグは頻繁にありますか?あまりイメージがわかないのですが。

「フェスティヴァルの時期じゃなくても、かなりの数のショーが開催されている。大抵の週末には何かしらやっているけど、ショーの70パーセントはクソだね。あと、ヨーロッパ本土をツアーしているバンドの多くが、UKには来ねぇんだよな」

■BOLT THROWERやVALLENFYRE(EXTINCTION OF MANKIND、DOOM、ALE HAMMERなどをやってるScoot氏が、PARADISE LOSTやMY DYING BRIDEのメンバーと始めたデス・メタル・バンド)などは今でもパンク・スピリッツをアピールしたデス・メタルのような存在ですが、彼らのようなメジャーなUKデス・メタル・バンドやシーンとは交流がありますか?2012年のBOLT THROWERの25周年記念フェスではDISCHARGEが出演しましたが、ああいうイヴェントにアンダーグラウンドのデス・メタル・ミュージシャンや関係者は熱狂してるんですか?

「VALLENFYREなんて知ったこっちゃないね。俺はあいつらの音楽が好きじゃないし、あいつらにどんなアティテュードがあるのかなんてまるで知らないぜ。でもBOLT THROWERは大好きだ。失望せずに済むバンドのうちの一つだからな。彼らのショーはいつだってグレートさ。メジャーなデス・メタル・バンドでプレイしている友人は何人かいる。だけどレーベルに関する限りは、誰とも関係はないよ」

■あなたはスペイン・マドリッドのシーンとも密接ですよね。TEITANBLOODやPROCLAMATIONは僕の周りでも人気がありますが、やはりマドリッドのデス・メタルと言えば、Xtreem Music/AVULSEDのDave Rottenの影響力が大きいですか?また、GRAVEYARDなどのバルセロナのシーンとも交流はありますか?

「TEITANBLOODやSACRIFICIO、INTEMPERATORは、今のマドリッドでは最高のバンドだけど、この3バンドの中でライヴをやっているのはINTEMPERATORだけだ。PROCLAMATIONがまだ活動していたときでも、ライヴの動員は80人程度だったけどな。俺はAVULSEDの大ファンってわけじゃないんだけど、Dave Rottenとは何度も会ったことがあるし、彼らのショーは良いよ。マドリッドのシーンには、今でも彼らの熱心なフォロワーがいるしね。ただ、Dave Rottenはもはやこのシーンの肖像のような存在になっているから、スパニッシュ・メタル・シーンにおける一番の嫌われ者のようにも捉えられているんだ。俺も、Xtreem Musicのリリースで興味ないのなんてたくさんある。だけど、もしDrowned Productions (※Dave Rottenのレーベルで、Xtreem Musicの前身)がなければ、今の俺はなかっただろう。バルセロナのメタル・シーンとは、俺は付き合いはないよ」

■以前はデンマークで行われていたKill Town Death Festにも深く関わってましたよね?今はショーのオーガナイズなどは全くしていませんか?

「Kill Town Death Festのプロモーションは俺もかなり手伝ったけど、やってたのはそれだけだよ。残念なことに、Kill Town Death Festはもう開催されていないしさ。俺自身が企画したのは、もう10年も前のDISFEARのショーが最後。それ以降はやっていないね。そんな時間もないし。レーベルをやると、かなりの時間を費やすことになるから、他のことに携わるなんてできなくなるんだ。今や、ロンドンにはプロモーターが腐るほどいるから、俺は必要ともされていないしな」

■あなたはCDが嫌いですよね。絶対にCDはリリースしませんか?また、そこまでアナログ・フォーマットにこだわる理由はなんでしょうか?僕は現代ではもはやCDの方がオールドスクールでアナログな感覚でコレクションされるフォーマットに思えてならないのですが。

「俺の人生でCDをリリースしたことは一度もない。その理由の一つとして、ヴィニールを愛しているからこそ、俺はレーベルを始めたってことがある。俺は22年間、ヴィニールを蒐集し続けている。CDが出てきたときも、気にすら留めなかったね。そうさ、俺は今でもアナログ・フォーマットにこだわっているんだよ」

■あなたはLa Vida Es Un MusのPacoとよく日本に来てますよね。確かに今は円安ですし、レーベル以外にも仕事をしてるんだとは思いますが、レーベルもそんなにもうかってるんですか?

「そうだね、俺はほぼ毎年、日本を訪れている。前述したように、俺には良い友人がたくさんいるからさ。特に東京と大阪にね。日本のレコード・ショップは本当に最高だよ!レーベルは利益を出しているけど、そのほぼ全てを俺は新しいリリースに注ぎ込んでいるんだ」

■最後にレーベル活動に興味を持ってる読者にアドバイスがあれば教えてください。

「レーベルなんてやめておけ!始めた途端に、それは雪玉みたいにドンドン膨れ上がっていき、大量の時間を費やすことになるぞ。そして友人を失い、仕事を失い、恋人を失い、終いには母親も失うことになる。飼っている猫も死ぬぞ。家にいられなくて、餌をあげられなくなるからな。レーベルは、割に合わないものなんだよ」

MALICIOUS



†METAL PUNK IS DEAD†

ME SACO UN OJO RECORDS

Discography

ディスコグラフィーは資料的なものにしたかったので、各バンドの音楽性などには敢えてほとんど触れていません。おかげで、興味のない人には本当につまんないディスコグラフィーに仕上がっていますが、MSUOリリースを欠かさずチェックしてる人にとっては、こういう方が喜ばれると思います。(2015年8月現在)Discogsにも載ってないTRENCHROTのレッド・ヴィニールの存在とかを、インターネットだけではなく、EL　ZINEの誌面をお借りできたこの機会にマテリアルな記録で残しておきたかったのです。

TEXT:大倉　了(RECORD BOY)

MSUO-1 STENCH OF DECAY/Where Death And Decay Reign (12")
ベルギーのDetest　Recordsからリリースされたフィンランド出身デス・メタル・バンドの1stデモのヴィニール化。MSUOとベルギーのDetest Recordsの初共同リリースで、MSUOの第一弾作品でもあります。2009年リリース。

MSUO-2 UNDERGANG/Indhentet Af Doden (12")
デンマークのデス・メタル・バンドの2009年1stデモのヴィニール化。ドラマーが日本でも人気のあったパンク・バンドのthe　ASSASSINATORSでもプレイしていた、という情報が相当アピールしたようで、日本でもかなり売れたレコードです。2010年の初回盤はブラック・ヴィニールとブラウン・ヴィニールの2種があり、この作品からJesusはしばらく日本流通用に帯を付け始めました。このLPはその後も毎度盤色を変えて再プレスされていて、ジャケの色合いも変わってるのもあります。

MSUO-3 KRYPTS/Open The Crypt (12")
Detest　Recordsとの共同でリリースされたフィンランドのデス・メタル・バンドの2009年1stデモのヴィニール化。ltd.100枚のレッド・ヴィニールも存在します。

MSUO-4 MIASMAL/Creation Of Fire/Bionic Godhead Erase (7")
Detest　Recordsとの共同でリリースされたスウェディッシュ・デス・メタルの1st 7"。メンバーはAGIRIMONIA、ATOMVINTER、MARTYRDODといったパンク・バンドでも活動。ltd.100枚のレッド・ヴィニールも存在します。2010年リリース。

MSUO-5 CHRONIC DECAY/Justify Your Existence (12")
ANTI-CIMEXやPUKEなどのリリースでパンク・ファンにもおなじみのCBRから1991年にリリースされた、かの有名なデス・メタル・オムニバス・アルバム『Projections Of A Stained Mind』にも参加していたスウェディッシュ・デス・メタルの1994年録音未発表アルバム。初回盤にはltd.100枚のイエロー・ヴィニールがあり、再プレス盤はレッド・ヴィニール。2010年リリース。

MSUO-6 BURIAL INVOCATION/Rituals Of The Grotesque (12")
ANATOMIAともSplit 7"を出しているトルコのデス・メタル・バンドの1st　EP。ltd.100枚のグレイ・ヴィニールも存在します。2010年リリース。

MSUO-7 EVOKE + MORDBRAND (Split 12")
日本のメタル・コレクターにも知られてるほどの超マニアが在籍するUKデス・メタル・バンドEVOKEの1994年デモ音源と、ex.GOD MACABREのVo.参加のスウェディッシュ・デス・メタルMORDBRANDによるSplit LP。ltd.100枚のグリーン・ヴィニールも存在します。2010年リリース。

MSUO-8 INDESINENCE/Neptunian (12")
WORSHIPを輩出するなど、初期フューネラル・ドゥーム・メタル・シーンの基盤を形成した重要レーベルと言っても過言ではない日本のWeird Truth Productionから2006年にCDで発表されたUKドゥーム・デス・メタル・バンドの2ndアルバムのヴィニール化。ltd.100枚のブルー・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-9 VETERNUS/Awaken The Grave (7")
Detest　Recordsとの共同でリリースされたスウェーデンUppsala出身デス・メタル・バンドの1st 7"。メンバーは後にNOCTUMやANGUISHといった、ヴィンテージなドゥーム・メタルでも才能を発揮します。WATAINをボスとするUppsalaのメタル・ヘッズ連"Metal Of Death"の構成員連中。2010年リリース。

MSUO-10 MORBUS CHRON/Creepy Creeping Creeps (7")
Detest　Recordsとの共同でリリースされた


MSUO-1


MSUO-2


MSUO-3


MSUO-4



MSUO-5


MSUO-6



MSUO-7


MSUO-8


MSUO-9



MSUO-10



MSUO-11


MSUO-12


MSUO-13

MSUO-14

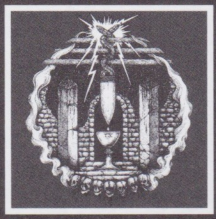
MSUO-15

MSUO-16

MSUO-17

MSUO-18

MSUO-19

MSUO-20

MSUO-21

MSUO-22

MSUO-23

MSUO-24

MSUO-25

MSUO-26

MSUO-27

MSUO-28

MSUO-29

MSUO-30

MSUO-31

MSUO-32

MSUO-33

MSUO-34

MSUO-35

MSUO-36

スウェディッシュ・デス・メタル・バンドの1st 7"。恐らく、MSUOを巣立ったバンドの中でも一番の出世頭でしょう。ltd.150枚のイエロー・ヴィニールも存在します。2010年リリース。

MSUO-11 DEVOURMENT/Shallow Grave (7")
90年に結成され一年ほどの短期間だけ活動したスウェディッシュ・デス・メタル・バンドの90年ライヴ音源EP。メンバーは後に、FUR BOWL、CARNAGE、ARCH ENEMYなどに参加。Detest Recordsとの共同リリースで、ltd.100枚のホワイト・ヴィニールも存在します。2010年リリース。

MSUO-12 KRYPTS/ST (7")
Detest Recordsとの共同リリースで、ltd.100枚のホワイト・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-13 GOREPHILIA/In Death (TAPE)
フィンランドのデス・メタル・バンドがCDRで自主リリースしたデモのカセット再発。2011年リリース。

MSUO-14 STENCH OF DECAY/Visions Beyond Death (7")
Detest Recordsとの共同リリース。前作12"同様、このバンドのカラー・ヴィニールは一度も存在したことがない(はず)。2011年リリース。

MSUO-15 UNDERGANG/Havntorst (FLEXI)
2011年USツアーに合わせてDark Descentと共同でリリースされたソノシート。

MSUO-16 MIASMAL/ST (12")
Detest Recordsと共同でリリースされた1st LP。ltd.100枚のグレイ・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-17 ATARAXY/Curse Of The Requiem Mass (12")
Detest Recordsと共同でリリースされたスペイン出身デス・メタル・バンドの1st LP。ltd.100枚のブルー・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-18 NECROWRETCH/Putrefactive Infestation (12")
Detest Recordsと共同でリリースされたフレンチ・デス・メタル・バンドの4曲入り12"。これはレギュラー・ヴァージョンがホワイト・ヴィニールで、限定ヴァージョンがブラック・ヴィニールでした。2011年リリース。

MSUO-19 GOREPHILIA/Ascend To Chaos (12")
1st MLP。ltd.100枚のバーガンディー・カラー・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-20 FUIL NA SEANCHOILLE/ST (12")
デンマークのNUCLEAR DEATH TERRORやthe ASSASSINATORS、オーストラリアのKROMOSOMなどでもギターを担当したCormacという人がやってる独りブラック・メタルの、2008年と2009年のデモ2種をまとめたLP。300枚プレスで、限定カラー・ヴィニールは存在しません。2012年リリース。

MSUO-21 CORPSESSED/The Dagger & The Chalice (12")
Dark Descent Recordsと共同でリリースされたフィンランドのデス・メタル・バンドの1st 12"。ltd.100枚のグレイ・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-22 ORGANISOMOS/Manejos Invisibles (12")
伝説のコロンビア最古デス・メタルPARABELLUMのメンバーがやってるバンドの2011年発表2ndアルバムLP。限定ブルー・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-23 MORBUS CHRON/Sleepers In The Rift (12")
Detest Recordsと共同でリリースされた1st LP。ltd.100枚のホワイト・ヴィニールも存在します。2012年リリース。

MSUO-24 SEX MESSIAH/Hymn Of The Apocalypse (7")
神戸のクロスオーヴァー・デス・メタル・バンドの限定500枚3rd 7"。限定カラー・ヴィニールは存在しません。2012年リリース。

MSUO-25 NECROPHILE/Mementos In The Misting Woods (12")
TRANSGRESSOR、MESSIAH DEATH、MULTIPLEXメンバーがやっていた東京デス・メタル・シーン黎明期のバンド（復活して現在は再始動中）の初期音源集ディスコグラフィー。ltd.100枚ピンク・ヴィニールも存在します。2012年リリース。

MSUO-26 EXANTHEMA + CHRONIC DECAY (Split 12")
93年にCDでリリースされた初期スウェディッシュ・デス・メタルのメガ・レアSplitアルバムのヴィニール化。ltd.100枚のクリア・ヴィニールも存在します。2011年リリース。

MSUO-27 WORMRIDDEN/Infesting The Grave (7")
ANATOMIA、NECROPHILE、TRANSGRESSORのTakashi氏とUNDERGANGのDavid氏によるプロジェクト・バンドの1st EP。ltd.100枚のグリーン・ヴィニールも存在します。2012年リリース。

MSUO-28 BINAH/Hallucinating In Resurrecture (12")
UKデス・メタル・バンドの1st LP。ltd.100枚ブルー・ヴィニールも存在します。2012年リリース。

MSUO-29 GOREPHILIA/Embodiment Of Death (12")
1stアルバム。このLPには限定カラー・ヴィニールはなかったはずです。

MSUO-30 MALICIOUS/Mental Illness (TAPE)
フィンランド出身デス・メタル・バンドの1stデモ。

MSUO-31 INTEMPERATOR/Howls Of The Intemperate (TAPE)
スパニッシュ・メタル・ファンには馴染みのあるMUROにも在籍経験もあるメンバーなどによるデスラッシュ・メタル・バンドですが、日本のハードコア・パンクも大好きだそうで、かなりアクの強いサウンドです。2012年リリースの1stデモ。

MSUO-32 ATARAXY/Revelations Of The Ethereal (12")
2013年リリース2nd LP。限定グリーン・ヴィニールも存在します。確かこの頃からJesusは日本流通用帯はやらなくなりました。

MSUO-33 MEGATOMB/Louder Than A Thousand Deaths (12")
あまり詳細を公表してないバンドですが、スウェーデンとハンガリーのミュージシャンによるプロジェクト・バンドとのこと。ltd.100枚のオレンジ・ヴィニールも存在します。

MSUO-34 CTHONIC AURA/Abyssic Reflections In Slumber (12")
EMBRACE OF THORNSメンバーによるギリシャ・デス・メタルのデビュー作。チェコのDoomentia Recordsとの共同リリースで、片面シルク・スクリーン・プリント。2012年リリース。

MSUO-35 KRYPTS/Unending Degradation (12")
Detest Recordsと共同でリリースされた1st LP。ltd.100枚のホワイト・ヴィニールも存在しますが、これは発売前から海外で大盛り上がりで、ホワイト・ヴィニールは日本にほとんど入ってきませんでした。2013年リリースで、これがDetest Recordsとの最後の共同作となりました。

MSUO-36 ENGULFED/Through The Eternal Damnation (12")
BURIAL INVOCATIONメンバーらによるトルコのデス・メタル・バンドのデビュー作。前評判などはほとんど聞きませんでしたが、BOYのお客さんにはすこぶる好評だったリリースです。2013年リリース。

MSUO-37 INDESINENCE/Vessels Of Light And Decay (2x12")
MSUO初の2枚組LP。500枚プレスで、限定カラー・ヴィニールは存在しません。2013年リリース。

MSUO-38 SENOBYTE/ST (7")
USデス・メタル・バンドが2013年にCDRで発表したデビュー・デモをヴィニール化したもの。限定ブルー・ヴィニールも存在します。2014年リリース。

MSUO-39 RUIDO DE RABIA/Pequeñas Reliquias De Un Infanticida (12")
スペインの伝説的ハードコア・パンク・バンドの1992年発表デモをLP化したもの。限定カラー・ヴィニールは存在しません。2014年リリース。

MSUO-40 UNDERGANG/Søm Til Din Ligkiste (7")
Dark Descent Recordsと共同の1000枚プレスで2013年にリリース。ltd.200枚のレッド・ヴィニールも存在します。

MSUO-41 INTEMPERATOR/Stigmas Of Unspeakable Appetites And Carnal Voracity (TAPE)
2013年リリースの2ndデモ。

MSUO-42 FERETRUM/From Far Beyond (12")
AGGRESSOR、NECROPHILIACと並んでスペイン最古のデス・メタルとされるバンドの1992年カセット・アルバムのヴィニール化。スペインのBlack Mass Recordsとの共同による300枚プレスで、限定カラー・ヴィニールは存在しません。2013年リリース。

MSUO-43 RESPAWN THE PLAGUE/Gathering Of The Unholy Ones (7")
ギリシャのデス・メタル・バンドの1st EP。限定グリーン・ヴィニールも存在します。2013年リリース。

MSUO-44 BLACK ROCK/ST (TAPE)
GOREPHILIAのメンバーがやってるスピード・メタル・バンドの1stデモ。今回のメタル・パンク特集のように、メタル・パンクのあり方や偶発的な性質をイチから検証するにうってつけの素材とも言えるようなバンドですが、日本のメタル・パンク・ファンは手出ししないほうが無難なタイプです。先ごろデモ音源がLP化されたクラスト・パンクのWIND OF PAIN


MSUO-37


MSUO-38


MSUO-39


MSUO-40


MSUO-41


MSUO-42



MSUO-43


MSUO-44


MSUO-45

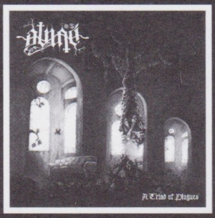

MSUO-46


MSUO-48


MSUO-49


MSUO-50


MSUO-52


MSUO-53

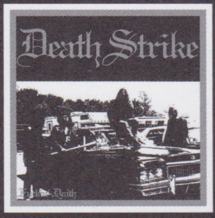

MSUO-54


MSUO-55


MSUO-56


MSUO-58


MSUO-58



DDR-34

と同じ感覚で、これぞ生粋のフィンランド流メタル・パンクなのかも知れません。2014年リリース。

MSUO-45 KEVER/Eon Of Cycling Death (12")
イスラエル出身デス・メタル・バンドの1st MLP。限定クリア・ヴィニールも存在します。2014年リリース。

MSUO-46 DEATHCULT/Pleading For Death... Choking On Life (12")
スイス出身デス・メタル・バンドの1st MLP。限定レッド・ヴィニールも存在します。2014年リリース。

MSUO-48 GHASTLY/Carrion Of Time (12")
フィンランドのデス・メタル・バンドの1stアルバム。限定イエロー・ヴィニールも存在します。2015年リリース。

MSUO-49 CORPSESSED/Abysmal Thresholds (12")
Dark Descent Recordsとの共同でリリースされた1stアルバム。限定シルバー・ヴィニールも存在します。2014年リリース。

MSUO-50 TRENCHROT/Necronomic Warfare (12")
USデス・メタル・バンドの1stアルバム。限定500枚プレスで、当初はそのうちの100枚をレッド・ヴィニールにする予定でしたが、トラブルが発生してレッド・ヴィニールは実際は20枚にも満たない枚数しか現存していません。後に代替えでクリア・ヴィニールが100枚プレスされました。2014年リリース。

MSUO-52 WORMRIDDEN/Festering Glorification (7")
2015年リリースの2nd EP。限定ブラウン・ヴィニールもあります。

MSUO-53 BINAH/A Triad Of Plagues (7")
Dark Descent Recordsとの共同でリリースされた1st EP。限定パープル・ヴィニールも存在します。2014年リリース。

MSUO-54 FUNERARY PIT/The Titan Sea (12")
GOSPEL OF THE HORNS、NOCTURNAL GRAVES、DENOUNCEMENT PYREメンバーによるオーストラリアのスラッシュ・ブラック・デス・メタル・バンドの1st MLP。ltd.100枚のグリーン・ヴィニールも存在します。2014年リリース。

MSUO-55 SHEIDIM/ST (7")
スペインのブラック・デス・メタル・バンドの2015年デビューEP。限定300枚リリース。

MSUO-56 SWALLOWED/Lunarterial (2x12")
2014年リリースの1stアルバム2枚組LP。レギュラーのブラック・ヴィニールが800枚プレスらしいので、限定ホワイト・ヴィニールは恐らく200枚プレス?と思われます。

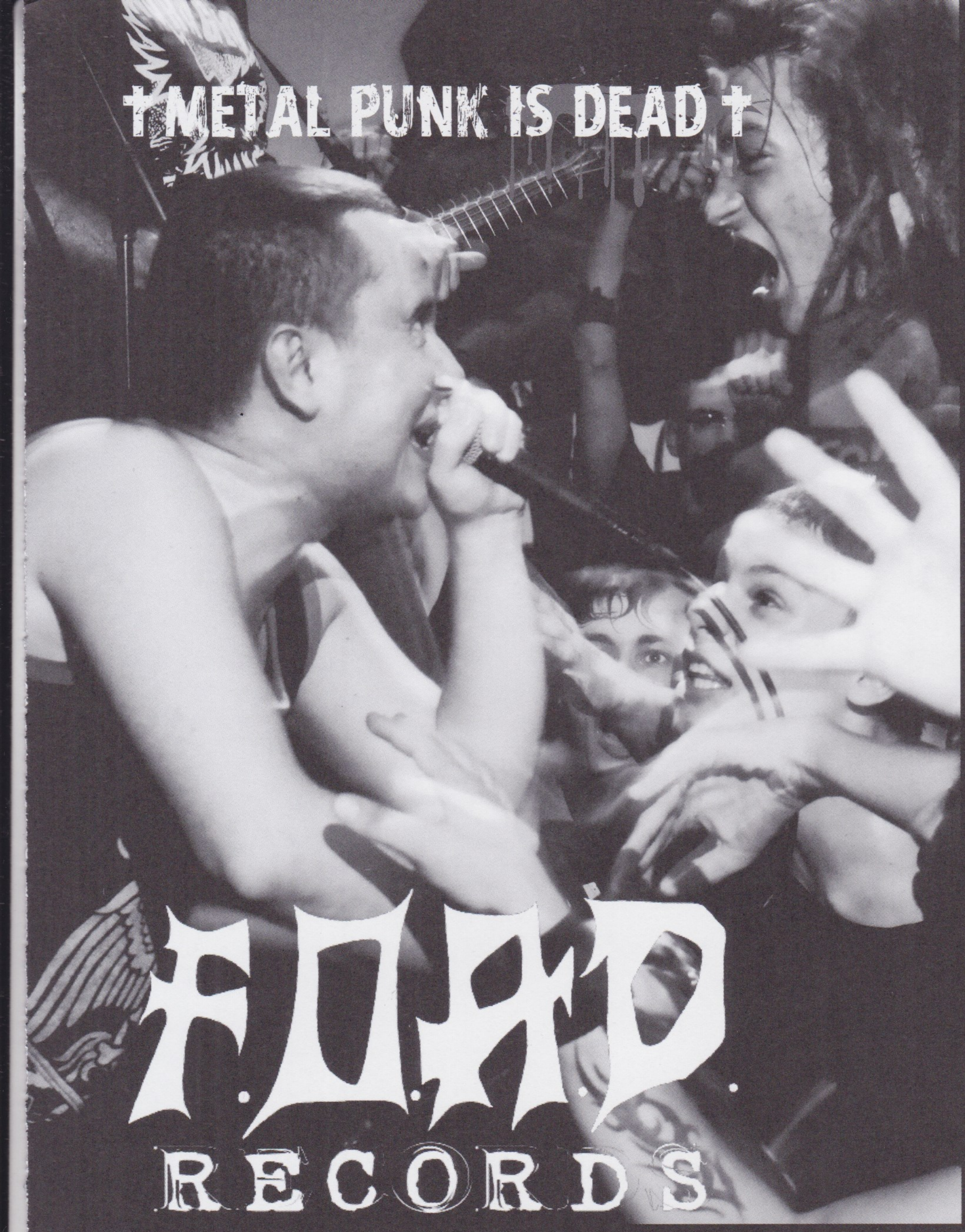
***MSUO-58** INTEMPERATOR/Blood Blackened Atriums (7")
1st 7"。限定レッド・ヴィニールも存在します。2015年リリース。

***MSUO-58** NECROMANIAC/Morbid Metal (TAPE)
BINAH、MACABRE OMENメンバーなどによるUKロンドンのスラッシュ・デス・メタル・バンドのデビュー・デモ。限定200本で、20本のみカセット・テープが白いものが存在します。2015年リリース。
(*元々チョンボの少なくないレーベルなのですが、INTEMPERATORの7"とNECROMANIACのテープは同じカタログ番号になってしまったようです)

***DDR-34 (MSUO DISTRIBUTION-01)**
DEATH STRIKE/Fuckin' Death (12"+7")
MASTERのPaul Speckmannによるデス・メタル・バンドの、オリジナルは1991年にNuclear Blastから発表した85年録音デモ・アルバムのボーナスEP付き再発盤。今回のディスコグラフィーはMSUOがディストリビューションした他レーベルのものは除外していますが、このLPだけは性質が違いますので含めました。これはUSのDark Descent Recordsによる再発なのですが、アナログ盤のマトリクスはカタログ番号のDDR-34とは刻まれていなくて、MSUO DISTRIBUTION-01となっています。US流通がオリジナル盤と同じ金色、UK/ヨーロッパ流通が銀色のジャケで、盤色もジャケと合わせたゴールド・ヴィニールとシルバー・ヴィニールが、それぞれ各ltd.100枚で存在します。2011年リリース。



†METAL PUNK IS DEAD†



F.O.A.D. RECORDS

イタリアのグラインド・コア・バンド:CRIPPLE BASTARDSのVoにして、メタル&パンクの再発を手掛けるレーベル:F.O.A.D. Recordsを現在率いし漢:Giulio。2006年にはE.U.'91 SerbianLeague(当時のGiulioのレーベル)について、2008年にはCBについてドール誌でインタヴューさせてもらっているので、なんと今回で3度目のインタヴューです!コレクターを魅了してやまない、メタル&パンクのリイシューを連発しているF.O.A.D.は、本特集に欠かせない存在でしょう。尚、スペースの都合で載せられなかったリリース作品の画像は、裏表紙(表4)にドカドカッとカラーで掲載してあります。

■F.O.A.D. Recordsのヒストリーを読んだら、"F.O.A.D.は1986年にMarco Garripoliが、ゼロックス・コピーのスケート/ハードコア/スラッシュ・ファンジンとして始めた"ってあったのですが、そもそもMarco Garripoliって誰ですか?あなたはどうやって、F.O.A.D. Recordsと知り合ったの?STINKY RATSのCDはE.U.'91 SerbianLeagueとF.O.A.D. Recordsの共同リリースでしたよね。

「Marco GarripoliはF.O.A.D. Recordsの創立者だよ。彼が1989年(※多分、1986年の間違い)にゼロックスのファンジンとして始めて、7号ほど発行したんだ。その全てをここで見られるよ。http://www.foadrecords.it/index.php/foad-records-history-fanzine/。それがレーベルに発展してね、最初はカセット・テープでリリースしていた。90年代には、彼はトリノでレコード・ストアも何軒かやっていたんだぜ。俺たちが初めて出会ったのは90年代の前半のことさ。素晴らしい友人同士になれたね。だけどその後、15年間もお互いに会うことはなかったんだ(人生はあっという間だ!)。しかし2005年のある日、俺たちはショーで再会を果たした。そして俺たち2人とも、未だにハードコアとレコードをリリースすることに関して、同じくらいの情熱を共有していることが分かったんだ。だからSTINKY RATSのディスコグラフィーCDを共同リリースしたのさ。そしてちょっとずつだけど、彼はCRIPPLE BASTARDSのローディー/マーチャンダイズ担当としても働き始めてくれるようになっていった。そうして、一緒にツアーをまわっているうちに、俺たちの力を一つに合わせて、レーベルを真剣に運営してみないかってことを話すようになった。俺は"F.O.A.D."の名のもとに彼がやっていたことのスタイルが好きだったから、この名前を残したまま、力を合わせて、俺たちが若かりし頃に夢中になったハードコアやメタルのクラシックを、最高のクオリティの仕様で再発していくことにしたんだ。主にヴィニールでね。復活を果たしたF.O.A.D.の最初のリリースはNECRODEATH『Into The Macabre』のゲートフォールドLPだった。その後、多くのリリースが続いていくことになる。俺たちは、4年間ほど一緒に働いていたかな。だけど、色んな理由から彼はレーベルを辞めることにしたんだ。レーベルを運営する上で求められる大変な仕事っていうのは、メール・オーダーや卸し、トレードに関することだけじゃない。ショー/フェスティヴァルのブースでレコードを売るために、あらゆる場所を旅してまわるという現実が、必然的に含まれているんだよ。そうすることによってレーベルを続けるための資金を得ることができる一方で、ものすごいストレスにもなる。自宅/家族から離れて、どんな天候でもお構いなしに一晩中、重たい荷物をヴァンから降ろしたり、詰め込んだりして、それから延々と運転して、各地のブッキングを仕切っているマフィアに対処しなくちゃいけない(多くの人は知らないだろうけど、ここイタリアをすごく息苦しくしている要因がこれさ)。4年経ったときに、彼はもう我慢できなくなってレーベルを辞めて、俺に譲り渡したんだ。今、俺と一緒に仕事をしている仲間はLucaという昔からの友人でね、"Massacro Records"というレーベルも運営していた奴なんだ。だから今のF.O.A.D. Recordsは俺とLuca、それに時々手伝ってくれる友人が何人かいるね。これがF.O.A.D.のストーリーさ!」

■現在、F.O.A.D. Recordsの主立ったリリースは80年代のメタルやハードコアの再発ですよね。昔からメタルは好きだったんですか?以前にインタヴューしたときには、全然メタルについては話しませんでしたが。

「うん、80年代後半に音楽にのめり込んでいった子供としては、パンク/ハードコアとメタルに接触したのはほぼ同時だったね。だからどっちもずっと楽しんできたんだ。ただメタルに関して言えば、俺はすごくオールドスクール

で、とにかくそのバンドの初期の頃の、スピリットとエナジーが好きなんだよね。特にスラッシュやスピード・メタル、デス・メタルに関して言うとね。俺たちにとって、特別な意味のあるバンドをリリースするのが好きなんだ。テープのトレードに夢中になっていた頃、バンドが俺たちの情熱を駆り立て、アンダーグラウンドのカルチャーになっていた当時のバンドをリリースしたいのさ。俺がメタルを聴くようになったのはNECRODEATHやSCHIZO、JESTER BEASTから始まり、それから海外のS.O.D.、WEHRMACHT、MALEVOLENT CREATION、POSSESSED、BULLDOZER、その他にも色々と聴くようになっていったんだ」

■あと、F.O.A.D. Recordsのリリースの多くがヴィニールですよね。E.U.'91 SerbianLeagueはほとんどCDでしたが、ヴィニールとCD、どっちが好きなの?

「音楽狂としては、ありとあらゆるフォーマットが好きだよ。だけどもちろん、俺はヴィニールを好む傾向にあるね。君も知っている通り、俺はジャパニーズ・パンク/ハードコアのマニアックなコレクターだし、多くの日本の優れたバンドが、CDでしかリリースをしないってこともある。だからあらゆるフォーマットに対してオープンなのさ。そうしないと、俺のコレクションは制限されちゃうしね。F.O.A.D.のリリースのほとんどがヴィニールなのには、色んな理由があるんだ。ゲートフォールドのジャケットに、膨大な数のバンド写真にフライヤー、ライナーノーツなどを収録した分厚いブックレット/インサート。そういったものが、レコードのパッケージを真に完璧なものにしてくれるんだ。俺たちのリリースする作品にとって、ヴィニールは完璧な性質を有しているってわけさ。それに、CDの市場はヨーロッパではかなり衰退してしまっている。特にメタル・シーンではね。だからCDしかリリースしないとなったら、F.O.A.D.が生き残ることはできないだろうね。でも、CDを完全に排除することなんてしないよ。3〜4枚のヴィニールをリリースする毎に、俺たちはCDや、カセット・テープだってリリースしている。全てに対してオープンなのさ」

■リリースするバンドはどうやって選んでいるんですか?

「俺たちがリリースするのはシンプルさ。その音楽を好きで、俺たちにとって特別な何かを意味しているもの。特に、若かった頃の俺たちが当時夢中になっていたものをリリースしているんだ…。レーベルとしてはスラッシュとハードコアのクロスオーヴァーに力を入れている。俺たちが選んでいるバンドが、この手のサウンドの先駆者であるのは見てもらえれば明らかだよね。CRYPTIC SLAUGHTERにWEHRMACHT、CRUMBSUCKERS、LUDICHRIST、RAW POWER、D.R.I.、RATOS DE PORAO、BROKEN BONESといったバンドさ…。いずれのバンドも、レイジング・ハードコア/パンクとメタルの最良な要素を取り入れて、ダイナミック且つパワフルにブレンドしたよね。それに、俺たちの国の最重要パンク/ハードコア・バンドにも多大なる労力を費やしてきた。UPSET NOISE、EU'S ARSE、再びのRAW POWERにNERORGASMO、BLUE VOMIT、UNDERAGEとかね。あとは、俺たちはグラインド/ノイズの愛好者でもあるから、この手のジャンルのクラシックと評されているバンドには、絶えず注目しているよ。FEAR OF GOD、TERRORIZER、NAUSEA LA、SORE THROATなどさ。俺たちがリリースするときに最も重視している要素は、バンドとのポジティヴなコミュニケーションかな(多くの場合、俺たちは友人となり一緒に作業をする)。それと、俺たちが使用する音源のクオリティもね。俺たちのリリースするもの全ては、音質に関して最上級でなければならないし、パッケージも完成度が高くなければならない。だからバンドにできうる限り最良のマスター音源を提供してもらうことが大切なんだ。別の方法としては、俺たちにはダイ・ハード・コレクターたちの素晴らしいネットワークがあるからね、彼らに協力してもらい、信じられないほどに貴重で高音質な音源を手に入れることもある。時々、バンドが用意してきたものよりも音が良かったりするからね!」

■リリースした中でも、印象深いバンドというのは?

「そいつは難しいな…。リリースしたどのバンドも好きだからね。俺が"伝説的"だと評している作品に、S.O.D.の「Crab Society North」デモ・テープというのがあるんだ。ノイズ・コアの先駆けにして重要作品だよ。Danny Lilker(※S.O.D./NUCLEAR ASSAULT/ANTHRAX/BRUTAL TRUTH etc)の協力を得てリリースしたんだけど、ANTHRAXのメンバーの2人(ScottとCharlie/※両者ともS.O.D.のメンバーでもある)が怒り狂っちまってね。彼らにしてみれば、あの作品はカセット・テープでわずかに存在するだけの、ごく限られたもののままにしておきたかったみたいなんだ。それで彼らはMegaforce(※S.O.D.やANTHRAXが所属している大手レーベル)の連中をけしかけて、俺たちを脅迫してきたんだ。すごいストレスだったよ。だけどDannyとBilly Milano(※S.O.D./M.O.D. etc)は完全に俺たちの味方だった。でも今年、S.O.D.は結成30周年のアニヴァーサリーだから、「Crab Society North」の音源が欲しくなって、Megaforceは俺たちに連絡をしてきているんだぜ。F.O.A.D.のリリースで使った音源が、現存するものの中でもベストな音質だからね。だからデジタル・コピーさせてくれと頼み込んできているんだ。『Speak English Or Die』(※S.O.D.の1stアルバム)の30周年スペシャル盤のボーナスとして収録したいんだとさ!!形勢逆転、俺にとっては小さなDIYレーベルが、巨大レーベルに勝利した瞬間だったね。その他のリリースで、俺が"印象的"だと評しているのは、そうだな、CRUMBSUCKERSのコレクションに、『World Downfall』のスタジオ・セッション時の未発表曲1曲も収録したTERRORIZERのコレクション、それからRUPTUREの『Corrupture』(俺のもう一つの、最高のお気に入り作品)、それにSORE THROATにFEAR OF GOD…。どの作品も、俺たちに多大なる影響を与えたものさ」

■DISCHARGEの『Live At The City Garden』も最近リリースしましたよね。このLPの完成に至るまでの経緯を教えてください。あなたがDISCHARGEにオファーしたの?

「DISCHARGEのメンバーとは連絡を取り合っていたんだ。彼らのイタリアでのショーのいくつかをブッキングしたのは俺たちだからさ。BROKEN BONESのブッキングもやったよ。それで、Tezzと話すようになってね。その縁でBROKEN BONESの『Dead And Gone』MLPをリリースすることになったんだ。その後にDISCHARGEの『Live At The City Garden』LPを最高の形で再発したいと申し出た。この件に関してはRainyと連絡を取り合って、再発できることになった。まだ確かではないけれど、将来的にはDISCHARGEの作品をもっとF.O.A.D.から出せるかもしれないんだ。楽しみにしててくれよ!」

■あなたたちは"United As One"フェスティヴァルの企画者ですか?NUCLEAR ASSAULTにTOXIC HOLOCAUST、RATOS DE PORAO、RAW POWER、CRIPPLE BASTARDS等々と、すごいラインナップですよね。フェスはどんな感じでしたか?また、このフェスのモットーは?

「そうさ、俺たちの年に一度の、夏の野外フェスティヴァルなんだ。それだけじゃなく、冬のイヴェントとして"Night Of The Speed Demons"フェスティヴァルというのもあって、それは10年前から開催しているんだけどね。"United As One"フェスが始まったのは2013年のこと。俺たちの仲間の一人がAGNOSTIC FRONTを招聘して開催したんだ。それから2014年にはRAISED FISTを呼んだ

りね。俺が完全に関わって開催したのは今年、2015年からで、ラインナップは君が言ったようなバンドさ。最高だったね、1000人以上の人たちがやってきて、この始まって間もないフェスティヴァルにとってはポジティヴな結果を残したよ。イタリアのボヴィーリオという、RAW POWERのホームタウンである快適なエリア、その野外でやったんだ。フェスティヴァルの狙いというのは、F.O.A.D.のそれと、とても類似している。異なるジャンルの間にある距離を、ハードコアやスラッシュ、そしてグラインド・コアのエナジーで満たすべく、俺たちはバンドを招聘したのさ」

■今のイタリアのメタルやハードコアのシーンはどうなっているんですか?盛り上がっていますか?

「あんまりノスタルジックに浸りたくはないんだけど、今のイタリアのシーンはかなり不活発だね。良いバンドはそれほど多くないし、心底オススメできるバンドは皆無さ。メタルに関して言えば、GAME OVERとULTRA-VIOLENCEが新しいスラッシュ・メタルのバンドとしてはベストかな。デス・メタルならPROFANALとHELSLAVE。ハードコアならEDが俺は好きだけど、それでおしまいさ。80年代のパンク・シーンのバンドで、今でも活動を続けていたり、再結成したバンドならいくつかいる。RAW POWERにUPSET NOISE、NABAT、EU'S ARSE、WARFARE、BLUE VOMIT、CRASH BOX、ATROX、INDIGESTI、BLOODY RIOT。いくつかはまだイケているけど、いくつかは完全にエナジーを失ってしまっている。最新の、ソーシャル・ネットワークってやつを全ての物事の中心にそえてしまっているから、ここのキッズの多くは、音楽へのアプローチの仕方を見誤っている。盲目的だし、酩酊しているようなものさ。だからキッズは音楽への情熱を燃やして成長することもなければ、以前の世代がその活力の源にしていた、創造力というやつも持っていない。紛い物のバンドに飛びついて、そんなバンドをお手本にするようになる。自分自身で何かを創造することなんてしやしないんだ。イタリアは、創造性に富んだ伝統を有する国だってのに残念だよ。70年代のプログレ・ロックのクラシックなバンドや、80年代当時の怒り狂ったパンク/ハードコアを思い出してくれよ」

■メタルとハードコアはあなたにとって、近しい音楽ですか?それとも別物?両者の関係についてどう考えていますか?

「エナジーとイマジネーション、そしてスピリットを生み出すならば、それらは類似しているさ。創造性のスピリットは、あらゆるアンダーグラウンド・シーンに共通しているだろ。NEGAZIONEもこう歌っていたじゃないか、"The spirit lives on…"ってね。だから俺はメタルとハードコアを、近しいものとみなしている。それらが心の底から湧き上がる感情を表現し、服従や無関心なんてものに対抗する限りはね」

■あなたは日本のハードコアの熱心なコレクターでもありますが、日本のメタルに関してはどうなんですか?

「そうさ、俺はジャパニーズ・パンク/ハードコアのマニアだよ。君たちの国のシーンには、今でも素晴らしいバンドが数多くいると思っている。常にグレートなバンドや新しいバンドを探しているから、日本のバンドには驚かされっぱなしだし、情熱を注ぎ込んでいるよ!蒐集において、今はまだ、それほど日本のメタルには力を入れていないけど、もうすぐ集め始めるんじゃないかな。とは言っても、SABBATやABIGAIL、DORAID、BARBATOS、JURASSIC JADE、GENOCIDE NIPPON、CASBAH、ZADKIEL、WOES、DOOM、FRONT GUERRILLA、GEIZZ、SABER TIGERのレコードは持っているよ。他にも挙げ忘れちゃっているけど、もっと持っているはずさ!」

■このインタヴューは主にF.O.A.D. Recordsについてなんですが、あなたのバンドであるCRIPPLE BASTARDSの近況も少し聞かせてください。

「CRIPPLE BASTARDSは一年前に新しいドラマーを迎え入れたんだ。世界中でショーをやっているよ(新たなUSツアーを11月に予定しているんだ)。ゆっくりだけど、次のアルバムのために曲も作っている。その他にも、デカいボックス・セットにも取り掛かっていて、LPが5枚にCDが2枚のセットで、全てのシングルと、コンピレーションへの参加曲、さらにはレアな未発表曲も収録してあるんだ。F.O.A.D.からリリースする予定だけど、時期は未定だね。日本にも2016年か2017年に戻れたらと願っているよ」

■レーベルのリリース予定や目標は?

「F.O.A.D. Recordsには大量のリリース予定があるし、毎月2タイトルはリリースし続けるつもりさ。まさにこのインタヴューに答えている今、俺たちは『ITALIAN PUNK/HARDCORE1980/1989–IL FILM/THE MOVIE』(DVD)の発売を待っているところなんだ。同様に、1989年の未発表セッション12曲を追加したRAW POWERの『Mine To Kill』の新しいエディションももうすぐだね。あとは、RAW POWERのCD 4枚組みボックス・セット『The Albums 1982-1989』もね。これらが終わったら、ヴィニールのリリースがたくさん控えている。俺たちの目標は、この数年間やってきたように、レーベルの好調を維持していくことさ。個人的な目標としては、日本のハードコア/パンクをF.O.A.D.からリリースしたいってことがある。だからこれを読んでいる誰かが、何かしらアドヴァイスやコネクションに関して協力してもらえるなら、俺たちに連絡をしてほしいな!難しいことは分かっているけど、俺は特に九州ノイズ・コア/パンク・シーンが好きでね。伝説的なバンドを数多く、それこそ書ききれないくらい輩出しているしさ。誰かF.O.A.D.からコンプリート・ディスコグラフィーを出してもいいぜって人がいたら、俺はこの手の類いのマニアだからね、全力のエナジーと献身を捧げるつもりでいるよ!」

■インタヴューさせてくれてありがとう。日本の読者にメッセージをお願い。

「俺たちのリリース予定に注目し続けてくれよな。そして、俺たちのリリースをディストリビューションしてくれている、みんなの地元のレコード店をサポートしてもらいたい。Record Boyであったり、BaseやAnswer、Miseryなどといった店さ。読んでくれてありがとう。何かF.O.A.D.について質問があったり、俺のジャパニーズ・ハードコア/パンクにかける情熱についてだったり、何かアドヴァイスがあったら、foadrecords@gmail.comまでメールしてもらいたい。俺かLucaが答えるぜ。俺が日本を訪れているときに、また会おう!」

レーベル www.foadrecords.it
メール・オーダー www.scareystore.com





M.F.G from G.A.T.E.S Metal Punk Death Squad

本稿では、M.F.G(二ツ木正康)氏のインタヴューをお送りします!前回インタヴューしたのが6年も前のことなので(vol.2に掲載)、改めて彼が会長を務めているMetal Punk Death Squadの成り立ちから、昨今のメタル・パンク事情までを語ってもらいました。

[8月22日/サイゼリア高円寺店]

■今回、特集のタイトルを"Metal Punk Is Dead"でいこうと思ってて。

「そのタイトルで、俺の第一声が"死んでないぜ!"っていう(笑)」

■(笑)。前にインタヴューしたのが2009年の11月22日、20000Vが入っていたビルが火事になった日なんですよね。で、6年も経ったので、まずはMetal Punk Death Squad(以下MPDS)について改めて。

「MPDSっていうのは、BLÜDWÜLFとG.A.T.E.SとTOXIC HOLOCAUSTとDestroy RecordsのStaffとで始めたんだけど、当時はMyspaceで、今はFacebookになって大分、様変わりしましたね。というのも、TOXIC HOLOCAUSTは確実にビッグなバンドになっていて、世界中をツアーする中堅どころになっているから。BLÜDWÜLFは解散してしまって、今はROTTEN UKっていうDISORDERスタイルのバンドになってて。(ヴォーカルの)Jimmiのインタヴュー(vol.14に掲載)でも言っていたけど、元々MPDSはメタルの部分が強かったけど、今のJimmiはそれをパンクの視線から見て、ハードコア・バンドをやっている。Destroy Recordsは今はあんまりリリースをしていないけど、日本のCHAOS CHANNELのリリースとかをこの数年ではしているはず。俺がやっているG.A.T.E.Sはベースが抜けてしまったんだけど、今はTERROR SQUADの前川氏に手伝ってもらって復活して。つい先頃、8月にライヴをやりました。まぁ、MPDSっていうのはG.A.T.E.SとBLÜDWÜLFがスプリットを出すというので始まったんだけどね。オリジナル(設立者)の奴らも生きているし、その後に出てきたバンドも山ほどいるぜ!」



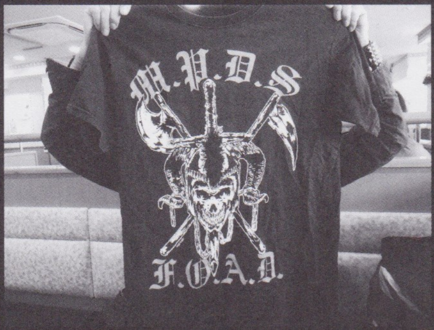
■前のインタヴューだとMPDSの会員は2000〜3000人って言っていたけど、今は何万人くらいに(笑)?

「(笑)。一時のブームは去り、今ではMPDSを掲げなくても、"Metal Punk Till Death"の生活様式をしている奴らが世界中に少しはいるんじゃないだろうか(笑)?いや、います!」

■でも、最近もノルウェーのENTER OBSCURTYみたいなMPDSを掲げているバンドが出てきていますよね。

「"誰が始めたのか?"なんてのは若い世代にとってはどうでもいいことになっていて。観光土産屋みたいなのが(MPDSの)マグカップとかTシャツを作ったりしてて。俺が最初に考えていたロッカーズの59 CLUBとかのように、ファッションのアイテムとして使われているよ





うなニュアンスもある。それが成功しているかどうかは分からないけど。グッズを色々と持ってきたんだよね(と、テーブルに広げる)」

■こんなにあるんですかー。

「カナダの奴が作ったり、ドイツ在住のメキシコ人が作ったり、Jimmiが作ったりね。ペンダントは俺の後輩が銀細工をやっていて作ってもらった。バッチはCHILDREN OF TECHNOLOGY(以下COT)の連中が作ったのか」



■昔、バッチを配ってましたよね。

「今でも配っているよ。この間のG.A.T.E.Sのライヴでも配ったし、欲しい人がいればあげますので。あと、このTシャツはTOXIC HOLOCAUSTがマーチャンダイズとして売っているもので(笑)」

■どこにもTOXIC HOLOCAUSTって描いてないのね(笑)。

「そうそう、MPDSだけで。このマークはJoel (TOXIC HOLOCAUSTのギター・ヴォーカル)の彼女が描いたんだよね。他にもMPDSのジャケをいくつか描いていて。あとはJimmiがデザインを描いたTシャツもあって、それは(高円寺のRECORD)BOYで売っていたね」

■最近、会長としての活動は?

「FacebookにMPDSの会員用のコミュニティがあって、それは管理している奴の認証がないと見れないんだけど、もしも日本で見たいけど見られない人がいたら、俺のFacebookにメッセージをくれれば見れるようにできると思う。そこでオススメの音源を書いてたりするから。管理しているのが昔メキシコ支部をやっていた奴で、今はドイツに移住していて、INDIAN NIGHTMAREっていうバンドをやっているんだけど、そいつがほぼ今のMPDSを仕切っている。熱心にやっているんだけどね、俺に"MPDSのこんなロゴを作ったんだけど"って連絡してきたり。それで、おこがましく言えばアドバイスしたり、そういう、MPDSを高らかに名乗っている奴らには、Facebookというツールがあるおかげで頻繁にコンタクトはとっているね」

■じゃあ、メタル・パンクそのものについて。

「MPDSというのは一つのキッカケに過ぎなくて、当時から"MPDSとは名乗らないMPDSなバンド"というのはいっぱいいたわけで。カナダのINEPSYとか、今はビッグになっているアメリカのMIDNIGHTとか。MPDSはただ、分かりやすく具現化するアイデアだった。メタルとパンクに影響を受けてバンドをやっている奴らは山ほどいるからね。ABSOLUTっていう、MIDNIGHTのギターがカナダでやっているメタル・クラストとか。メタル・クラストと言っても、AXEGRINDERみたいなのじゃなくて、メタル・エッジを持ったD-Beatのバンドで。あとはMUNICIPAL WASTEのメンバーがやっているBATも、メタルとパンクが好きな人には聴けるバンド。まぁ、元々、G.A.T.E.Sにしたって"MPDSだぜイェーイ!"って言っているのは俺だけだし」

■たしかに(笑)。

「BLÜDWÜLFもJimmiがやっていただけだから。MPDSと言ってしまうと、昨日始めたようなガキが30年間メタルやパンクに従事しているような人に対して、"Hey, man!俺たち仲間だぜ!"って言ったりして、それは厳しいものがあるから、そういった意味でMPDSが嫌いという奴も山ほどいるし」

■"猫も杓子もメタル・パンク"みたいな時期があったようにも思うんですけど。

「その傾向は現在も引き継がれていて、その部分を嫌う人は多い。チルディッシュ(※子供っぽい)な感じだと。ABIGAILのYasuyukiさんが一人でやっているプロジェクトのBARBATOSなんかに影響を受けたバンドは、その"猫も杓子も"的な勘違いをしているかな。Yasuyukiさん自身を俺は尊敬してるけどね。まぁ、要するにちゃちいバンドが山ほどいる。日本だとあまり馴染みのないスタイルなんだよね、BARBATOSは。日本のロックンロールっていうのは、GG Allinみたいなロックンロールじゃないじゃん。もちろん日本にもGG Allinが好きな人はいっぱいいるけど、ネイティヴな日本のロックンロールっていうのは違う。だけどアメリカ人とかの血に流れているロックンロールは、GG AllinとかMURDER JUNKIESみたいなので。思想は別にしておいてね。ああいう種類のロックンロールが根づいているから、BARBATOSが外国で受けるっていうのはよく分かる。日本でロックンロールって言ったら、やっぱり横浜銀蝿とかじゃない?Chuck Berry～"Johnny B. Goode"みたいな、あれが根本にあって。そういった意味で言うと、IRON LAMBとかRAW HIDEといった、現役のアウトローな人たちがやっているバンドは、日本では根づかないロックンロールだろうけど、メタルとパンクが好きな奴にとっては聴く価値があると思う。あと一つ、MPDSムーヴメントがすごかったなと思うのが、日本のヘヴィ・メタル・レーベルの





Spiritual Beast、SOLITUDEというバンドの杉内さんのレーベルなんだけど、そこからアメリカの(メタル・パンクの)SPEEDWOLFとカナダのCHAPELというバンドの日本盤CDが出ていて。これは直接的ではないにしても、メタル・パンク・ブームで一端を担ったと言えるかもね。あと、そう言えばCOTは消えたね。一年以内くらいに2ndアルバムを出したけど、それ以降、彼らは見なくなったな。最後に見た写真だとゴスっぽくなっていたから、メタルやパンクから離れて、そっちのルーツに移ったのかもしれない」

■SHITFUCKER(vol.12に掲載)なんかはどうです?

「SHITFUCKERは、FEAST OR FAMINEという90年代にクラストをやっていた連中が始めたデトロイトのバンドなわけだけど、前身はREAPERというANTISECTスタイルのメタル・クラストで格好良かったね。SHITFUCKERはCOTやブラジルのWHIPSTRIKERと同じ世代になるのかな。WHIPSTRIKERはMPDSを掲げて世界中をロード・クルーしているバンドで、あとはLAのIRONFIST、フィンランドのBONEHUNTER辺りが、MPDSと声を上げて活動しているね。東南アジアのインドネシアやマレーシアにもMPDSと名乗っているバンドが多くて、"メタルとパンクに影響を受けているバンドです"というようなアイコンになっているよね」

■そもそもの話しなんですけど、メタル・パンクって何ですか?

「人によって色々見解があるだろうけど、具体的に言うと、田舎の学校でパンク・バンドを組みたい2人がいるんだけど、メンバーがいない。だからパンクの2人は、メタルの2人を誘って、ピストルズのカヴァーをやってみる。それがDISORDER〜DISCHARGEとなっていくんだけど、誘ったメタルのメンバーのメタル要素がどうしても抜けない、と」

■なるほど(笑)。

「そういったものから、変なケミカルが生まれる。音楽的に言えばね。精神的に言えば、もうメタルとパンクは本当に全く違うもので。パンクは基本的にアティテュードであり、メタルは逆に、それなりに楽器の訓練もいるし、準備もいる。パンク・バンドを組む感覚でメタル・バンドは組めないだろうし。メタルには様式美があって、ある程度のルールがあってその上を添っていくのが基本形だから。パンクはルールを壊していくスタイル。違うものだけど、なんでメタル・パンクになるのかと言えば、(学校の)クラスで仲の良い奴がメタルしかいなかったんだよ(笑)。だから本来はメタル・パンクなんてありえない」

■水と油みたいな。

「そうそう」

■けど、水と油しかなかったんで、(無理矢理)混ぜたらドレッシングになった、みたいな(笑)。

「飲めないけどドレッシングにはなった(笑)。例えば日本のオリジナルのハードコア・パンク・バンドを見ていてもさ、どう見たってパンクス以外の何者でもないのに、出てくる音はメタル・エッジで。GASTUNKとか格好良いもんね。メタル・ミュージックに惹かれているけど、どうにも人間がパンクである。そういう人たちが生み出したスタイルを、物質的に研究してやろうとしたのが俺、…なのかな(笑)?!」

■ザックリとした質問ですけど、今、メタル・パンクはどういう時期にあると思いますか?成熟期にあるのか。

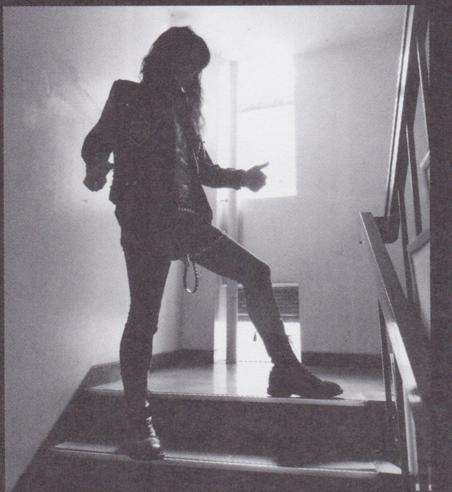
「メタル・パンク・ブームというのは影が差し掛かっていて流行っているスタイルではないかもしれないけど、最初に言ったように、"MPDSと名乗らないMPDSのバンド"は山ほどいるわけで。そういう人たちは活躍しているからね、常に。(メタル・パンクは)昔からあるスタイルだから。メタル・ミュージシャンがやっているNIGHTMARE CITYとか、スウェーデンのVAMPIREとか、あとは解散しちゃったけどBASTARD PRIEST、この辺りはメタルとパンクが好きならばストライクな、メタルとパンクの、どの角度から見ても格好良いバンド。要は(そういうバンドは)ロックンロールが根づいているってことなのかな。メタルもパンクも、元にあるのはロックンロールという部分で共通しているんだよね。VENOMしかり、MOTORHEADしかり」

■では、今後のMPDSの展望は?

「ドイツだとMPDSフェスみたいな、小さいながらも外国のバンドを呼んでライヴをやっているみたいだけど、どこかでデカイのをやれたらいいけどね。あとはみんなが地道に頑張ってくれたら。俺も含めてね(笑)。生き残っていくんじゃないかな」

■最後に、最近もレコードは相変わらず買っているんですか?

「減ることはなく、増え続けています。今日もゆっくりレコードを見たいのを我慢して、(インタヴューのために)早く切り上げてきたから(笑)」





†METAL PUNK IS DEAD†

メタル・パンク必聴ディスク・ガイド

山路氏から数年ぶりに連絡…、まぁ言われることは唯一つ、"原稿書いてくれない?"ってこと。それでなきゃ、俺に会う意味は無いもんな(笑)!最近はアンチ・コンピューターの俺もFacebook上で気が向いたときにYoutubeを貼り付けて"これカッコいいよ!"なんて若いパンクス、メタルヘッズの気を惹く為に投稿したりするが、文章になるとこれまた難しい…、しかもメタル・パンクの起源からやってくれとの事で、まぁとりあえずバンドの持つ思想とかそういったものは今回、置いといてサウンド面のみをクローズアップして幾つか紹介してみたい。

TEXT:二ツ木正康(G.A.T.E.S/METAL PUNK DEATH SQUAD)

まずは基本となるバンドはVENOM、DISCHARGE、BATHORY、charged G.B.H.、TANK、SLAYER、METALLICAといったところか…。

どのバンドもメタルとパンクの両方に影響を受けて存在しており、そしてメタルとパンクに今尚、影響を与え続けている。これら神バンドを束ねる神の神が"MOTORHEAD"である。今回はこの辺のガイドは外すが、これらのバンドがオリジナルのMPDSなバンドであり正直ここで終わっていると言っても過言ではないが、人生をもう少し楽しみたいのでまだまだ先に進みたいと思う。

ただし、多少解説するとすれば、これらのバンドは"初期衝動とはなんぞ?!"という所から、コンセプトを持って作品を作り上げるという所までを網羅しているバンドであり、どの作品を聴いてもいろんな意味で必ず衝撃的な作品を作り続けている。特にMOTORHEADの中期アルバムは必聴である。

さて、突然だが、俺が推薦するメタル・パンクのバンドとは大変に奇妙なバンドのことを言うのだが、解り易い例だと、例えばANTI CIMEXは『Scandinavian Jawbreaker』①というメタル・パンクの名盤をリリースしている。彼らの場合、まずはD-Beatバンドとしてデビューをし、自分らの成長の過程で作り上げた作品が①であるということ。90年代初頭、彼らはBON JOVIなどにも影響を受けていたという事で、もしも～DISCHARGEマンがアメリカン・ロックに影響を受けたら～といったような作品が出来あがった。そうだ、一つ断っておかなければいけない事は、全ての作品は冗談ではなく大マジで製作されているって事。そこが重要だ。DARKTHRONEのFenriz氏が今、やっていることとは明らかに違う。

成長って事で考えると、COCやDRIなんかはメタル化して世間的に大成功した例である。そう、個人的な話だが30代も後半に差し掛かり最近、所謂USハードコアの難解さにより気づき、よって彼らに対する理解力が増してきたように感じている。中学生の時に初めて聴いたBLACK FLAGの『My War』は聴くのが地獄(アメリカ・ダークネス!)としか思えなかったが、これがカッコイイと思えればまずは第一歩、これは20代に突然訪れる。30代に入るとやんちゃに聴いていたスーサイダル一派のルックスや、逸話に沿わないサウンドの線の細さ、アメリカ人がDr.Martens姿でスラッシュ・メタルに寄っていく感が、よりトラディショナルに思えてくる。中でもSUICIDAL TENDENCIESのメンバーらによるNO MERCY『Widespread Bloodshed/Love Runs Red』PIC LP②はオススメだ。

USのバンドはFINAL CONFLICTやBATALLION OF SAINTSのようにパンク全開でありながら、メタル・テイストなギター・サウンドをぶち込んでいたバンドも多い。

元THE DESECRATORS(この発掘音源がまた渋い!)のGizz Butt加入後のENGLISH DOGS『Forward Into Battle』③も、charged G.B.H.の弟分としてデビューした要素を残すバッキングに、"部屋で一人、5年間練習しました!"みたいなリード・ギターがうるさいほどに自己主張するサウンドで、メタル・パンクの基本バンドである。

その他にはAMEBIXの後期作『Monolith』④、SLAYERとDISCHARGEの落とし子ONSLAUGHTの『Power From Hell』⑤、ex VARUKERSのSACRILEGE『Behind The Realms Of Madness』⑥なども、昨今のメタル・パンクの基本形とされている。

では、メタルの方向から次は考えてみたい。



①ANTI CIMEX『Scandinavian Jawbreaker』



②NO MERCY『Widespread Bloodshed/Love Runs Red』



③ENGLISH DOGS『Forward Into Battle』



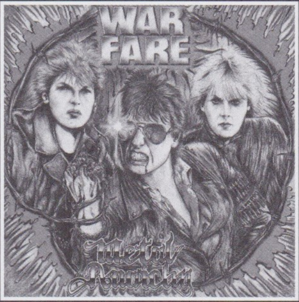
④AMEBIX『Monolith』



⑤ONSLAUGHT『Power From Hell』



⑥SACRILEGE『Behind The Realms Of Madness』



⑦WARFARE『Metal Anarchy』

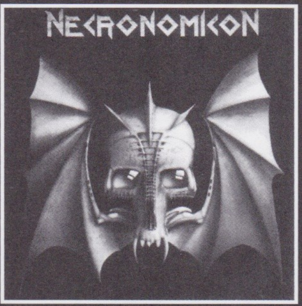

⑧GENOCIDE『Submit To Genocide』



⑨ABIGAIL『Ultimate Unholy Death』



⑩BARBATOS『Street Metal Gig In Ikebukuro!』



⑪NECRONOMICON『ST』



⑫BLACK UNIFORMS『Splatter Punx On Acid』



⑬THE BLOOD『Se Parare Nex』



⑭VENDETTA『Search In The Darkness』



⑮CORONER『Death Cult』



⑯DISCARD『Four Minutes Past Midnight』

UKのWARFAREはメタル・フィールドにいながらパンキッシュな側面を打ち出したバンドだった。DAMNED～TANK、そしてWARFARE『Metal Anarchy』⑦といった所か…。

アメリカの変わり種レーベルNew Renaissance RecordsリリースのGENOCIDE『Submit To Genocide』⑧は完全なアメリカン・ミーンワイル・パンクと言った形相で、初期はSmoke 7 Recordsからリリースを行ってはいたが、正にパラレル・ワールドを地でいっていたバンドであると思う。音的には基本に忠実とも言えるアメリカのパンク/ハードコア・サウンドであるが、そう、忠実すぎるサウンドな故に(奇抜すぎるファッションもか?!)ここ日本での知名度は徹底的に低い。簡単に言うと、これもやはりロックンロールの要素がGG Allin等に代表されるスカム・テイストなのだ。日本にも確かにGGのファンはいると思うが、実はこの要素は多くの日本人が持つ根本のロックンロール感とは互換性があまり無いと、俺はこれまで感じてきている。

現在の日本でこのセンスを持ち活動するバンドにABIGAIL⑨とBARBATOS⑩がある。昨今は町のレコード屋のフィルターをかけて紹介することで、ここ日本でも認知され知られるようになったが、ABIGAILもBARBATOSも海外においては、日本では考えられないくらい絶大な支持を受けている。よって、このABIGAIL/BARBATOSのリーダーであるYasuyuki氏の感覚を模倣したメタル・パンク・バンドはクソの山のように存在し、正直どれもショーも無いモノが多い。

昨今はこれらをMPDSのバンドと指し、アンチ派はこういったバンドとの共存を拒む(笑)。アンチ派の意見がよくわかるほどに浅はかに垂れ流されるメタル・パンク・サウンドには、言いだしっぺの俺もアンチ派に共感を覚えるほどである。

ドイツ出身、パンク・バンドから派生したと言われるスラッシュ・メタル・バンドのNECRONOMICON⑪も、ルックスがパンキッシュなメタルというようなことだけでは無く、サウンドの方もアジテーションしていてパンクスにも十分アプローチしていたバンドである。

ここで唯一無二のメタル・パンク・バンド/作品を紹介したい。まず一つはスウェーデンのMODERAT LIKVIDATIONやANTI CIMEXのメンバーらによるBLACK UNIFORMS⑫だ。このバンドは多くのタブーをぶち破ったバンドで、D-Beat、逆毛、鋲ジャン、リード・ギターを完璧に表現した。

『Megalomania』で有名なUKパンク/スキンズ・バンド、THE BLOODの2nd LP『Se Parare Nex』⑬は伝統的なUKハードコア・

サウンドにUKゴシック・ダークネスをぶち込み、更にはなんとVENOMのCronosのプロデュースにより作られた、まさにクロスオーヴァー!!な作品とも言えるだろう。音楽的なことだけでは理解不能なくらいにすばらしい作品を作り上げたのだ。実はこの後のTHE BLOODの作品も神秘的な雰囲気は後退するも、メタル・パンク的にはなかなか興味深い作品を作っている。後のスキンズ・バンドにメタル色を感じる時があるが、それはTHE BLOODの影響なのかもしれない。

フィンランド・ハードコア・バンドVARAUSを前身としたVENDETTAも、ハードコアを踏まえたメタル色の強い『Search In The Darkness』⑭という作品をリリースしているので、機会があったら聴いてみてもらいたい。

UKパンクスのメタル化における影響についての、MPDS的作品が近頃CD化され話題を呼んだ。それはスイスのスラッシュ・メタル・バンドCORONERの『Death Cult』デモ⑮だ。このデモは奇跡としか言いようが無い。なんとあのCELTIC FROSTのギター/ヴォーカル、Tom G. Warriorがゲストとしてヴォーカルをとっているのだ!!

CELTIC FROSTがアメリカ、ヨーロッパ問わず世界中のパンクスにまで影響を与えたのは周知の事実と言っても過言ではないが(SHEER TERROR!!)、CORONERのデモのUKにおける影響力は絶大であったと考えられる。当時を知る日本在住のMCR UKのMike氏によると、このCORONERのデモは、ダビングを重ねられギグの物販などで人から人へと伝わって行ったらしい。後期のANTISECTなどは、モロに影響を感じさせるリフまで飛び出させている。

それでは、ここらで個人的に好きな変わり種作品を幾つかピックアップしたい。

まずはスウェーデンのDisコア・バンド代表格のDISCARDの『Four Minutes Past Midnight』LP⑯である。オリジナルにはMOB 47のAkeが在籍していたという事でも有名なバンドであるが、このバンドのメイン・キャラクターはヴォーカリストであったようだ。

94年にリリースされた本作、曲は当時のデモ曲が中心ではあるが、ヴォーカリスト以外をスタジオ・ミュージシャン的なメンバーで構成していたようで、まずギターがおかしい。当時の音楽誌のレヴューでは、"唐突に泣きのギターが入っていて、こんなもん駄目でしょ!"みたいに書かれていたと思うが、今聴くと、泣きと言うよりアームを使って何とかBones(DISCHARGEのオリジナル・ギタリスト)が持っていたような雰囲気を出そうとしているんじゃないか、と思わせられる。全くもって雰囲気重視のメタル・ギターで、考え方としてはBonesの後のDISCHARGEのギタリスト、Poochのアナザー・ヴァージョンともとれるスタイルであると思う。いいねぇ!

HELLKRUSHERの1st LP『Wasteland』⑰も強力だ。HELLBASTARDとENERGETIC KRUSHERの合体バンドとして結成されたバンドであるが、この1stでのギタリストは雰囲気や、Bonesのように上手いトーンを持っているだけでは無く、Paul Gilbertのような本物の速弾きギタリストであるのが凄い!!しかしながら、恐らくパンクも通っているかのリフも強烈であるから更に凄い。

ブラック・メタル・バンドMARDUKのメンバーとANTI CIMEX、WOLFPACKのヴォーカリストJonssonのバンド、MOMENT MANIACS⑱も強力だ。伝統的なスウェディッシュ・デスのギター・サウンドを筆頭にしたアグレッシヴ極まりないバックに、あの雄叫びがプラスされているのだから。途中、時代を感じさせる、CATHEDRALに影響を受けたかのストーナー風味のよくわからない曲も挟むが、全編にわたって正に獣!といったサウンドである。

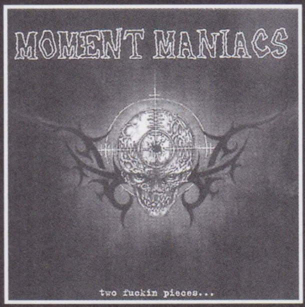
最後にVARUKERSで有名なヴォーカリストRatが、一時VARUKERSを解散させてメタルに挑戦していたと言われるARBITRATER『Balance Of Power』⑲を紹介する。見事な長髪と化したRatが、ハードコアとヘヴィ・メタルの狭間で叫び、結果ヴォーカル・スタイルとしてはVARUKERSとさして変わらない結果を生んでいるという、メタル・パンク好きにはたまらない内容になっている。ちなみにRatの相棒となっている感のあるVARUKERSギタリストのBiffも昔はメタルで、RKT Records(要チェック・レーベル!)よりMETAL MESSIAH⑳なるバンドでレコードをリリースしている。近頃CD化もされたので、長髪にDISCHARGE TシャツのBiffを眺めつつ、ARBITRATER同様、パンク・テイストのあるUKスラッシュ・メタルを堪能して頂きたい。

ここまで書いてきたが、これらの要素を含み、現在も活動しているバンドと言えばUSのMIDNIGHTだろう。カナダのABSOULTの敏腕ギタリストがメンバーになった近作『No Mercy For Mayhem』㉑は、今までより一癖も二癖も加えたメタル/パンク・アプローチを見せている。その他にも新旧沢山あるが、今回はこの辺で。

最後に、V.A『Devil Must Be Driven Out With Devil 毒を以って毒を制す』㉒は最高のメタル・パンク・オムニバスである。が、しかし、購入の際は焦らずステッカー・シート付きを探して手に入れて貰いたい。以上。



⑰HELLKRUSHER『Wasteland』



⑱MOMENT MANIACS『Two Fuckin Pieces...』



⑲ARBITRATER『Balance Of Power』



⑳METAL MESSIAH『Honour Among Thieves』



㉑MIDNIGHT『No Mercy For Mayhem』



㉒V.A『Devil Must Be Driven Out With Devil 毒を以って毒を制す』

MASACRE 68

前号で自身の密入国体験記を寄稿してくれた、NY在住のメキシカン・パンクス:Luis(DISCHAKA)から先日、「MASACRE 68のギタリストだったChopisのインタヴューっているかな?」とのメールが!MASACRE 68といえば、メキシカン・ハードコアのクラシックとして南米好きにはお馴染みのバンドですが、LuisとChopisは友人同士だったようで、この度貴重なインタヴューをお届けできることになりました。↓のメンバー写真も激渋です!ちなみにLuisのフル・ネームはJose Luis、そしてChopisの本名もJose Luisという、Jose Luis同士のインタヴューでもあります(Jose=ヨセフなので、よくある名前らしいです)。

INTERVIEWED:Luis

■まずは君自身について聞かせてもらえる?

「俺の名前はJose Luis(Chopis)。メキシコ・シティで生まれMASACRE 68でギターを弾いていた。あの抵抗が終止符を打つそのときまで、俺はギターを担当していたよ。メンバーや当時の他のバンドとは、本当に良い時間を過ごすことができたな」

■どのようにして音楽と関わるようになったのかな?何歳くらいのときだった?

「近隣で活動していた色んなロック・バンドから影響を受けて、俺は音楽にのめり込むようになったんだ。俺が暮らしていたところでは、バンドをやるってことは、反抗を意味していたからな。近所のリハーサル・スタジオにもよく通っていたんだが、そうすると自分でも音楽を始めてみたくなってね。母親がアコースティック・ギターを買ってくれて、叔父がその弾き方を教えてくれたんだ。自宅近くの教会でも教えてもらっていたんだけど、雰囲気が好きじゃなかったよ。すごく保守的でね。それから多くの音楽を探し回って聴くようになっていった。EL TRIにKISS、PEACE AND LOVE、PACO GRUEXO、BEATLESとかをね。俺がティーンエイジだったころの話しだね、14か15歳のころ、70年代の前半さ」

■君の最初のバンドは何だったのかな?

「俺が初めてやったのはEPIDEMIAというバンドだったな。実験的なパンクをプレイしていたけど、誰一人として楽器の演奏方法を理解していなかった。だから当初のサウンドは最悪だったよ。しばらくして、俺はギターを習いに行ったりしたから少しはまともに弾けるようになった。それでKAOS SUBTERRANEOやDESORDEN PUBLICOといったバンドから加入の誘いを受けるようになったのさ。その後、俺たちはDECADENCIAという新たなバンドを結成した。メンバーには本当に良いミュージシャンが揃ってね。Pig(ベース)、Velas(ドラム)、Chopis(ギター)、それにHilachos(ヴォーカル)というラインナップだったよ」

■メキシコのパンクはどのようにして始まったの?

「俺が覚えている限りじゃ、メキシコでパンク・シーンが巻き起こったのは70年代後半のことだったよ。メキシコではブルースやロック、ヘヴィ・メタルのバンド、IRON FISTやECLIPSE、あとはそうだな、









ANGELA MARTINEZ、TONCHO PILATOS、PEACE AND LOVEといったバンドが、第一世代のパンク・バンドに多大なる影響を与えていたんだ。第一世代ってのはREBELD PUNK、DANGEROUS RHYTHM、POLO PEPO、TNT、SOLUCION MORTAL、SINDROME DEL PUNKといったバンドのことさ。彼らは初期における最も代表的なバンドだった。メキシコのパンクの第二世代が始まったのは80年代の半ば。XENOFOBIAにSS20、MELI、MASACRE 68、DESCONTROL、HISTERIA、ATOXXICO、DECADENCIA、KAOS SUBTERRANEOとかだね。ただ、80年代半ばには暴力やドラッグ、アルコールの乱用による堕落なんて問題が数多くあった。パンクスのほとんどは、両親が飲酒問題を抱えていたりするぶっ壊れた家庭環境で育っていたから、その反動として、当時は問題行動を起こす奴らがたくさんいたのだと思う。だけどポジティヴなこともたくさんあったよ。パンク・コレクティヴみたいなものは、シーンの中でポジティヴな何かを始めることの助けになったからね。どのようにしてバンドを始めて、それを進めていくのかってことに、俺たちは意識的になったんだ。90年代の初頭になると、大量のパンクスを目にすることができた。だけど俺たちはもう違う種類のハードコア・ミュージックに分類されていたし、同時に、多くのバンドが解散していった。MASACRE 68の最後のショーは1991年のことだったよ。解散後、俺は音楽で実験的なことをしてみたくなって、他の色んなバンドとフュージョンを始めることになる」

■MASACRE 68が結成されたのはいつ?

「1985年頃だったかな。当時、俺が暮らしていたサン・フェリペの自宅の近くで彼らはバンド練習をしていたんだ。彼らのショーをチェックしては、よく見に行ったものさ。REBELD PUNKやTNTといったバンドと彼らはよくショーをやっていたね。やがて、ベーシストのTrasherがATOXXICOを結成するためにMASACRE 68から抜けたんだ。それで俺が誘われた。俺は、俺にとって初めてのバンドであるEPIDEMIAを脱退し、MASACRE 68で当初はベースを弾き始めた。このラインナップで何回かショーをやったんだけど、今度はVirus(ギター)が抜けちまった。彼はアメリカ国境近くのティフアナに引っ越したんだよ。それで俺は今度はギターを弾くことになった。それに俺たちはベーシストも見つけなければならなかった。しばらくの間、友人たちに声をかけてまわっているうちに、俺たちはBRIGADA SUBVERSIVAのPedroを見つけた。彼に加入してもらうことによって、ようやくメンバーが固まったんだ。このラインナップは1991年に解散するまで続くことになる。Aknes(ヴォーカル)、Pedro(ベース)、Chopis(ギター)、July(ドラム)さ」

■"Masacre 68"とは何を意味しているの?

「1968年にメキシコ・シティで起こった、メキシコ軍による虐殺のことなんだ。何百人もの学生が軍に殺された。犠牲者たちへの敬意を示しているんだが、Trasher(ベース)がつけた名前なんだ。1968年のメキシコで何が起こったのか、もっと詳しく知りたければ、ネットでたくさんの情報を得ることができるよ。The Tlatelolco Massacreとも呼ばれている事件なんだ」

■当時はどんなバンドと共演していた?

「XENOFOBIA、SS20、SINDROME DEL PUNK、DESVIADOS、ATOXXICO、MELI、SEDICION、REBELD PUNK、ESKORBUTO、LA POLLA RECORDSだね。俺が覚えている限りではね。こういったバンドとは、本当に良い関係だったし、彼らのことが大好きだった。俺たちは団結していたし、コレクティヴやジンを一緒に作っていたんだ。彼らのアルバムのジャケットを何枚か描いたこともあるんだぜ」

■MASACRE 68はどんな会場でプレイしたことがあるのかな?

「El Cosmos、Abandoned Houses、El Nutri Rock(コーヒー・バー)、El Chopo(パンク・マーケット)、Zocalo(メキシコ・シティの広場)、El Circo Volador、それにEl Lucc。Nutri Rockは演奏するには打ってつけの場所だったね。狭いけどたくさんのエナジーに充ちていた。メキシコ国内をツアーするときは











大抵の場合、誰かの自宅だったり、誰も住んでいない荒れ地で演奏していたよ。本当にアンダーグラウンドだったんだ」

■MASACRE　68のベストなショーを覚えている?

「俺にとってのベストなショーと言ったら、スペインから来たLA POLLA RECORDSと共演したやつかな。たくさんの人たちがLA POLLA RECORDSを心待ちにしていたんだ。彼らは90年代のメキシコに、初めてツアーでやって来たスパニッシュ・パンク・バンドのうちの一つだったからね。ショーは強烈だったな。エナジーが会場中に溢れていた。俺たちは彼らのためにショーを開催し、今でも覚えているんだが、俺たちはフル・セットをプレイできた。いつもは警察に途中で止められていたんだけど、このときだけ、警察は止めなかったんだ。ただ、警察は会場の外にいたたくさんの人たちを片っ端から逮捕していたのを覚えている。ショーに来るために歩いているだけのパンクスが、理由もなく捕まっていたんだ。それでもショーは続けられ、良い形のままに終わったよ。ちゃんとしたサウンド・システムと機材がある場所で演奏できて嬉しかったね」

■アルバム『No Estamos Conformes』はいつレコーディングされたのかな?

「87から88年にかけてレコーディングされたんだ。それまでロック・バンドが一度も使ったことのないような、クラシックなクンビア(コロンビアの伝統音楽)用のスタジオでレコーディングしてね。スタジオの人間にとってはパンク・バンドなんて初めてだし、そもそもパンク・サウンドってものが分かっていなかった。だからそいつらのために何曲かパンク・ソングを演奏してみせて、俺たちがどんなサウンドを求めているかを理解してもらった。アルバムは2日で録音し、ミックスもそこで行ったんだ」

■このアルバムをレコーディングするのは、どんな体験だった?

「何だか新鮮だったね。LPをレコーディングするなんて当時は革新的なことだったから。それまで何かをちゃんとレコーディングするなんてしたことがなかったんだよ。誰もそんな資金を持っていなかったからね。だから、Aknes(ヴォーカル)がアルバムをレコーディングしようってアイデアを持ち込んできたのは、とても嬉しかった。レコーディング・スタジオをすごく安く使えたし、レコーディングを終えて、パンク・シーンに何かしらを残すことができて満足もしていた。作品の一部になれたこともね。だけど個人的には、みんなが俺たちのことを資本主義者呼ばわりしてきたのにはムカついたよ。俺たちは自分たちのレコードを売っていただけなのにさ。当時のパンクスはあまりにも過激だった。だから、レコードのほとんどをタダで配ることになったんだ。記憶にある、唯一のイヤな出来事だね。それでも、レコードがディストリビューションされたり、レコードをみんなが気に入ってくれたのは嬉しかったな」

■君はタトゥー・アーティストでもあるけど、どうやって始めたの?

「刑務所から出所した人たちと会うようになったのがことの始まりさ。彼らはタトゥーをしていたんだけど、キリストや聖女マリアといった宗教的な図柄に覆われていてね、それがキッカケとなって俺はタトゥー・マシンを組み立ててみたくなったんだ。最初は小さなモーターとペン、それに針を使ってみた。その後にマシンを組み立てて、自分にタトゥーをいれてみた。そうしたらみんなもいれてくれって頼んでくるようになったってわけ。俺は1986年から、El Chopoのパーキングでたくさんのタトゥーを彫ったね。色んなデザインが大量に掲載されたカタログを用意していたから、数多くのお客さんがついてくれたよ。お揃いのデザインのタトゥーを依頼してくる人たちがいて、俺はやりたくなかったんだけど、当時はそんな人たちが結構いたね。1996年に俺はアメリカに渡り、サンフランシスコのタトゥー・ショップで働きだした。その後はスペインに行き、今はニューヨークで働いているよ」

■君はアーティストでもあるけど、どんな絵を描いているのかな?

「エアブラシを使って主に比喩的な絵を描いていたんだ。今はもっと、夢だったり幻影、個々人のコンプレックス、トラウマといったトピックに焦点を当てている。最新作は鉛筆で描いているんだが、それは今、手元にエアブラシの機材がないからなんだ。新しい機材を買って、この冬には新作に取り掛かりたいね」

■作品を見られるウェブサイトはある?

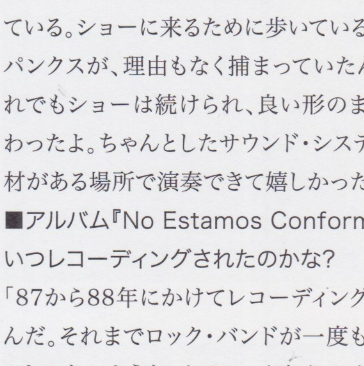
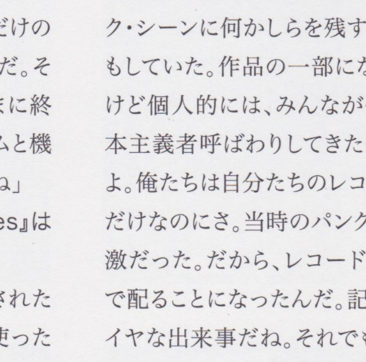
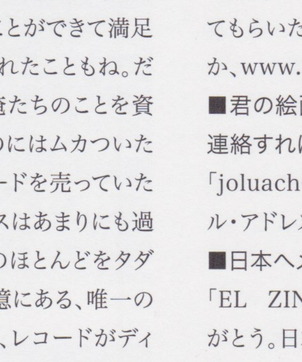
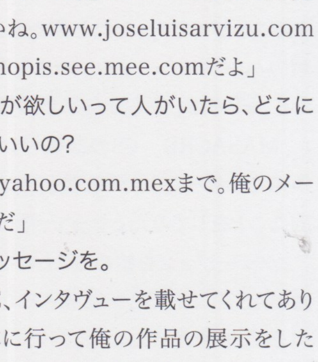
「あぁ、オンラインで俺のアートをみんなに見てもらいたいね。www.joseluisarvizu.comか、www.chopis.see.mee.comだよ」

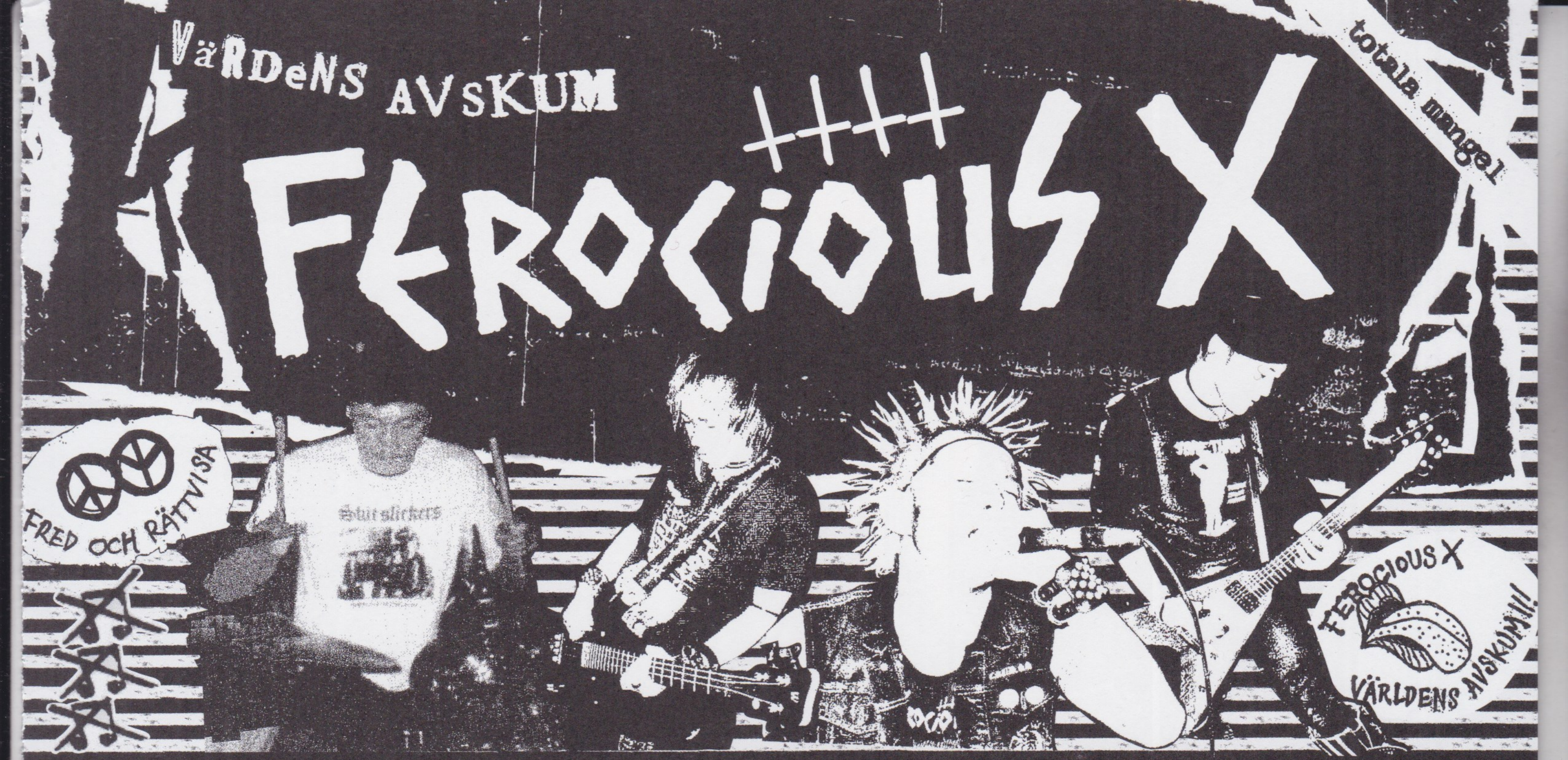
■君の絵画が欲しいって人がいたら、どこに連絡すればいいの?

「joluach@yahoo.com.mexまで。俺のメール・アドレスだ」

■日本へメッセージを。

「EL　ZINE、インタヴューを載せてくれてありがとう。日本に行って俺の作品の展示をしたり、新しい友人たちにも会ってみたいね」



大阪のマンゲル・ハードコア・バンド:FEROCIOUS XがディスコグラフィーCD『Svårt Att Överleva』を、同じく大阪のトータル・ハードコア・レーベル:L.A.R.V.Aよりリリースしています!
本作に収録の音源は全て持っていたのですが、今回改めてCDで体感してみたところ、その極限のプリミティヴ&デストラクティヴ(それでいてどこかキャッチー)なクラスティー・サウンドの凄まじさを再認識した次第。付属しているDVDも凝った編集で見応えアリ!なので、聴覚も視覚も刺激する、ハードコアという名の衝動が目一杯につまった最高の仕上がりなのです。
そんなワケで、9年振り(!!)となるメール・インタヴューをお願いしたところ、メンバー全員で応じてくれました。 現在の編成はHanochi(ヴォーカル)、38(ベース)、AA(ギター)、Morrie(ドラム)の4人。刮目せよ!!

■まずは今年、ディスコグラフィー『Svårt Att Överleva』をリリースした経緯を聞かせてください。海外のバンドとかにインタヴューしていると、"FEROCIOUS Xの7インチを持ってないか?"と訊ねられることがよくあるんです。初期の音源は特に入手困難ですから、聴きたくても聴けない人たちのために、ディスコグラフィーを作ったのかな?と思ったのですが。

Hanochi(以下H)「過去の作品はほぼテープ、アナログのみでリリースしていて既に全作品が廃盤状態だったので。個人的に自分のバンドでCDってのがあんまりしっくり来なくて過去に幾つかのレーベルから編集盤CDリリースの話しもあったけど、その時はなかなか首を縦に振れなくて…。で、今回、大阪のパンク・ショップ/レーベルL.A.R.V.Aのトヨカスくんからリリースの話しを貰い、メンバーと色々話しをし、タイミングもバッチリ合ったのでリリースに至りました」

AA「うちらは大阪で活動してるので、地元のレーベルからリリース出来たら凄く面白いな!って事で即決しました」

■ディスコグラフィーにはDVDもついていますが、ライヴの模様をそのまま収録しているのではなく、時期の異なるいくつかのライヴを編集した上で収録していますよね。これはどうしてですか?

H「知り合いの映像作家/映画監督に、結成当初から今までの撮り貯めたライヴ映像が沢山あるから、基本的なコンセプトを伝えて編集をお任せしました。彼が仕上げてくれた作品を観てメンバー一致でコレだって!色々なライヴを混ぜる事によって視覚的には面白い作品になったかなと思います」

38「個人的に、ライヴDVDっていいのもあるけど正直、なんか見てててダルいの多いし…」

■そもそも、DVDをつけることにしたのはどんな意図からで、誰のアイデアですか?

AA「Hanochiのアイデア」

H「まぁ、単純に普通にCDだけでリリースより、DVDを付けた方が面白いかなと!」

■「Svart Rädsla E.P.」から38さんがベースとして加入して、それまでベースだったAAさんがギターにパート・チェンジされていますが、これはどうして?また、「混沌難聴大虐殺」でドラムを叩いていたMorrieさんが、この作品から復帰していますよね。

AA「ドラムのMorrieが抜けて活動が止まってしまって…。でもライヴ活動は続けたいなって事で元FRAMTID高山くんにヘルプをお願いしました。2nd EPの録音予定もあったのでどうしようかと思ってたけど、彼が叩いてくれるとの事なのでそのまま録音してOverthrow Recordsからリリース。その後、ギターのNabeさんも抜けてしまい、Hanochiと2人でどうしようかなって。で、ドラムをもう一度Morrieに叩いてくれってお願いしたらすぐOKくれて、ちょうど同じ時期に38が津山から大阪に引越ししてきたので、じゃあ、ギター弾いてくれと!」

38「ギターできないけど、まぁなんとかなるかぁ〜とノリでOKしました。まぁ、なんせ若





かったし(笑)。ほんでリフ教えて貰おうとあっちゃん(AA)の家にあるプライベート・スタジオに練習しに行って、飲んでたらいつも通りエエ感じに酔うたあっちゃんが呟いたんですわ…。「オレ…じつはギターやりたいねんなあ…」。えぇーーっ!!ガッシャーン(爆笑)!僕は元々DEATH DUST EXTRACTORでベースを弾いていたのでベースの方が良いし、じゃあチェンジ!って感じで(笑)!以上(異常)!ギターリストAAの誕生秘話でした(笑)」

■(笑)。あと、「Svart Rädsla E.P.」はGUILTY C.とのフューチャリングでしたが、これはどんな経緯で?タイトル曲以外は全て再録だと思うのですが、凄まじいノイズとの融合で、今回改めて聴き直して本当に痺れました。

H「ノイズ・ミュージシャンのGUILTY C.が知り合いで、酒の席で一緒にコラボ音源をリリースしたいなって話しになり、最初はテープ・リリースを考えてたんですけど、その話しをOverthrow Records森下さんに話したら、EPにしよう!ってなり、リリースして頂きました!」

■ここで、これまでの作品について一枚ずつ、解説というか、「今、改めて聴いてみてどう思うか」と、何か当時の思い出や裏話的なエピソードがあれば聞かせてください。まずは自主でリリースした「5Låtars Kassett」(カセット・テープ)と、それをリマスタリングして7インチにした「Våga Tänka Själv E.P.」についてお願いします。

H「結成2年目2002年に録音したファースト・デモ・テープですね。数は憶えてないですが、300本近くはダビングしたような。同作品をリマスタリングし、アナログ化したレコードに関してはテープをリリースした年に、難波の千日前であった伝説のイヴェント"All Crusties Spending Loud Night 2002"に、アメリカからDistort RecordsのRobが遊びに来てて、打ち上げの席で聴いて欲しいと思いテープを渡したら帰国後に即、アナログ化したいって返事がありました」

AA「ギターがチープでノイジーでベースがゴロゴロ鳴ってて個人的に一番好みの音源かな。このデモで叩いてないMorrieもこの音源が一番って言うてる(笑)!」

■「混沌難聴大虐殺」について。

AA「関西のパンク・オンリーのオムニバスってのが凄く面白い!」

H「Crust Warからのリリースだったのでかなり気合い入れて録音しました!」

■「Befria Från Vånda E.P.」について。

AA「このEPが好きって言ってくれる人が多いよなあ」

H「大阪の堺にあるスタジオで録音しました。エンジニアの人がブライアン・イーノ狂の個性的な方で有り得ない爆音で作業させて貰いました(笑)!」

AA「堺のBOWLING STUDIO!またはSUN LIGHT STUDIOか(笑)?!」

■「Svart Rädsla E.P.」について。

AA「最初はテープで自主リリースを考えてた音源やったからバンド演奏はスタジオ一発録り。結果的に色々音を足したりミックスしたりとリリースまでにかなり時間が掛かったけど…(笑)。GUILTY C.とコラボしたりとトータルで面白い事が出来た作品」

■ディスコグラフィーの最後に収録されている未発表曲の2曲ですが、これは「Svart Rädsla E.P.」と同じレコーディングですか?これまで発表しなかったのはどうしてでしょう?

AA「録音したけど、EPに収録するには曲が多すぎてその時には収録するのを止めました。まぁ、日の目を見れて良かった(笑)!」

■以前のインタヴュー(2006年。「Befria











Från Vånda E.P.」リリース時)で、当時のメンバーだったNabeさんが、"グチャグチャで何をやっているか解らなくてもいいし。〜誰にも出せない音、出せない音塊をこれからも追求していきたい"と仰っていたのですが、今、FEROCIOUS　Xとして追い求めている音塊、サウンドというのはありますか?

Morrie(以下M)「Nabeさんええこと言うてんな〜(笑)!」

AA「その当時と求めている音は変わってない、弾く人間は変わったけど。とにかく観てる奴らが"何が何だか分からんけど何だかスゴイぞ!"てビビるような音の塊をブチかましたい!」

H「俺達は常に初期衝動剥き出しのプリミティヴな方向で行こうって(笑)!良い意味で進化より退化みたいな!耳をつんざくチェインソー・ノイズ、地を這うドープな極太ベース、親のカタキのごとく叩きつける発狂寸前のビート、怒りのアジテーション＆絶叫で唯一無二のハードコア・サウンドを作りたいです」

38「ライヴや企画は他のバンドがやらないようなことをやっていきたいですねー!この前BearsでワンマンGIGやったんですけどほんま意味わかんないですよねー(笑)!これがFEROCIOUS Xです(ビシッ)!!」

■同じく前回のインタヴュー時にHanochiさんが、"昔、梅田Guildで見たGLOOM主催の「Final Noise Attack」が僕のバンド活動の原点であり、今後も変わらない最高の思い出"と仰っていたのですが、今でもその想いは変わらないですか?

H「変わる訳無いじゃないですか(笑)!完全に原点です。当時は今みたいにインターネットも普及してなかったので、ライヴの現場に足を運んでみんなと情報交換したり、穴が空くほど、ファンジンを読んだりレコード屋やディストロで音源を手当たり次第、漁りまくって擦り切れるほど聴いてました。そこで知り合ったのがGLOOMであり、梅田Guildでの自主企画のFinal Noise Attackでした。音源、ライヴ共にノックアウトされて完全に人生を変えられました(笑)。俺達もChannel Zero Realityって自主企画を不定期ではありますが、やっています。自分が喰らった衝撃を自分達の企画で人に与えたいし、現場の活性化に繋がれば良いと思います。いい意味で期待を裏切りたいし、今後も楽しみにしてください」

M「Hanochiエエことゆうなぁ〜(笑)!」

■今年で結成15周年を迎えるわけですが、2000年の結成当時と現在とでは、バンドやパンク/ハードコアに対する考え方に、何か変化はありましたか?

H「基本的な姿勢は何も変わらないけど、やはり3.11震災以降は原発問題や戦争法案等、自分達の叫んで来たメッセージが凄く身近になって来たかなと。テレビ、新聞、インターネットを観ても腹立つ事ばっかり!権力者の利権の為に殺されてたまるか!!!」

AA「15年か…長い(笑)!バンドはすでに生活の一部というか、無ければ胸にポッカリ穴が開いたみたいに全然物足りない人生になるだろなぁ」

38「15年前…15歳…まだ中学生…。中一の時に悪い先輩の影響でCHAOS UKに出会ってPUNKに魅せられて、同級生数人で数枚しかない音源を、覚えたての酒飲みながら聴いて、あぁ〜最高じゃなー!とか言うて狂い咲いてました!」

■また、結成当時、15年後もFEROCIOUS Xを続けているとは想像していましたか?バンドを続けていく上での原動力となったものは何でしょう?

AA「思ってなかった(笑)!その間に仕事も忙しくなったし、家族もできたしねぇ。でもバンドに全てのフラストレーションをぶつけたい気持ちは変わってないな。昔程、活発に活動出来ない状況だけど、やっぱりバンドって楽しい!BearsやHokageにライヴを観に行くと、やっぱりここが戻ってくる場所やなぁって思う」

H「正直、メンバーの脱退等で活動休止の時期もあったけど、バンドを継続する事は常にギターのAAと共に念頭にありましたね。原動力って言われると、正直、返答に困ってしまうけど、単純にハードコア・パンクが大好きだし、まだまだ色々な意味でこのバンドに可能性を感じているから難しい理由なんて何も無くてやりたくて仕方ないからやってるだけです(笑)!」

■新作を待っている人も多いと思いますが、予定はありますか?

AA「来年はレコードをリリースしたい。12インチ!やっぱりデカいジャケットが良い!なのでもう少し曲を増やさないとね…(汗)」

■最後に、今後の展望や予定、あとは読者へのメッセージだったり、お好きなことを自由に書いてください。インタヴューさせて頂き、どうもありがとうございました!

H「ある年は早く月日が流れるし、ゆっくりな年もある。一年のように感じる日もあれば、たった30分のように感じる日もある。あなたの人生も同じ。FEROCIOUS Xの15年も。世の中に不満がある限り俺達はこの手法でやり続ける!世の中が改善される兆しなんて全く見えないから終わりなんて無いのかも!」

AA「今回のディスコグラフィーをリリースしてくれたL.A.R.V.Aトヨカツ君、ミナミタケシ有難う!Tシャツのリリースも含めて色々サポートしてくれて本当に感謝です」

38「……FUCK　OFF!!(ありがとーございました)」

M「38エエことゆうなぁ〜!(完)」



ハードコア・パンク、宗教、個

Interview with Justin Marler (ex SLEEP)

様々な音楽や思想を次々に飲み込んでは、怒涛のように吐き出してきた、ハードコア・パンクという玉虫色の巨塊。それは時には宗教すらも内包してきた。本稿ではハードコア・パンクが宗教と接続したことについて、キリスト教のある教派を信じるに至った元SLEEPのメンバーへのインタヴューを行い、その実態を聞いた。そこから敷衍して、「個」について、ハードコア・パンクの可能性についても考えてみた。

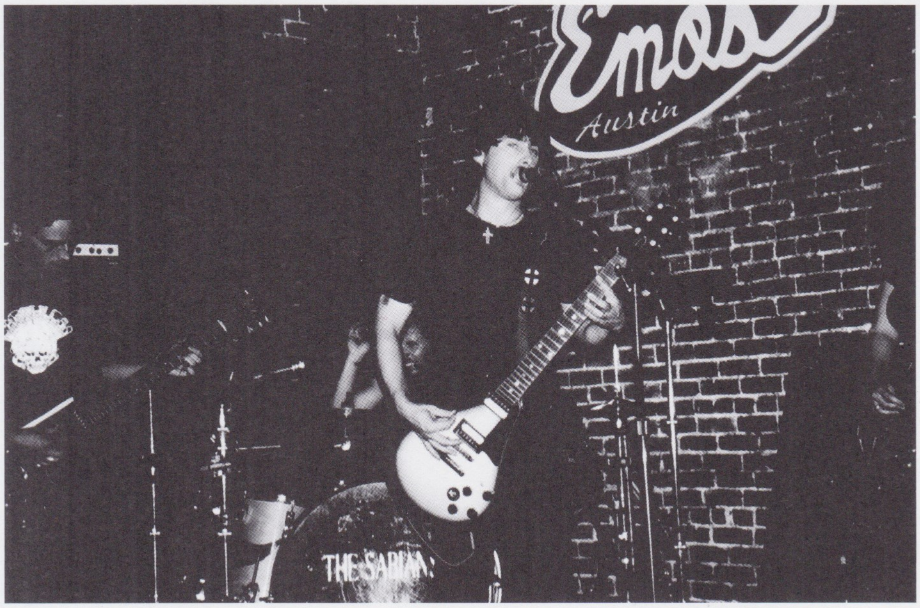
文:鈴木智士　(焔と煙霧:http://tower.void-server.net/)

ハードコア・パンクと宗教

ハードコア・パンクと宗教。一見相反するように思えるが、ハードコア・パンクの歴史において、その2つがリンクしたことは少なからず存在したのも事実だ。もちろん住む国や文化によって宗教と接する機会は全然違うので、それが出現した地域は偏るが(日本に住んでいるとあまり意識することはないだろう)、有名なところでは、YOUTH OF TODAYのヴォーカルのレイ・キャポがハーレ・クリシュナにハマり、SHELTERに代表されるような「クリシュナ・コア」が流行ったこともあった(彼は今はニューヨークでヨガの先生をやっているらしい)。クリシュナと言えば、CRO-MAGSのヴォーカルのジョン・ジョセフは、「ハードコアは精神だ」なんていう、この2つの結びつきを示唆するようなことも言っている。あと元JUDGEのベーシストのジミー・ユウは仏教徒になり、今はその手の学者だという。

また、不勉強なので詳しいことが書けないのが恐縮だが、Taqwacoreという、欧米でイスラム教の若者とパンクが結びついた動きもある。「Taqwa」とはアラビア語で「神への畏怖」のような意味らしいが、伝統的なイスラム教の教えではなく、独自の解釈を加えたムスリムとパンク(やヒップホップなど)が交錯して起きたムーヴメントだ。アメリカ出身のマイケル・ムハンマド・ナイトという人が、その名も『The Taqwacores』という小説を書いて、映画にもなっているようだが、日本では今のところ未翻訳・未公開。またその他、その名も「クリスチャン・ハードコア」なんていう直球カテゴリーも存在する。特にアメリカに多いのが特徴的だが、こういったハードコア・パンクと宗教のリンクはその歴史の中で生まれ、根を張っていったのである。

ただやはりAMEBIXが「No gods no masters」と歌ったように、宗教というのは個人の自由を限定し、権力構造の中に人を縛り付けるものであり、それはハードコア・パンクの礎であり、絶対的な個人の自由をうたうアナキズムとは真っ向から衝突することになる。CRASSが「Reality Asylum」や「Big A Little A」などの曲でキリスト教を徹底的に批判したのは有名な話だし、DEAD KENNEDYSは「Moral Majority」という、アメリカのキリスト教右派で共和党の支援団体(今のニッポンの「日本会議」みたいなものだ)を同タイトルの歌で非難。その他、宗教は戦争の源になっているだとか、個人の自由、金を収奪している悪しきシステムだ!というのはパンク・バンドの歌詞に星の数ほど見られるし、基本的にはパンクと宗教は相反するものだと考えていいだろう。



ジャスティン・マーラーの場合

さて、私は特に何かの宗教を信じているわけでもないし、どちらかと言えば猜疑心をもってそれを見るタイプの人間だが、このハードコア・パンクと宗教という2つのつながりがずっと気になっていた。宗教を信じるパンクスは、一体何を考えているんだろう、このやかましい音楽と信仰をどのように結びつけているのだろう、そんな単純な問いである。昔知り合ったイスラエル人アクティヴィストが、数年経ったらユダヤ教に改宗していたことがあったが、その理由は、自分を見つめ直して元々の生活圏に戻った、くらいしかわからなかったこともあった(もっとも彼はパンクスではなかったが)。

今回は改めてこのパンクと宗教について考えることで、宗教とその個人の関係、ひいてはハードコア・パンクと個人との関係が見えてこないだろうかと思い、ある人物にインタヴューを行った。ストーナー・ロックやドゥーム・メタルのファンのみならず、パンクスにも人気のアメリカの伝説的バンド、SLEEPの初期にギターを弾いていた、ジャスティン・マーラーがその人である。おい、パンク・バンドじゃないじゃないかと考える方もいるかもしれないが、SLEEPはその前身バンド、ASBESTOSDEATHのレコードをあのProfane Existenceからリリースしているように、パンク人脈から派生したバンドだと考えていいだろう。

SLEEPの他のメンバーは、周知のようにその後HIGH ON FIREやOMなどをやっており、メタル・シーンでは彼らを知らない人はいないだろうが、そのSLEEPをアルバム一枚で辞めたジャスティン・マーラーは、日本ではあまり認知度のある人でもないから、ジャスティン・マーラー自身の言葉に入る前に、彼のバ



ンド遍歴を辿ってみたい。ちなみに私は、彼が2000年代初めにやっていたTHE SABIANSというバンドの音楽がとても好きで、そのバンドを通して彼の数奇な人生を知り、いつか話を聞いてみたいと思っていた。それがこの記事を書いた動機の一つでもある。

10代の終わりにSLEEPに加入し、最初のアルバム『Volume One』(1991年リリース)に関わったあと、彼は突然SLEEPを脱退し、キリスト教の教派の一つである東方正教会の修道士になる。ちなみに「正教会」というのは、ギリシャ正教やロシア正教などのような、いわゆる「オーソドックス」と言われる教派だ。カトリックやプロテスタントとの違いを簡単に説明するのは難しいのだが、正教会の歴史は、キリスト自身が作った教会と言われるように他の教派より古く、キリスト教の起源により忠実だということであろう。さて、7年を北カリフォルニアの修道院で過ごしたジャスティンは、その間、東方正教のジンなどを作ったり、本を出したりもしていたらしい。その後オークランドに戻り、THE SABIANSを結成。2枚のアルバムを出してバンドは解散している。現在はテキサスに住みながら、旅行ライターをやったり住宅診断の会社を経営したりして、QUICK AND THE DEADというポップ・パンクみたいなバンドをやっている。

さて、ここから実際に彼へのインタヴューに入る。まず、誰もが気になるSLEEP脱退の理由や、なぜ東方正教会を選んだかについてだが、ジャスティン・マーラーは次のように語っている。

「SLEEPで最初のレコード(『Volume One』)をレコーディングしてから、私はとても落ち込んでいて、死んでしまいたいような心境でした。あのレコードの曲を書いたのが事をさらに悪くしたんだと思います。やってた音楽はめちゃくちゃヘヴィでダークでしたから。この時は神に祈りを捧げて、助けてもらうように願っていました。しばらくして、ロシア正教会の修道女に偶然出会って、彼女からキリスト教や正教会の信仰について教えてもらいました。キリストや十二使徒との歴史的な結びつきや、潤沢な神学的、精神的教えなど、私はすぐに正教会に魅了されました。その本質は、魂の治癒と、神と啓蒙との関わりのための浄化だということです。正教会の世界観は私には完璧に意味を成していました。2時間行ったところに修道院があると彼女から聞き、私はすぐにその修道院へ行き、結果的にそこで7年を過ごしました」

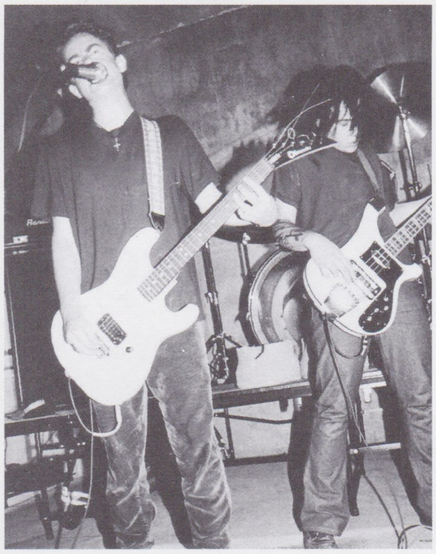
SLEEPの『Volume One』は、その後の『Holy Mountain』(1992)や『Jerusalem』(1998)などと比べると、確かにキャッチーさはまだ少なく、重く引きずるような曲が多い。この影響もあり、鬱が悪化して絶望的になっていたところに、修道女との出会いがあり「救われた」ということらしい。

ただ、SLEEPをやっていた時に、既に「神に祈りを捧げて、助けてもらう」と思っていたということだが、マーラーは元々キリスト教に近い環境にあったのだろうか。

「特に宗教的な実践をもって育てられたということはないですが、家族の多くは自身のことをプロテスタントだと考えていました。多分それは哲学的な見解や傾倒とは対照的に、もっとアメリカの文化的な意味でです。

ただ、私の祖父母は高徳な人たちで、おそらくキリスト教の種を私の心に蒔いていたんだと思います。SLEEPにいたときは自分をキリスト教だとは思っていませんでした。政治と資本主義とリンクしたアメリカ型のキリスト教的信仰とは距離を置きたいと思ってい





ましたし。当時私は科学、生物学、仏教、イスラム教、ユダヤ教を勉強していました。これらの宗教と比較しながらも、イエス・キリストの教えと生涯から離れることはありませんでした。彼の愛、哀れみ、自己犠牲、内なる平安、魂の治癒、慈悲、容赦、意志、恐れのないことについての教えは崇高です」

最後の一文は、無宗教のものからすればぎょっとする表現だが、彼が今も宗教を信じていることの何よりの証だろう。ただやはりアメリカ育ちということで、キリスト教的文化が身近にあるということは、その後の彼の人生の選択を左右したと言える。冒頭に挙げた「クリスチャン・ハードコア」などは、そのバンドの歌詞の中で「神よお助けを」のような文言が入っているとそこにカテゴライズされるようだが、特に「移民国家」のアメリカなどでは、民族や育った地域など、その人それぞれの環境によりキリスト教が浸透する度合いはまったく違い、このマーラーのように、祖父母の影響で心のどこかにキリスト教を信仰する何かが燻っていたのかもしれない。聞けばアメリカの高校生がキリスト教に「オルグ」される手段の一つに、「ヤングライフ」のようなキリスト教伝導団体があり、例えばクラスの同級生が「今度ピザでも食べながらお話ししようよ」みたいに気軽に話しかけてきて、(そこに悪意があるかないかは別にして)友達になり、どんどんと関係を深めるうちにキリスト教に改宗するということが起きるそうである。それくらい実体を伴う宗教に触れる機会が多いということだ。またアメリカでは、先に述べたDEAD KENNEDYSの批判した「Moral Majority」のように、共和党の支持基盤にキリスト教右派があり、そういった世俗にまみれた「偽のキリスト教」とは一線を画したいという思いもマーラーにはあったのだろう。より「ピュア」な形態のキリスト教である正教会に魅せられたというのも、安易なものではなく、自分の信仰の先に何があるのかを考えていれば、あくまで「真面目」な選択と言えよう。

ともあれ、修道院生活を始めることで、SLEEP時代の鬱状態から脱することができたジャスティン・マーラー。日本で言えば、頭を丸めて出家し、寺に入るということになるが、バンドをやめて、正教会の修道院で送った実際の生活とはどのようなものだったのだろうか。

「修道院での生活はとても大変でした。それは完全な拒絶、雑用、何時間もの祈祷と瞑想の生活です。この生活の中で、修道士の心の破壊された部分はさらけ出されます。ギリシャの哲学者が主張したように、自分自身を知ることが哲学の始まりです。自己認識は徳の実践につながり、それは心の平安につながります。

私はすぐに修道院の生活に引き込まれました。違いはとても明確です。SLEEPをやっている間は、自分のことをハードコア・パンクだと思っていました。ただ修道院の生活は、現存する最もパンクな生活の方法だと気付きました。その2つには、たくさんの類似点がありました。ただ明確な違いのひとつとして、パンクは反宗教や無神論と広く関係しています。一方修道院の生活は、この世界の腐敗を否定し、流行を排することです。また、修道院での生活は、コミュニティで営む最もピュアなアナキズムの形態だとわかりました。もちろん階層はありますが、修道院の生活(集団生活)は、従来の政治の外にあることを目的としたコミュニティなのです。

パンクと宗教は対極にあるかもしれない。ただ、パンクは色々なものになれる。反逆、体制の否定、現状への反対など、すべて世界を変えたり、よりよくしようとする意図があります。これは色んな形で、宗教や哲学の芯にも通ずることです。神や精神的な実践をこの式に取り入れたら、人生をより明るく、変化のあるものにするという目的が出てきます。真のパンクスというのは修道士なのかもしれません」

無神論であるパンクは、やはり宗教の正反対にあるとマーラーも認識しているが、ただ「自分自身を知ること」や、「世界を変えたり、よりよくしよう」という意図は、ハードコア・パンクにおいても非常によく扱われるテーマであり、そこは(建前上は)宗教も共通している。「克己」を訴え、自分自身を見つめ直すことを通して、社会の問題にアプローチしていくというのが、ハードコア・パンク・バンドが「外」に向けて取る方法論の一つであることは間違いないだろう。

また他に類似する点として、自分を律し、ソリッドな音楽を演奏するハードコア・パンクも、苦行に耐える修道僧も、どちらも多分にストイックに見えるのと、あとは「こんな世の中クソくらえ!」ではないが、どちらも現世とは別の世界を創造し、生きようとする姿勢が挙げられるのではないだろうか。資本主義やグローバリズムに反対するパンクスが、ここではないどこかを目指して「Another world is possible(別の世界は可能だ)」というスローガンを掲げるのを見たことがある人も多いと思うが、マーラーの修道院生活においては、完全に世の中と隔絶しているという点で厭世が強すぎる感はあるものの、自らのコミュニティの中で生きていく点では「Another world」と通底する部分がある。「階層」の存在する「最もピュアなアナキズムの形態」というのは、語義矛盾が生じていることは断っておかないといけないが、メインストリームとなることを自ら拒否するハードコア・パンクと、俗世を厭う修道院生活とのオーバーラップはここでも感じられるだろう。

ちなみに先述のようにマーラーは現在、QUICK AND THE DEADというバンドをやっているが、本人曰く「パンクとゴスペルを足したような音楽性」とのこと。興味のある方は<http://www.hymnsfortheapocalypse.com/>で音源が聴ける。悪く言えば、どこにでもありそうな軽快なポップ・パンクで、彼のバンド遍歴からすると、なぜ今これをやっているんだと疑問にも思えてくる。キリスト教の有名な聖歌の一つの「Will the Circle Be Unbroken?」のパンク・ヴァージョンなんていうのもやっていたりする。もうすぐ「Hymns of the Apocalypse」というタイトルのアルバ

ムが出るとのことで、その音源の売り上げは、シリアにあるマーラーの教会の姉妹教会が内戦の影響で壊滅の危機にあり、その支援に100%充てられるそうだ。

さて、そんなマーラーは、自身の音楽と宗教の関係については以下のように語っている。

「アート、創造的なプロセスは、私の考えでは、神が人間を創造したように、神のイメージそのものだと思います。神は究極の創造主であり、宇宙を創造しました。私たちの創造というのは、神の創造的精神に参加するということです。プラトンが言ったように、音楽は人の精神的生活、つまり魂に直接関わる理想であるということです」

最後の一文だけを取れば、先ほど書いたようなハードコア・パンクの「克己」のことだと読めるであろう。前半部分は、ここまでくればマーラーがどんなことを言うのか想像もつくのではないだろうか。

ジャスティン・マーラーのユニークさ

さて、ここまでジャスティン・マーラーのSLEEP時代から東方正教会の修道院での生活を見てきたわけだが、インタヴューして私が一番強く感じたのは、隠遁修行僧のようなマーラーの場合は特殊なのかもしれないが、「神」という概念を除けば、彼も言及したように、それはパンクの生活とほとんど変わらないのではないかということだ。ハードコア・パンクのシーンにいる間に鬱になり、出会った修道女に助けられ、そこから自分自身を見つけていったという流れは、八方塞がりの現実生活がパンクによって救われることと似ている。ほかっておいてはいい方向へ進んでいかない精神状態のときに、「神様仏様」ではないが、何かすがるもの、それを「救い」と言ってしまって語弊はないと思うが、基にできるものがあるとやはり復調に差が出る。ジャスティン・マーラーの場合はそれが信仰であり、私も含めて、このEL ZINEを買って読んでいるような人には、音源、ライヴ、バンド活動など、ハードコア・パンク自体が生活の一つの救いになっているのではないだろうか。

EL ZINE 18号でインタヴューした、セルビアのヤニスと前に喋っていたときにこの話になったのだが、宗教というのは、個人の思想であればそれは良い「ものの見方」にもなりうるが、集団の思想になった場合には必ず問題の原因になり、例えば先述のように政治に利用されたり戦争の元になるのである。これは逆にハードコア・パンクにもあてはまることで、集団化し固定化してしまうと、せっかくのものがつまらなく思えることもある。

また私がジャスティン・マーラーに好感を抱いた別の理由は、信仰の押し付けがまったくないことである。先に述べた「ヤングライフ」や、日本でも突然の訪問を受けたことがある人も多いように、キリスト教は勧誘の宗教でもあるが、彼にとって宗教を信じるということはどこまでも個人的な問題であり、それを選択するかどうかはその人次第で、他人の自由は侵害しないという大前提があるのだろう。私事だが、その昔某レコード屋で働いていたときに一緒に働いていた（知る人ぞ知る）アメリカ人が、実はキリスト教原理主義に近いような人で、たびたび、「神様を信じないと地獄行きだよ」と真顔で迫られたのとは大違いである。

マーラーがすべて書いていたTHE SABIANSの歌詞を実際に読んでみると、目立って宗教的な想起をさせるものはあまりなく、個人的な体験や苦悩、また主語「We」を使って、人間存在の運命を書いている曲が多い（運命論は宗教的とも言えるが）。THE SABIANSの1stアルバム『Beauty for Ashes』のインナースリーブには、「Corporeal（形而下）」、「Incorporeal（形而上）」の説明と共に、人間がいかに形而下ばかりを気にして精神や意志、魂を見捨てているかが書かれている。「Beauty for Ashes」とはつまり、人間の外側の美はすべていつか灰になる、という無常にも似た概念を歌っているわけだ。

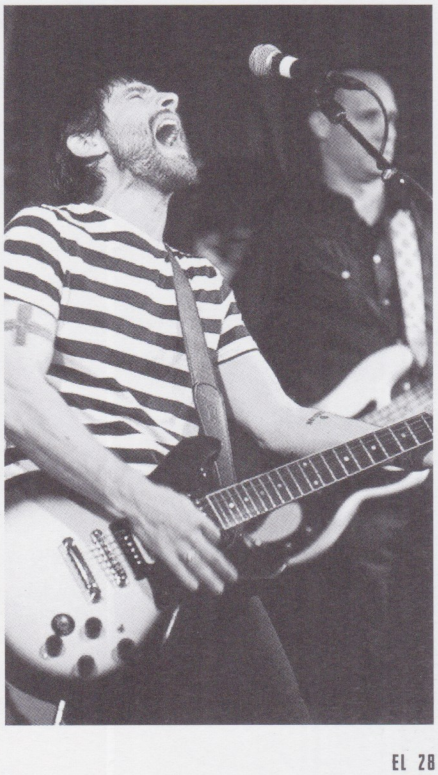
集団ではなく、あくまで一人の自己として

さて、今回はジャスティン・マーラーという一人のパンクス/修道士を例に、ハードコア・パンクと宗教について駄文を連ねてみたが、冒頭に挙げた一連のクリシュナ・コアなどと比べると、マーラーはただ苦行に耐える厭世僧のようで、派手さに欠け、インパクトは弱く、ここまで書いておいて何だが、ハードコア・パンクと比較する対象としては特殊すぎたのかもしれない。しかしその派手さというのが実は重要な点で、修道院の生活は「流行を排」するとマーラー自ら言っていることからわかるように、彼の言葉には、うぬぼれや成り上がりの上昇志向のようなものを感じることはない。私の勝手なイメージなのかもしれないが、冒頭に挙げた、例えばストレート・エッジ的なものには、どうしてもマッチョで「群れる」印象があり、果たしてその信仰は自分自身のためなのか、集団維持のための単なる媒介なのか、と疑問に思うことがある。それは一般的な宗教の「悪い」イメージそのもので、もはや「個」はどこにもないのではないかと。私自身の趣味の問題でもあるが、やはりハードコア・パンクには、群れることよりも、ストイックに自己を探求することを重ね合わせてしまう。そういった意味では、ジャスティン・マーラーのような宗教の生き方も、それが集団化し暴走しない限りにおいて（常にその危険をはらんでいることはもちろん認識した上で）、また個としてそれを律することができるのならば、一つの見本となる生き方なのではないだろうか。

駄文の締めくくりとしては随分と話が飛ぶが、作家の辺見庸はこんなことを言っている。元は、この「例外のない時代」、「『個』が『個』として生きてあることの目的」のわからないファシズムの時代に、死刑制度に対抗していくには、というような文脈だが、その「個」について考えるにあたり、とても示唆的である。

「われわれはひとりひとり例外になる。孤立する。例外でありつづけ、悩み、敗北を覚悟して戦いつづけること。これが、じつは深い自由だと私は思わざるをえません。」
『いま語りえぬことのために　死刑と新しいファシズム』（毎日新聞社）

「個」であるということは、真に自由であるということ。そんなことをジャスティン・マーラーの言葉から私は読み取った。そしてその「個」同士が自由につながっていく先に、この息苦しい時代を生き抜く何かが見えてくるのではないか。そしてその可能性がハードコア・パンクにはあるのではないか。そんな一抹の希望を持って、拙稿を終えたい。





とある日、久しぶりに山路さんからメールが来た。
内容を見てみると、死んだ方がましのインタヴューをしたいそうで、ギターの行方不明が俺の兄だと知り、もしよければ弟である俺にインタヴューをやってもらえないか、とのこと。
正直最初は悩んだが、ちょっと面白そうだなと思い、なにより自分の兄がいるバンドだし、ヴォーカルのエイジさんとも知り合いなので、興味深いな!とも思った次第。兄に連絡をしたところオーケー!の返事をもらえたので、この度インタヴューをやらせてもらうことになりました。
同席した山路さんに助けてもらいながら(笑)、結果的にはなかなか面白いインタヴューになったと、個人的には思います。
エイジ(Vo/以下エ)、ゴモラ(Gu/以下ゴ)、行方不明(Gu/以下行)、タランチュラ(Ba/以下タ)、憎しみ(Dr/以下憎)の全メンバー5人に、銀座のおしゃれなカフェで話しを聞いてみた。それでは、本編行ってみましょう!

INTERVIEWED:北村友浩(ex RECORD BOY)　TEXT:山路健二(以下山)　[8月12日/銀座POUR CAFE]

■結成はいつ頃ですか?
エ「結成自体はたしか2012年で、初ライヴが2013年です」
■今のメンバーはどういった感じで集まったんですか?
エ「元々みんな友達とか知り合いで。飲み会で冗談半分に、"このメンバーでバンドやるか"みたいな感じで、それで集まりました」
■みんな楽器はやっていたんですか?
行「バンド経験者はベースとドラムで。ギター2人とヴォーカルはズブの素人というか、バンド未経験」
■結成当初から、こういう音をやろうと思っていた?
エ「ICEAGEとかが流行っていたときで、当時はICEAGEっぽい音を出している日本のバンドはそんなにいなかったから、それで"こういうポスト・パンクっぽい音をやりたいね"という話しになって。他のメンバーも80年代のポスト・パンクが好きな人が多かったから、音の指針はそういう風なので始まった感じかな」
行「海外の2000年代後半から流行っているポスト・パンク・バンドを真似るというか、なぞる形をしつつも、日本の古いパンク、ハードコアじゃなくて、パンクのほうに寄ってみて。あとはニューウェイヴとかノーウェイヴとかに寄った音作りをやってみようというのが、結成して半年くらいの間に模索していた」
ゴ「その時点(結成当時)だと日本のバンドじゃなくて、まずICEAGEがあって。あと、同時期に流行っていたBlackenedハードコアとか、ブラック・メタルのようなのを入れた何かをやろうかというので集まったけど、バンマス(タランチュラ)が日本の80年代のパンクがすごく好きで」
行「INUとかFRICTIONとかね」
ゴ「そういうのをタランチュラがやりたかったから、そっちの方面へ徐々に、音楽性がシフトしていったというのが、俺のイメージなんだけど」
タ「ICEAGEを実際に見て、"こういうのが流行っているのかな"と思いつつ、メンバーと飲

んでいるときは"ブラック・メタルをやろう"と冗談半分に言ってて。CIRCLE OF OUROBORUSというブラック・メタルとポスト・パンクが融合したようなバンドがいて、"そういう感じでやれればいいかな"と思っていたのが、ブラック・メタルを聴くのはいいけど、誰にもその素養がなくて」

■聴くのはいいけど、自分たちでやるのはちょっと違うかなって?

エ「俺も今、思い出したくらいだけど、そういう考えもあった。けど、実際にやってみたら、(ブラック・メタルを)誰も導入できなかった(笑)」

タ「あと、僕が以前にやっていたバンドが芋族といって、ポスト・パンクとかニューウェイヴを意識していたバンドだったので、そのバンドでやっていたことを引き継いでやりたいなというのがあって。今風のポスト・パンクのブームが来たときに、"今なら(以前と)同じことをやっても違う解釈になるのかな"というのがあって、バンドの音楽性をそういう風にしようと思いました」

行「あとはテクニック面もあったし、音楽的な嗜好とか。ポスト・パンクとかのごった煮感が許されるような、楽曲的に"グチャッとしたもの"でも成り立つような、そういうのがフィットしているんじゃないかなと」

タ「メンバーの趣味的にはハードコアが共通しているかなと思ったんですけど、ハードコアをやりたくないなと思っていて。このメンバーでハードコアをやっても、自分が思っているほどハードコア的にならないんじゃないかと思って。違うアプローチのほうが面白くなるんじゃないかというのが最初からあって。ハードコア・アプローチをしない、自然に出てくるのはいいとして、意識的にはしない。速いリフや歪んだギターをやらないとかを、個人的にはこだわっていましたね」

■暗さっていうのは感じるというか。荒削りとかじゃなくて、無機質な感じ。ハードコアど真ん中じゃないけど、他にない感じだと思う。そういう面が魅力かなと。

タ「キャッチ・コピーじゃないけど、"冷たい炎"というのを話していて。僕はそういうのをやりたかった」

エ「それは誰も共有していないよ(笑)」

タ「あんまり情熱的な方向には行きたくなかった」

■言っていることはすごく分かります。

エ「でもそれは一人しか言ってないから(笑)」

■バンド名の由来は?

タ「日常的に、常にこの言葉が頭の中にあって。ハリー・ニルソンというアメリカの70年代のシンガーソング・ライターの曲で、"I Would Rather Be Dead"というのがあって、浦和のアスカタスナ・レコードの店主がその歌詞を全文訳していて、"I Would Rather Be Dead"を"死んだ方がまし"と書いていて。"もうその通りだな"とずっと思ってて。バンドが始まるかどうかの頃に、フェスの中継を見ていたら、REFUSEDがライヴをやっていて。2ndアルバムの1曲目"Rather Be Dead"をやっていて、"この曲も訳したら死んだ方がましになるのかな〜"と思ってて。次にポスト・パンク的なアプローチのバンドをやるとしたら、死んだ方がましという名前が80年代の日本のパンク的でもあるし、いいんじゃないかなと。アレルギーとか自殺とかマネキンノイローゼとか、そういうバンドみたいな印象を与えられるんじゃないかなと」

行「なるほどね、知らなかった」

■え、知らなかったの(笑)。

行「REFUSEDの曲名から取ったというのは知っていたけどね」

タ「そこまで細かくは説明していなかったから。死んだ方がましってバンド名を聞かれて、どう思いましたか?」

山「僕は、"中学生棺桶みたいな感じなのかな?"って最初は思いましたね。ネガティヴ・フィーリングが漂ってくるような」

エ「死んだ方がましって、バンド名としては相当に微妙だと思うので、変なことをやると変なイメージがついちゃうなと思っていて。変なことはやらないように(笑)」

行「音楽的にはどう思いましたか?」

山「そうですね、聴いて最初にパッと思いついたのはFRICTIONで。FRICTIONがカオティック・ハードコア化したような。大雑把な意見ですけど」

タ「それは大体正しいと思います。FRICTION自体が持っている冷たい雰囲気がずっと好きだったので」

行「人によって印象がそれぞれで。FRICTIONみたいと言われたり、初期のあぶらだことか、ICEAGEを感じるとか」

エ「ただヴォーカルはポスト・パンクを一切意識していなくて。俺、ポスト・パンクのヴォーカルって好きじゃないのが多くて。お風呂場でゴニョゴニョ呟いているみたいな」

ゴ「それ完全にJOY DIVISIONじゃ(笑)」

エ「ヴォーカルは、抑揚のない感じにはしたくないなと。最初は指針がなかったから、どういうスタイルにするか手探り状態で。自然と今の形に」

■メンバーの名前がエイジさん以外変わっているけど、これは?

エ「テキトーですね(笑)、思いつき。始めた当初はちゃんとしたバンドになると思っていなかったから、面白半分で」

タ「でも、僕はちゃんとしたバンドをやるつもりだったので…」

行「面白半分と匿名性だよね」

■ライヴとかプロモーション・ビデオを見ると、エイジさん以外、格好が白シャツにネクタイだけど、これは意味があるの?

エ「これもタランチュラが、"統一した服装がいい"って言ってて。けど他のメンバーからは不評で、ネクタイを忘れたり白シャツを忘れたりして、崩れてきています(笑)。俺は最初からイヤだと言っていたので、俺だけは普段着で」

タ「それについても、"バンドTシャツを着るのがイヤだ"っていうのがあって。メンバーそれぞれハードコアが好きで、ハードコア・バンドのTシャツを持っているわけですよ。それを着てやっちゃうと"違うな"と思って。あくまでも記号的にやりたかった。その人の個性を抑えたものをやりたかったんです。それで白いシャツにネクタイを」

エ「でも、そういう説明は一切なかったです」

一同「(笑)」

ゴ「全部、"冷たい炎"で片づけられていたけど(笑)」

タ「バンドTシャツを着て、ハードコア的な出自を出したくないというのがあって」

■先入観なしに、ナチュラルに見てほしかった?

タ「そうですね」

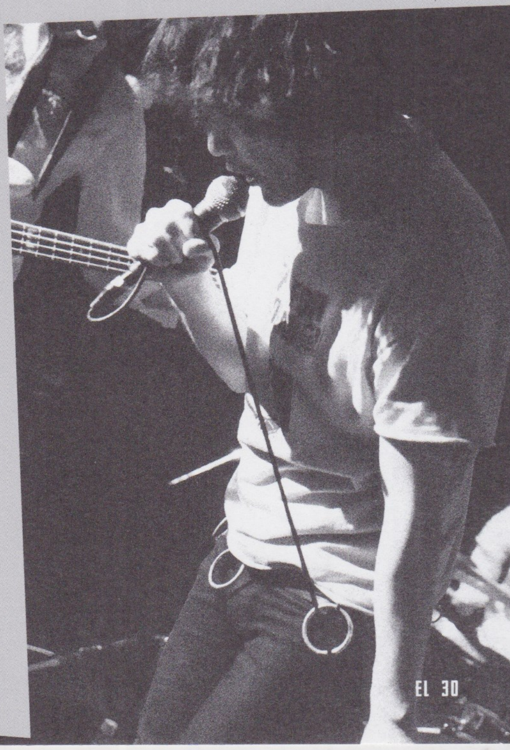
行「逆にどう思ったの?ああいう格好を見て」

■音も謎めいているというか、そういう雰囲気を感じたから。ハードコア的なのを出したくなかったのかな、と。

タ「ハードコアと距離を置きたかった。繋がりとして、距離を置きたいわけじゃないけど」

■ICEAGEってさっき出ましたが、バンドとして核になっているバンドはいますか?

エ「多分、"このバンド!"というのはなくて。ICE





AGEとかポスト・パンク、ニューウェイヴっぽいのは指針にあったけど、その中で、各々が聴いてきたものを消化して出していると思う。キーワードとしてICEAGEは出たけど、それほど意識はしていなくて。個人個人ではすごく影響を受けたバンドはあるかもしれないけど、バンドとしてはないかな」

行「逆にバンドをやっていく上で、嗜好が広がっていったというのが俺はあるけどね。自分がバンドをやって作曲をするにあたって意識しているのは、80年代の日本のポジティヴ・パンクと呼ばれるバンド、最近再結成したけどPHAIDIAとか、AUTO-MODの雰囲気とか空気感をね」

タ「曲を作ってきた人が元々イメージしていたものを、みんながどのようにやるかはそれぞれだから。バンドとして一丸になって"こういうスタイルを目指そう"というのはない。曲は主に僕と憎しみで作ってきたけど、憎しみはどういうつもりで曲を作ってきたのかな?」

憎「作曲をする時点では、僕は昔のBUCK-TICKとかLUNA SEAとか。日本のAUTO-MODとかもあるんですけど、80年代のヴィジュアル系の最初の頃のバンドが、作曲をする上では影響を受けていますね。昔のヴィジュアル系のメロディアスな要素よりは、パンクとかハードコアの要素、ヴォーカルが叫んでいたりとか、が混じればいいかなと考えて作っていますね」

■じゃあ、兄貴に兄弟として質問してもいい?

行「え、ここで(笑)?」

■最初、兄貴がこういう音をやっているって聞いたときはビックリしたけど、何から影響を受けた?

行「まずはICEAGEがキッカケになって始まって、そこからタランチュラが"こういう感じでやってみようよ"ってなって。俺はそういうの(日本の古いパンク)を全然知らなくて、日本だとハードコアばかりだったから、そういうのを知って聴いていくと、この歳になってようやく良さも分かって影響も受けているね。あとは80年代のポジティヴ・パンクとか、UKのアナーコ・パンク、MOBとかUK DECAYとかRUDIMENTARY PENIとか、出せているかは分からないけど少しは意識している」

■兄貴は昔からバンドをやりたいって言っていたよね。ライヴもやってレコードも出してスゲーと思うけど、実際にバンドをやってみて、どんなところが大変だなと思った?

行「人間関係だよね、一般的な話しになっちゃうけど」

エ「全員が好みとか考え方が違うから、何か一つをやろうとするだけでも意見が対立する。それを何とかやりくりするのが結構大変かなって」

行「繋がりとして音楽があるんだけど、方向性が違いすぎる。みんなバラバラで合ってない。ただ、良い面としては、楽曲には文句を言わない、好きなようにやらしてもらえるから」

■それは何で?

行「みんなが"自分とは違う"ということを認識しているから」

エ「曲に対しては、"誰かのアイデアをみんなでやってみよう"と、形にしていくことはそれぞれが楽しんでいると思う。曲を作る上での対立はないね」

行「誰かが作ってきたフレーズとかリズムとかに突っ込むことはなくて、作曲に関してはポジティヴに進んでいると俺は思う。ただ、みんな我が強すぎて、それ以外のことがポジティヴに進まない」

■ライヴではお客さんは結構増えている?

エ「お客さんが増えているかは分からないけど、認知はしてもらえているんじゃないのかな」

タ「はじめはゼロだから、増えているんじゃないの?」

行「実感はないね(笑)」

■今、お気に入りのバンドや好きなバンドは?

エ「海外のハードコアだと、シカゴのLORD SNOW。激情系って90年代くらいまでしか熱心に聴いていなかったんだけど、LORD SNOWはすごくいいなと思って。あとはドイツのアナーコ・メロディック系でNO MORE ARTのアルバムもよく聴いてて。身近なバンドだと何回かライヴも一緒にやったことがあるMOONSCAPEっていうバンドが、まだテープしか出していないと思うんだけど、ライヴの雰囲気もあって最近注目しています」

憎「僕はゴモラさんが今、Tシャツを着ているR.I.P SOCIETYっていうオーストラリアのパンク/ガレージ/インディー・ロックのレーベルがあって。BLACK HOLEというレーベルの小坂さんが、今年とか来年に、R.I.P SOCIETYのバンドを呼んでライヴをやったり、レコードも日本によく入ってきているので、その



辺を聴いています」

ゴ「今、僕が一番好きなのはHYSTERIC PICNICっていう東京のバンドで。ICEAGEとグループ・サウンズを足したような、今の時流に乗りながらも独特な音楽性の格好良いバンド。あとDEVIATIØNという、これも東京のバンドでまだ大学生なんですけど、JOY DIVISIONとかそっち系をもうちょっと激しくしたようなポスト・パンク・バンドですね。神戸のDOUGLASの1stミニ・アルバムは今年一番の衝撃でした。それと昔から割礼、dipとか、80年代、90年代の日本のサイケ・バンドが好きで、今でも格好良いしライヴもよく見に行きます。ギタリストとして一番影響を受けているのはJUDY AND MARYのTakuyaですね」

行「最近聴いている音源として、テクノ/エレクトロニカ界隈であればDEMDIKE STAREやONEOHTRIX POINT NEVER、インディー・ロック周辺であればA PLACE TO BURY STRANGERSやRINGO DEATHSTARR等のネオ・シューゲイザー且つSLOWDIVEやCHAPTERHOUSE等のオリジナル・シューゲイザー。80年代のパンク/ハードコアであれば、SATANIC MALFUNCTIONSやSADIE SADSやPHAIDIAになります」

タ「最近好きっていうのはあんまりないんですけど、ずっと好きなのが原爆オナニーズのEddieさん。EddieさんがSTARCLUBで弾いていたときも好きで。EddieさんがSTAR CLUBに残していった楽曲が特に好きだったんですよ。変則的なプレイがいっぱい入っていて。あとはSTALINの杉山晋太郎の見た目のインパクトも好きで、それにFRICTIONのReckのプレイとか存在感。ベースを弾くっていうことに関して、その3人の存在が大きくて、ベースとドラムがしっかりしていれば、その上に乗っかるヴォーカルやギターは割と自由でも曲として成り立つんだなというスタイルはそこから学びました」

■みんなバラバラっていうのがよく分かりました。それを引き出したかった。

一同「(笑)」

山「ところで、歌詞ってどんな風に書いているんですか?」

エ「基本的に、物事をアウトプットするには、インプットしなければいけないと思っていて、普段から本とか映画は読んだり見たりしていて。そういうところからインスピレーションを得たことプラス、自分の日常で考えていることとか、世の中で起こっていることを合わせて表現したり。歌にのせるときの言葉の面白さとか、リズムに合う言葉とかのチョイスがうまくできていないので、そういうのが課題としてありますね」

山「溺死さんというラッパーの方とフューチャリングで曲を作られていますが("有り触れた死")、あれはどんな縁で?」

エ「ゴモラさんが昔、大阪に住んでいて、溺死くんはその頃からの友達で。COSMIC NEUROSEのデスロウくんがやっている(レーベル)ROYAL SHADOWとBLACK HOLEが共同企画をして、それに死んだ方がましが誘われて。そのときにBLACK HOLEの小坂くんから、"死んだ方がましと溺死くんで一緒に曲を作って、そのライヴでやってください"と言われて」

ゴ「僕が25歳くらいで、溺死が18か19歳のときに知り合いました。当時ヒップホップが好きで、大阪のART OF VIBESっていうクルーのイヴェントによく行ったんです。そのとき僕はブログをやっていたんですけど、それを読んでいた溺死くんに話しかけられて、それから一緒に遊ぶようになりました。しばらくして、溺死はラップを始めて、その内スポークン・ワードのイヴェントに出たり、グライムやダブステップが流行ってからは、今の高速ラップのスタイルで界隈では知られた存在になり、こいつ凄ぇなと思いつつ、よくライヴを見に行っていました。それで5年前、僕が転勤で東京に引っ越してきて、その2、3年後に溺死くんも近所に引っ越してきました。そのうち小坂くんからコラボの話しが出て、意図を汲んでくれるのも溺死くんしかいないから、それで溺死くんにMCを頼んで、"有り触れた死"という曲を作りました。ハードコアとラップが合わさると、ミクスチャー的なダサいものしか思いつかないけど、そうならないようにできるのは溺死くんだと確信していたから」

山「作詞は普段とは違っていましたか?」

エ「それは全然なくて。溺死くんとやるときは、最初に自分が歌詞を書いて、それを溺死くんに渡して。"こっちはこういう歌詞でやるから"って。そこからは溺死くんに好きなように書いてもらって」

山「文学とかは好きなんですか?」

エ「歴史の本とかは好きで読んでいる感じですね」

山「曲名が詩的というか」

エ「最初は、ちゃんとしたバンドをやるとは思っていなかったので、初期の曲はすごくテキトーで。でも、途中からちゃんとしたバンドになってきたので、"このままではいかん"と。曲名を見ても印象に残るものがいいなと、意識して考えるようになりましたね」

タ「どの曲名が面白いと思いましたか?」

山「"フォールアウトの夜"とか」

エ「あぁ、あれは裸のラリーズの、"夜、暗殺者の夜"という曲が好きで。"何とかの夜"という曲が作りたくて。3.11の原発事故のあとに、福島にボランティアに行ったことがあって。南相馬市に行くとき、福島の山の中を夜中、車で走っていたら、ガイガー・カウンターの値がどんどんあがってきて、警報音が止まなくなって。その体験をもとにしています。夜の山の中で、何も変わらない風景なんだけど、放射能の数値だけがあがってきているっていう」

山「あと、細かいところなんですが、"有り触れた死"はBandcampでのデータ配信ですよね。これにはどんな意図が?」

エ「誘われたライヴでやるために作られた曲で、でも漠然と、"形にしたいな"とは思っていて。それで、自主企画をやることになったとき、("有り触れた死"を)レコーディングして配信で公開しようと思ったんです。できればフィジカルとして、何らかの形でリリースしたいなというのはあったんですけど、なかなか。レコーディングしたのは一曲だけだし、リリースするにも時間がなくて。今後、何らかのリリースにあの曲が入るかもしれないです」

行「いつまでも形にできなかったから(残そう)、というのと、自主企画のプロモーション的なものとしても。あと、配信というのをやって試してみたかった、というのもあって」

■じゃあ、今後の展開やリリースがありましたら。

タ「憎しみが勇退するんですよ」

エ「ドラムが抜けちゃうので、具体的なことは決まっていないんですけど、曲を増やして、リリースができたらいいなと」

タ「今後も今まで通り曲を作って、聴いたり見た人が面白いなと思ってくれたら、それでいいかなと。あとは自分たちが満足できれば」

行「作曲と、新たな憎しみに変わる強烈なメンバーを」

山「(小声で北村さんに)最後に締めて」

■兄貴、バンド組めて良かったね!



Desenterradas

幣誌vol.14のマヨルカ・パンク特集で、僕は当地のDESENTERRADASについて、
「このバンドは実にイイです!女性5人組のゴス〜ホラー・パンクで、キーボード交えた奥行きを感じさせる音作りは、廃墟と化した教会で演奏しているかの雰囲気。恐らく単独作はまだでしょうが要注目で!」
と記述したのでした。
…で、実際に動向を追い続けていたところ、彼女たちが待望の単独作(7曲入りカセット・テープ)をリリースしましたので、この度インタヴューを敢行してみました!
ポスト・パンクならぬ、"アフター・パンク"を標榜するDESENTERRADAS。妖艶且つゴシックなポスト・パンク・サウンドがウリのバンドですが、その根っこにはスパニッシュ・パンクのロウなテイストが存分に息づいているので、レコードでリリースをしたらもっともっと注目度が高まるんじゃないかな〜と思います。
「DESENTERRADASって格好良いよね!」なんて巷で話題になったとき、「俺はエルジン読んでいたから昔から知っていたぜ!」と言えたらクールですよね。まぁ、そんなことは絶対あり得ないんですけどね(…台無し)。





■どういう経緯で今のメンバーが集まって、DESENTERRADASは結成されたの?

「Dana(ヴォーカル)とTere(ギター)が2011年の夏に出会ったの。色んな巡りあわせがあってね。そうして、彼女たちはお互いが、"アフター・パンク"バンドをやりたいっていう同じ方針を持っていることに気がついたのよ。それからDanaは友人2人、Makrin(ドラム)とMixa(ベース)を誘って、リハーサルを始めていった。何度かバンド練習を重ねていくうちに、彼女たちは、あるサウンドが欠けていることに気がついた。そう、彼女たちにはキーボードが必要だったのよ。それでMixaが彼女の友人であるNena(キーボード)に声をかけて一度、一緒に練習することになった。そしたら、彼女はほとんど"廃棄寸前"のキーボードを持ってリハーサルに現れたのよ」

■メンバーが女性だけなのは、狙っていたのですか?

「いえ、全てはたまたま起こったことよ。親しい友人と一緒にやることしか考えていなかったからね」

■DESENTERRADAS以前には、どんなバンドをやっていましたか?

「誰もバンドなんてそれまでやったことなかったわ。Makrinはドラム・セットを持っていたけど、気まぐれでちょっと叩いてみたかっただけだし、Tereはスパニッシュ・アコースティック・ギターの弾き方なら知っていたけど、ギターをアンプに繋いだことすらなかった。Danaが歌ったのって、彼女の人生においてはシャワーを浴びているときだけだし、Nenaは学校ではフルートを吹いていた。Mixaが知っていたのはロックンロールのやり方だけだったわ」

■VA『Mallorca Punk Vol.1』LPとカセット・テープ以外にリリースはありますか?

「テープとコンピレーション以外には何もリリースしていないわね」

■マヨルカのレーベル:Sangre Azulからテープをリリースした理由は?新しいレコードは予定していますか?

「Sangre Azulは私たちの友人がやっていて、音源をリリースしないかオファーされたのよ。テープに収録している一曲でビデオ・クリップを作って発表したいと思っているの。同時に、もっとレコーディングしたいわね。新しいレコードのためにね」

■KANTE PINRELICO(※スペインのパンク・バンドで『After Punk』というアルバムをリリースしている)の"Dr. Jeckyll"をカヴァーしていますが、彼らからの影響は大きい?ポスト・パンクやスパニッシュ・パンクからの影響は?

「私たちが好きな曲だったから、私たちはKANTE PINRELICOをカヴァーしたまでよ。だけどそれほど影響を受けているわけじゃないわね。最も影響を受けているバンドはPARALISIS PERMANENTE(※スペインのポスト・パンク・バンド)やSKELETAL FAMILY(※イギリスのゴシック・ロック・バンド)、それに80年代のマドリッドで巻き起こったムーヴメントからはとてもインスパイアされているわ」

■ちなみに、Danaの好きなヴォーカリストは?

Dana「Petter Murphy、Siouxie、Robert Smith、Rozz Williams、それにEduardo Benavente。もっともっとたくさんいるけどね…」

■歌詞はどんな風にして書いていますか?スペイン語の歌唱にこだわりはありますか?

Dana「私の感情であったり、恐怖、それに私の周囲にいる人たちなんかをベースにして、私が歌詞を書いている。けど、行き当たりばったりね。スペイン語は私たちにとって重要な要素ではないけれど、好きなのよね」

■サウンドやアートワークにもホラー映画の要素を感じますが、実際に影響はありますか?

「私たちってホラー映画を見ても全然怖がらないの。私たちを心底震え上がらすのは恋愛映画よ。色んな小説や映画が好き。『吸血鬼ノスフェラトゥ』みたいな古い映画から、『ヒルズ・ハブ・アイズ』みたいな新しい映画までね。作家で言えばMary Shelly、Baudelaire、Lovecraftが好きかな…」

■マヨルカでは性差別主義者とのトラブルなんてあったりしますか?

「マヨルカのパンクスに性差別主義者はいない。だけど、その反面スペイン社会にはかなりの数が存在しているわね」

■マヨルカのパンクのどんなところに、自身では魅力を感じていますか?

「マヨルカのシーンは陽気で素晴らしいわよ。パンクス同士うまくやっているし、絶えずお互いをサポートし合っている。それに、異なる音楽ジャンルのバンドや異なる考えの人たちと共演するのが好きなのよ」

■では、最近のお気に入りのバンドを教えてください。

Tere「SHEER MAG、V2、MCD」

Dana「DECIMA VICTIMA、DEPECHE MODE、SUICIDAS」

Makrin「HEROES DEL SILENCIO、RAMMSTEIN、WITCHTRAP」

Nena「B-52's、DAS KABINETT、PINK FLOYD」

Mixa「Y、MARY GOES ROUND、NEW MODEL ARMY」

■今後何か計画していることはありますか?

「スペインで4回ほどギグをやるショート・ツアーに出ようと思っている。その後はレコーディングしたいわね。私たちが暮らすこの島から遠く離れた、世界の色んな場所で演奏して楽しみたいのよ。パンクのライフ・スタイルを送っている、私たちのフレンドシップがこのままずっと続くようにね」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後にメッセージを。

「Muchas Gracias!Kenji、私たちに興味を持ってくれて、そして、私たちの音楽を日本に広めてくれてどうもありがとう。いつの日か、日本で演奏する機会が得られたらと願っているわ。読んでくれてありがとう。ハグとキスを」

"FINLAND BOMBS AGAIN!" from POLAND

前号に引き続き、ポーランドのパンク・ファンジン:Pasazer誌のGrzesterが寄稿してくれたフィンランドのハードコア・バンド:VIVISEKTIOのPenaへのインタヴュー、その後編となります!
1986年(正式には88年?)に解散し22年の時を経て2008年に復活した彼らの現在は、ありがちな懐古主義に陥ることなく現役感バリバリで頼もしい限り。日本でも音源をリリースしたい(&ツアーもしたい)ようなので、興味を持たれた方はコンタクトをとってみてはいかがでしょうか。小さくてDIYなところが好みだそうです!



Photo by Heikki Raudaskoski

INTERVIEWED:Grzester [grzester12@poczta.onet.pl]

■音楽的な影響を受けたバンドって何かな?誰かを真似したりした?それとも自分のスタイルを見出そうとしたの?君たちのプロフィールには"kaaospunk"ってあるよね?

「俺たちは80年代初期の世界各地のハードコア・パンク・ムーヴメントに影響されたよ。イギリスのアナーコ・パンクにもね。好きだったバンドはLAMA、KAAOS、TERVEET KÄDET、MUSTA PARAATI、SUBHUMANS、MINOR THREAT、CRASS、UK SUBS、それにもっともっとあるよ。でも、他のバンドを真似しようっていうのはなかったね。Facebookのプロフィールにある"kaaospunk"ってのは、まぁ、ユーモアの一種だね。『Hilse』という伝説的なパンク雑誌を70年代後半に発行していたMiettinenが俺たちの1stデモをレヴューしてくれたんだ。『Rumba』というフィンランドのロック雑誌でね。1985年のことだった。そこで彼は俺たちのことを"kaaospunk"と表現したんだ。彼は俺たちをKAAOSタイプのバンドにカテゴリーしたんだろうね」

■80年代のポーランドの音楽について尋ねることを許してもらいたいんだけど、昔のフィンランドのファンジンを読んでいたら、ポーランドのバンドについて書かれた記事があったんだ。だけど当時、ポーランドのカセット・テープがフィンランドに届いていたとは思えないんだけど…。

「ポーランドのパンクに関するシーン・レポートなら、80年代にたくさん目にしたよ。DEZERTERはここでは一番よく知られたポーランドのバンドだね。彼らの1st EPをカセット・テープで俺は持っていたし。俺は見ていないけど、フィンランドで彼らは1987年か1988年にライヴもやっているよ。SIEKIERAもよく知られている。80年代のバンドなら、あとはMOSKWAとTZN XENNAかな。SMIERC KLINICZNAの7インチを持っていたけどなくしちまったんだ。フィンランドのロック雑誌『Soundi』は、ヤロチン(Jarocin)フェスで暴れまくるポーランド・パンクスを掲載していたよ」

■どうしてVIVISEKTIOは解散したの?恐らく1986年の5月だったよね。短い活動期間だったよね…。

「SatuとKirsiが1986年に辞めたんだ。もう興味を失っちゃってね。俺とPekkaは新しいヴォーカルとドラマーを探したけど、ここラッピ州では望み薄だった。1988年に俺たちはVIVISEKTIOを解散させたんだよ」

■フィンランドが変わり始めたのがその年だったように思えるんだ。多くのバンドがメタルに転向し、音楽性を変えた。混沌は姿を消し、技術ばかりが目についた…。

「俺はメタルの影響を受けたハードコア・バンドは好きじゃない。ハードコア・パンクは1986年に"終わった"のさ。80年代初期のハードコア・パンクスのほとんどがシーンから去って

行った。多くのバンド、RATTUSやVARAUSはメタルに走った。RIISTETYTやBASTARDS、APPENDIXといった伝説的なバンドのメンバーの多くがくだらないポップ・ロックをやり始めた。こういう奴らの写真を今になって眺めるのは愉快だよ。グラム・ロックの衣装、メイク、そしてヘアー・スタイルをしていた奴らのね」

■短命に終わってしまったバンドには、君たちとも出身地が近いAIVOPROTEESIがいたよね(※AIVOPROTEESIはラッピ州のロヴァニエミ[Rovaniemi]出身。アカスロンポロからは車で2時間ほどの距離に位置する)。お互いのことは知っていたのかな?彼らは『Yalta Hi-Life』LPに参加できたから、君たちよりラッキーだったと思うけど。

「あぁ、AIVOPROTEESIは素晴らしいバンドだったし、俺たちよりも優れていた。結成も俺たちより早くて、解散したのは1985年だったかな。ベーシストのJussi(r.i.p.)はよく知っていたよ。俺とJussiはAIVOPROTEESIとVIVISEKTIOのスプリットEPを計画していたんだ。AIVOPROTEESIはそのとき既に解散していたんだけど、『Yalta Hi-Life』セッション時に残してあった未発表曲が2曲あってね。だけどスタジオ・テープがどこかに行ってしまって、それは実現しなかったんだ」

■解散からの22年間、君は個人的に何をしていたのかな?SatuとKirsiはハードコア/パンク・バンドを一緒にやったりしていたの?君とPekkaはどんな時を過ごしていたんだい?

「VIVISEKTIOの解散後は、勉強したり働いたり、色々さ。普通だよ。SatuとKirsiがその後にバンドをやることはなかったね。でもKirsiは今でもパンク・ロックを聴いている。俺はAMAZING TAILSでベースを弾いていた。1989年から1995年までね。HÜSKER DÜやDAG NASTYみたいなメロディック・ハードコアさ。Pekkaもいくつかロック・バンドをやっていたよ」

■そうして、遂に…VIVISEKTIOは蘇ったわけだ!なぜ?退屈だったから?名声?それとも金かな、ハハハ!

「俺とPekkaはVIVISEKTIOでレコードを出せなかったことをいつも悔やんでいたんだ。だからVIVISEKTIOを再結成しようって計画は以前からあった(主に酔っ払っているときに出る話しだったけどな)。それで2008年に、新たなメンバーと共に再結成したわけだ。こんなシンプルな曲を再びプレイできるなんて本当に最高だぜ!」

■メンバーは全員アカスロンポロ出身?30年前には10人のパンクスがいたけど、今ではどうなの?村でギグをやったりした?

「いや、俺とPekkaだけがアカスロンポロ出身だ。1987年から俺はオウルに住んでいるんだが、Pekkaは未だにアカスロンポロで暮らしている。他のメンバーは全員、俺と同じくオウルに住んでいて、ドラマーのMiikkaはTOTUUSやBURN AGAIN、ÖDEEMA、その他にも色々なバンドでプレイしてきた。TumppiはJÄTESAHAのヴォーカルだったし、Mariaは今でもTHE HANDSHAKEのヴォーカルだ。アカスロンポロの人口は現在約500人。だけどもうパンクスなんていやしない。1986年以降、アカスロンポロで演奏したことはないよ。いつかやりたいけどさ」

■再結成してみて、オーディエンスの反応はどう?君たちのLPはどう評価されている?僕にとっては最高だったけどね!

「みんなには受け入れられていると思う。多くの若いパンクスは年寄りの再結成バンドになんて無関心だよね。その手のバンドのほとんどはクソだけど、俺たちはシッカリやっている。俺たちがやりたいのはパンク・ロックに影響を受けた80'sハードコアだけど、古臭くてだらしない、愚鈍なサウンドなんかはやりたくないんだ。LPの評判もいいね。『1984』LPはフィンランド、ドイツ、ブラジルでリリースされてて、俺とPekkaにとってはとても大切なレコードなんだ。ほとんどの曲は80年代に書かれたものだし、当時は俺たちがLPをリリースできるなんて夢にも思わなかったからね」

■君たちのCDRをリリースしたVietkong Tapesって今も活動しているのかな?

「ハハハ、Vietkong Tapesは俺が80年代にやっていた"レコード・レーベル"なんだ。コンピレーション・テープを1984年に一本出しただけのね。そのテープにはBASTARDS、SEKAANNUS、ABORTTI 13、あともういくつかのバンドが収録されていた。数年前の話しなんだけど、2008年に録ったデモといくつかのライヴ音源をCDRでリリースしたくなってね。それを『Naamiaiset』CDRとしてVietkong Tapesからリリースしたんだよ。今でも発売中だし、マレーシアとチェコではカセット・テープになっているよ」

■しかしオーディエンスは君たちの復活にさぞや驚いたことだろうね?80年代のコンサートで会った人たちと再会したなんてことはあった?

「前述したようにVIVISEKTIOは80年代のフィンランドのシーンでは全くの無名だった。だけど多くの人たちが俺たちのことを覚えていたり、再結成する2008年以前から俺たちを聴いたことがあるっていうんだから驚かされたよ。それに80年代から俺たちのことを知っている人たちも大いに驚いていたね。音源もろくに残していなかったわけだしさ。そうだね、80年代当時のオーディエンスにも会ったよ。例えばJUGGLING JUGULARSのベーシスト、Jaani。彼は俺たちを1985年のヤコブスタードで見ていて、ポゴ・ダンスしたって言っていたよ。彼が15歳くらいの頃の話しさ」

■数年前のヨーロッパ・ツアーで君たちをサポートすることができて嬉しかったよ。ツアーではどんなルートを辿ったのかな?シュクラルスカ・ポレンバにはどんな思い出がある?他にはどこでプレイしたの?

「あぁ、サポートしてくれて感謝しているぜ!8日間で8回のギグをやったんだ。ドイツ、ポーランド、チェコ、そしてオーストリア。シュクラルスカ・ポレンバは素晴らしかった。あの町は少しアカスロンポロに似ているね、山とか森とかがさ。Klub Jazgotでプレイしたけど、とても良くもてなしてくれたね。かなりの人たちが来てくれて気に入ってもらえたようだ。ツアーでのベスト・ギグはウィーン(Wien)とブルノ(Brno)

Photo by Nuusa Parkkinen





Photo by Heikki Raudaskoski

だ。オーディエンスはマジで狂ってた。変な感じだよ。フィンランドでのギグでは、2人くらいしか暴れてないのにさ。もっとツアーをしたいけど、仕事も家族もあるから、企画するのはかなり難しいんだよな…」

■もうすぐロシアへと旅立つよね。心配はない?今のロシアの警察はひどく攻撃的に見えるけど…。

「ロシアでは2回だけギグをやるんだ。ペトロザヴォーツク(Petrozavodsk)とサンクトペテルブルク(St Petersburg)でね。そうだな、俺は心配していないよ。これまでロシアの警察と揉めたことはないし。シベリアやウクライナを訪れたこともあるしね。ペトロザヴォーツクのバンド、ANTIMELODIXのヴォーカル、Sanyaと一緒に廻るんだけど、彼は経験豊かなギグの企画者だからね。サンクトペテルブルクのナチ・スキンの話しも聞いたことがあるけど、奴らが活動するのは大きなサッカーの試合が街であるときらしいし。スウェーデンにももうすぐ行くぜ。ウメオ(Umeå)パンク・フェスに出演するんだ(その後、何一つ問題なくロシアでのギグは行われた。素晴らしいが、同時にハードなツアーだったよ。約2000キロをヴァンで移動したからね – Grzester)」

■今ではバンドに女の子がいるなんて普通のことだけど、Mariaがコンサートで冷やかされたり、性差別主義者に目をつけられるなんて問題はない…?

Maria「VIVISEKTIOのギグで、フルに出演したことって私はまだないの。2回のギグで、2、3曲歌ったことがあるだけなの!だけど、他のバンドをやっていたときでも、性差別主義者とのトラブルが起きたことはないわ。普段、私はショーのあとには、照れちゃうようなコメントをもらったりしているし…。フィンランドのパンク・シーンはとっても平等だと思う(もちろん馬鹿な奴らもいるけれどね)。何年もの間、ギグを企画しているけど性差別主義者に遭遇することなんてただの一度もなかったしね(この手の話しならいくらでも続けられるけど、インタヴューのスペースからはみ出しちゃうから止めておくわね)」

「MariaのVIVISEKTIOでの初となるギグは今度の木曜日にオウルでやるんだよ(僕が知る限り、問題なくそれは行われたようだ – Grzester)」

■MRRのコンピレーション『Sound the Alarms』や『Hardcore`13』にも楽曲を提供しているよね。誰かに頼んだり、逆に頼まれたりしたのかな?

「MRRに告知が出ていて、インターナショナル・コンピレーション・アルバムへの参加をバンドに依頼してきたんだ。俺たちは"Tuhlattu elämä"をレコーディングして送ったら、彼らはブラインド・リスニング・セッションをして、その結果選ばれたんだ。MRRで働く15人が、バンド名と曲名を伏せた上で聴いてね。バンドが選び出されるまでに3回もリスニング・セッションをやったんだって。MRRのコンピレーション・レコードに参加できて光栄だったよ。1985年から俺はMRRの読者だからな。『Hardcore`13』はもっと単純さ。俺たちのレコードをフィンランドでリリースしてくれたRoku Moguli(※Roku Records)に頼んだだけさ。そして『Hardcore`13』のために3曲レコーディングした。2曲は新曲で、1曲は1983年に書いた曲だ」

■次のアルバムまで再び20年も待たされないことを望むよ、ハハハ。次のLPのために何か準備はしている?

「新曲が12曲、もうできているよ。次のアルバムのためにあと2曲以上は作らないとな。2015年には出す予定でいるけど、リハーサルをやるのも不定期だからとてもゆっくり進んでいるよ。Pekkaはアカスロンポロに住んでいるからね(オウルから350キロ離れているんだからさ)。次作はデビューLPと同じような感じになるだろうな。ファストな80'sスタイルのハードコアと、遅めのポスト・パンクだよ。デビューLPはよく売れたよ。2012年にはセカンド・プレスも出したしね。Höhnie RecordsやRoku Recordsから今でも買えると思う。あとはKämäset Levytがもうすぐ7インチを出す予定だ。AMEBIXとKILLING JOKE影響下のポスト・パンク・ソング2曲入りだよ」

■じゃあPuntala Rockでの演奏はどうだったのかな?たくさんのバンドが出るから、出演するのも一苦労なんじゃないかな?

「Puntala Rockは2009年と2012年に出演したよ。最初のギグではイマイチだったけど、2012年はとても良かったね。そう、出演するのは大変だよ。どのパンク・バンドもあそこでやりたがるからね。2012年は、NOLLA NOLLA NOLLAがキャンセルしたから出られたんだ。Puntala Rockは世界一のパンク・フェスティヴァルだよ!

(その通りだ、Pena! – Grzester)」

■80年代のパンク・シーンのどんな要素を現代へと持ち込みたいと思っている?1984年の頃のほうが君は好きだったりするのかな?時を経てパンクはどう変わっていくと思う?

「80年代を懐かしんだりはしないよ。たしかにあの頃は君も(パンク・ロックも)若く、フレッシュで素晴らしかった。だけどネガティヴな面もたくさんあっただろ。人々は今よりも心が狭

80年代を懐かしんだりはしないよ

たしかにあの頃は君も(パンク・ロックも)若く、フレッシュで素晴らしかった

だけどネガティヴな面もたくさんあっただろ

かったし、冷戦もあった。そして何より核戦争の恐怖に苦しめられていた。
今では、パンクはよりプロフェッショナルになっている。バンドの演奏力は向上しているし、ステージで飲みすぎることもない。より政治的になったし、シーンには様々なジャンルが存在している。一般的なものになり、普通の人たちもパンクを聴くようになった。だから、80年代よりも楽しいと言えるだろうね。普通の人たちがパンクスを嫌い、ハードコア・パンクを聴かなかったあの頃、身内だけの狭い世界よりもね」
■今ではどんな場所でも音楽にアクセスすることができる。昔ではありえなかったよね。80年代のフィンランドに到達できたバンドにはどんなのがいたのかな?君が目にしたバンドは?
「俺が80年代に見たバンドってことか?多くはないよ。俺たちが住んでいたのはフィンランドの北部で、アカスロンポロからヘルシンキ(Helsinki)まで1000キロもあるんだからさ。当時、フィンランドに来たバンドなんてUK SUBSにTHE EXPLOITED、DEAD KENNEDYS、それとDISCHARGEくらいだよ。1981年から1983年頃、それもフィンランド南部の話しだよ。俺たちはティーンエージャーで、ヘルシンキまでバスと電車を乗り継いで行くには遠すぎた。だから違う惑星の出来事みたいだったな」
■君の住んでいる場所は、一年のうちの半分は氷に閉ざされて、ずっと暗いままなんだよね?それが夏になると何度まであがるんだい?引っ越したいとは思わない?
「ラッピ州では11月から5月までが冬だね。11月から3月まではすごく寒いし暗いんだ。11月と12月なんて太陽を見ることはできないよ。けどもう慣れているから、なんてことはないさ。ラッピ州の夏はとても短いけど、7月になると25度にもなるんだ。時にはもっとあがることも。俺はフィンランドの生活が好きだから、外国に引っ越す気はないな」
■アカスロンポロではドアの鍵を閉めないって聞いたけど、それは本当?そんな場所に君みたいなイカレた人間が住んでいたなんてね。それとも君は映画『Napapiriin sankarit』(ラップランド・オデッセイ)に出てくるヒーローみたいな感じかな?ハハハ(※映画『ラップランド・オデッセイ』は2010年製作のフィンランド映画。デジタル・チューナーを買いに3人の男たちが200キロ離れた街へ向かうという、コミカルなロード・ムービーらしいです)。
「ハハハ、そうさ、俺たちは『Napapiriin sankarit』に出てくる奴らみたいなものさ。その映画のいくつかのシーンはアカスロンポロで撮影されたんだぜ。俺がティーンエージャーだった頃、外出時に鍵をかける人なんて誰もいなかったけど、今じゃ無理だね。世界は変わっちまったんだ。
悪いニュースもあって、大きな鉱業会社がアカスロンポロの至近距離にある鉱山を開発しようとしているんだ。地元の住民は全員反対しているよ。自然が破壊されてしまうからね。俺たちは心底、開発が実現しないことを祈っているよ」
■おしまいにラッピ州の伝統的な料理や飲み物を教えてよ。僕がそこを訪れた際に挑戦すべきものをね。
「うーん、ラッピ州の料理は肉類が多くてね。トナカイや魚を食べたければここは最適だよ。飲み物は単純明快、フィンランドのウォッカとビールを試してみてよ。インタヴューしてくれてありがとう!いつの日かまたポーランドを訪れたいね!」
■おっと、一つ忘れていた。80年代に君はファンジンを作っていたよね?何号くらい出して、どんな記事を掲載していたのかな?
「俺は『Kuumat Kyynelet』というファンジンを作っていた。1985年から1988年までだな。4号出しただけだよ。フィンランドじゃ結構人気があったんだぜ。自分のために取っておいてるんだけど、第1号の内容は:KUOLLEET KUKAT、SUBHUMANS、TERVEET KÄDET、EX-HUMANS。第2号は:DIATRIBE、WDM。第3号は:EXTREME NOISE TERROR、IRSTAS。第4号は:CHUMBAWAMBA、CORROSION OF CONFORMITY、CONCRETE SOX」
■最後に、君はOulun Kärpätのファンだよね?ホッケーは好き?
「俺たちはホッケーの大ファンだし、もちろんKärpätを応援している。フィンランド北部の人間なら当然さ。Miikkaはフットボールの熱心なファンで、リバプールを応援しているよ。俺はクロス・カントリー・スキー、Tumppiは自転車のダウンヒルが趣味なんだ」
■どうもありがとう。ステージで会おう!
「もちろんさ。乾杯!」

[日本の読者へのメッセージ]

『EL ZINE』を読んでいる日本のみんな、こんにちは!読んでもらったこのインタヴューは昨年に行ったものなんだ。だからこの後、俺たちがしたことについて話したい。
フィンランドのレーベル、Kämäset Levytは「Mausoleumi」7"を昨年の夏にリリースした。今、俺たちは新しい7"EP用の曲のミキシング作業をしているところさ。短いファストな80'sフィニッシュ・ハードコアを4曲に、遅いポスト・パンクを1曲って感じだよ。それとフィンランドのRefoniがカセット・テープをリリースする予定もある。それは1984年から1986年の間に録ったデモとリハーサル・テープを収録しているんだ(30曲以上だね)。いつの日か日本ツアーをしてみたいね。もし協力してもらえるなら、連絡してほしい。
vivisektio83@gmail.com


Photo by Heikki Raudaskoski

TEXT:Christina P

PUNK IN AUSTRALIA
+++PARt 3+++

vol.17～18と引っ張ってきましたオーストラリア・パンク・シーン・レポート、遂に感動感涙(?!)の完結編です!
ラストはパース、シドニー、そしてタスマニアの全3都市のレポートですが、タスマニアから連想できるものといったら、タスマニア・デビル&大自然くらいなのは私だけでしょうか…。しかし、ノイズやメタル、グラインドのシーンがちゃんとあるそうで、何だか、音楽ってすごいなって今更ながら思います。
「無名のオーストラリアのバンドなんてどーでもいいよ」なんて輩はとっくに幣誌を読んでいないでしょうから蛇足ですが、やっぱり未知のバンド/シーンを知るっていうのは刺激的です。手垢に塗れた事象の確認作業もいいですが、常に探究心を忘れずにいたいな～と、この長いレポートに取り組んでみて、改めて痛感したのでありました。

● PERTH

SYDNEY ●

● TASMANIA

パース Perth

パースには確かにレコード店が何軒かあるわ。だけど、今のパンクを探しているような人がレコードを買いに行ったり、地元のシーンの情報を得るために行くようなお店はないわね。

大手のディストロは最近になって勢いづいているけど、他の地元のレーベル、Coffin Cut Recordsみたいなのは徐々に衰退していっているわ。けど、パースでレコードを売り買いするときの取っ掛かりにはなると思う。

Helta Skelta Recordsはパースのパンク・バンド、HELTA SKELTAからその名を拝借している。HELTA SKELTAの結成から1、2年経った頃にKyleが加入したんだけど、彼はそれからHelta Skelta Recordsを始動させたの。Kyleのリリースするバンドの大半がパースのバンドで、それにはHELTA SKELTAの全音源も含まれているわ。

HELTA SKELTAの新しいLPにもすごく期待しているし、Kyleが別でやっているバンド、PLASTIC BAGSや新しいパワーヴァイオレンス・バンド、PEOPLE PROBLEMなんかもね。PEOPLE PROBLEMはメルボルンで最高のショーを何度も見せつけてくれたから、彼らも大推薦よ。注目して。

それとAGITATED。このバンドはLEECHESとのスプリット7インチをリリースしたばかり。LPも計画しているわ。Helta Skelta Recordsはパース以外のバンドのリリースにも着手していて、PATHETIC HUMANの7インチはリリース済み。今後の予定にはRAT SAKとRED RED KROVVYの7インチがあるわ。

HELTA SKELTAのヴォーカリストのJonは最近、自身のレーベル兼ディストロSpace Ritualを始めた。まだリリースはないんだけど、着々と準備をしているところよ。最初のリリースはなんとLUMPY AND THE DUMPERSのLP!彼はHELTA SKELTAのヴォーカルを続けながらPRAGというバンドでもフロントに立っていて、このバンドはデモ・テープが7インチ化されている。このバンドもパースでオススメのバンドよ。違う州だけど、SIMFUCKERSやOILY BOYSとも仲が良いみたいで、似ているスタイルをやっているわね。

この西海岸の地では孤高の存在である、スラッジ・ドゥーム・マスターのDROWNING HORSEは新しいLPにとりかかっていて、ゆっくり作業中なんだけど、ミックスの段階までは来たみたい。



GENTLEMEN　Photo by Glan Schenau



PEOPLE PROBLEM Photo by Kelly Leech

Asbestos Deathは新しいレーベルでヘヴィなハードコアのリリースに注力している。既に5タイトルをリリースしていて、SUFFERのディスコグラフィーにキャンベラのMIGRAINEのデモ・テープ、それにCAGED GRAVEやHEXXの作品とかね。

NERVOUS TRENDはヨーロッパ・ツアーを終えたところ。何がすごいって、彼女たちが1stデモをリリースしたのは、ヨーロッパでフェスへの出演を依頼された後のことなのよね。流行りのダーク・ポスト・パンクなんだけど、ツアーを重視しているみたい。

NERVOUS TRENDのAlexはこの数年間、パースで唯一信頼に値するファンジン『Jerk Store』を発行しているわ。現行のアンダーグラウンドでクリーン(ポップ)なパンク志向のジンよ。ジンと同名の小さなレーベルとディストロもやっているわね。

WARTHREATはスウェーデンのSEX DWARFとのスプリット7インチをCrucificados Pelo Sistemaからリリースした。このレーベルは同じタイミングでパースのHOLY MEASURE(元々はFLESH POLICEというバンドだった)とメルボルンのSPLIT TEETHとのスプリットもリリースしたわね。

WARTHREATのShaneはLive Fast Die Drunkというクラストのレーベルとディストロをやっていたけど、もう止めちゃったみたい。あとはEMU XPERTS、KITCHEN PEOPLE、NO SURVIVORS、VITAL SIGNS、GRANDMOTHERなんてバンドもチェックしてみて。もちろん他のバンドもね。

シドニー Sydney

シドニーにはいくつか際立った理由があって、他のどの州とも違っているのよね。まず第一に、ここのパンク・シーンの中心にはRepressedやBlackwireなどといったレコード店があるということ。他にも古いレコードを見つけられるお店もあるわ。

第二に、他の国ではありえないことだけど、オーストラリアにおけるLGBT(※レズ、ゲイ、バイ、トランスジェンダーの人たちの総称)のアンダーグラウンド・コミュニティが、ほぼ完全にパンク・シーンとは分離してしまっているということ。ネガティヴな理由からではないんだろうけどね。近頃はそれほどでもないみたいだけど、メルボルンではパンクとLGBTはもっと密接に関係していたように思うのよ。

Repressed Recordsで働いているNickはRIP Societyというレーベルを運営していて最近5周年を迎えたわ。

確実にここに記しておくべき作品はROYAL HEADACHEの「ST」7インチとLP、KITCHEN'S FLOORの7インチと「Loneliness Is A Dirty Mattress」12インチ、HOUSEWIVESの7インチ、そしてZONDのLP。当初はノイジーでローファイ、不気味なパンク・サウンドというレーベル・イメージがあったけど、徐々に幻想的なインディー・ポスト・パンク・サウンドへと洗練されていった。BOOMGATESやWOOLEN KITS、BITCH PREFECT、そして彼自身のバンド、BED WETTIN' BAD BOYSをリリースしていくにつれてね。

最新のリリースはLOW LIFEとMOB。どちらも地元シドニーのデッドビート・バンドだから、レーベルのルーツに立ち返ったかのようなリリースよ。MOBのLPを私は聴いていないんだけど、良い評判は聞こえてきている。LOW LIFEのLPは私の2014年のトップ5にランクインね。基本的に陰鬱で忌まわしいドローン・サウンドよ。

自分たちと近いスタイルのバンドと共演しに、OILY BOYSはメルボルンによくやって来るの。Cool Deathシーンの一員ね。彼らは2013年に限定盤の7インチを出しているんだけどあっという間に売り切れちゃった。最初のリリースは2012年のデモ・テープだったわね。

Blackwire Recordsはアーティストよ。ボランティアで運営されていて、非営利のレコード店であり、レーベルでもあり、店内でショーを企画するホストでもある。主にロウ・



LOW LIFE　Photo by Sigheil

パンク、ハードコア、パンク的なものがメインだけど、異なるパンクのスタイルも歓迎しているわ。

UNKNOWN TO GODはDEATHRAID(※アメリカ・シアトルのクラスト・バンド)のオーストラリア・ツアーのサポートで各地を廻っていたわね。ジャパニーズ・ハードコアの暴徒であるDEATHCAGEはしばらく鳴りを潜めていたけど、メンバーのSpiderは新しいバンド、NOBODYS DRIVINGを始めたみたい。

One Brick Today RecordsはTara Jayneが運営しているレーベル。"ストレートや男性が大部分を占めているシーンにおいて、そこで追いやられている女性やクィア(※性的マイノリティ)に対して目に見えるサポートや助力を提供する"ことを主な目標に掲げているわ。

SHIT WEATHERとHIRSのスプリット7インチやMANHUNTの「Human Detritus」7インチ、CIRCUITSのデモなどをリリースしている。CANINEとDIPLOIDのスプリット7インチもリリースされるから、ぜひ手に入れてね。MANDATEやTHORAX、PALMER GRASP、ACH、ETHER RAG、DARK HORSEといったバンドのショーも企画しているわよ。クィア・ハードコア・パンクのGLORY HOLEもちょうどヨーロッパ・ツアーを終えたところね。

残念ながら私はこのシーンが予定していることについては知らないの。だからOne Brick Today RecordsやBlackwireといったシドニーの人たちにコンタクトをとって、もっと情報を仕入れなきゃ。

シドニーから2時間ほど離れたニューキャッスルにはGood Times Recordsがある。2006年からファストコアやパワーヴァイオレンスを主にリリースしているレーベルよ。AMATUER DRUNKSやHACKED TO CHUNKSといったニューキャッスル産のバンドもチェックして。

オーストラリア首都特別地域はニューサウスウェールズ州に囲まれた小さな州で、その都市がキャンベラ(※オーストラリアの首都)。一度だけ私はそこを訪れたことがあって、いくつかバンドを見たこともある。そのときは、酔っ払っているときに"THEE NODES"の顔のタトゥーをお尻にいれられたというナイス・ガイの家に泊めてもらったわ。

THEE NODESといえば、彼らのショーで共演していたHYGIENEは覚えておく価値のあるハードコア・バンドね。ROTP Recordsから7インチをもうすぐリリースするわ。キャンベラ周辺のシーンにはEYE GOUGE、I EXIST、BLIGHT WORMS、THROAT OF DIRTといったバンドもいる。バンド名をズラズラと並べたけど、私はよく知らないのよね。Lacklustre Recordsというレーベルもあるようだけど。

静かで良い都市よ。小さいシーンだけど、立ち寄る価値はあると思う。

タスマニア Tasmania

メルボルンから僅か一時間のフライトでタスマニアに到着。だけどそこで何が起こっているのか、私はまったくの手探り状態。だからJulian Teakleという地元の世話役に力を借りたわ。ミステリアスなこの小さい島に隠された、地下音楽へと光をあてるためにね。

JulianはRough Skies Recordsを主宰していて、タスマニアのノイズと実験音楽のコンピレーションを主に手掛けているわ。レーベルのBandcampにはこう記されている。"タスマニアとホバート(※タスマニアの州都)には、何年にも渡り実験音楽のミュージシャンやサウンド・アーティストたちによる精力的なコミュニティが存在し、彼らは小さな会場やDIYイヴェントで活動している…。このコンピレーションの編者及び責任者は、ホバートの音楽/アート・シーンの垣根を越え、アーティストたちが日の目を浴びて世界にその名が広まることを願っている"。

このコミュニティのリリースは小規模だから、購入することはできない。だけどいずれの楽曲もRough SkiesのBandcampで聴い

て楽しむことならできるわ。

現在のシーンよりも昔を振り返りたい人たちのために、Julianは90年代のタスマニア音楽の記録と保存をここ(goulburnstreet.tumblr.com)で行っている。そして彼のバンド、THE NATIVE CATSはタスマニアにおけるオーストラリア本島向けの最大の輸出品でもあるのよね。このバンドは"エレクトロニック・パブ・ロック"を自称していて(聴いてみると確かにその通りだわ)、3rdアルバムであり目下の最新作はRIP Societyからリリースされている。

Wrong Place Recordsはタスマニアの州都、ホバートのレーベル。少しだけだけどリリースもあって、サウンドとしては"シンセ・ポップ、フォーク、ギター・ポップ、ポスト・パンクと呼ばれている音楽範囲"をカヴァー。リリースしているコンピレーションCDやスプリット7インチ、テープ作品からもその姿勢をうかがうことができるわ。

Ben CrothersはConsumer Productionsを1990年代の半ばから運営しているけど、今はちょっと失速しているかな。リリースするのは地元タスマニアのバンドや本島のバンド。オブスキュアで他とはつるまないポスト・パンクとかばかりを出している。

Number One Hitsもタスマニア・ミュージックのコンピレーションを出しているレーベル。オンラインだけのね。この3年間でリリースしたのは4タイトルよ。

Wormwood Grasshopper RecordsはDRUNK ELKのBenが主宰者。ディストロもやっている。これまで7タイトルのリリースがあって、DRUNK ELKの作品やメルボルンのMAD NANNA、HAMMERING THE CRAMPS、GARBAGE & THE FLOWERSなどの音源を出しているわ。DRUNK ELKも新しいLPを出したばかりで、レコ発をシドニーとメルボルンで行ったわね。

ヘヴィな音楽についても触れないと。Heavy Chains Recordsがサポートして盛り上がりを見せているメタルとグラインドのシーンがタスマニアにはあるのよ。Heavy Chains Recordsはメルボルンのとあるメタル・バンドのデモを出したばかりなんだけど、このバンドは全然ライヴをやらないの。だけどアンダーグラウンドのカルトなメタル界隈では話題になっているみたい。OUTCASTというバンドよ。このメタル・レーベルの他のリリースにはBARROW WIGHTやTAROT、IRON HAWN、THE WIZAR'Dの作品があるわ。ホバートのグラインド・コアならNOWYOUREFUCKDをチェックして。

MO1O(Machines of 1nditerm1nate Origin)はメタルとノイズ・シーンにおいて数多くのプロジェクトをやってきた、タスマニアのベテラン2人組からなるバンド。

NAKEDはソロ・プロジェクトとして始まったけど、ライヴで演奏するためバンド編成になったわね。他に、タスマニア産で聴くべきバンドといえばALL THE WEATHER、DOG TOWER、BI HOUR、MESS O'REDSかな。

最後に、オーストラリアでも老舗のファンジンがタスマニアにはあるの。『Down And Out』といって、ダーク・パンクやハードコア、それにメタルを取り上げているわ。地元から海外の音楽まで、綿密な知識に裏打ちされた内容よ。31号まで出ていて、オーストラリアよりもアメリカで入手しやすいわ。

オーライ、これでおしまいよ!!そうね、この記事を楽しんでもらえて、もっと知りたいことがあるとしたら、あなたがすることはたった一つ。オーストラリアに立ち寄って、自分自身で調べるってこと。ただ、ドライブしてもカンガルーは轢かないでね(都市の間をドライブしていたとき、私は2匹轢いたことがある。かなりビビるわよ)。

ボッタクリ価格のビール6本セットを買っちゃっても私の知ったことじゃないけど、ここにショーを見に来たあなたは、会場の隣の裏路地を見渡している。パンクスはみんなそこで飲んだくれているわ。バーで飲むよりも安上がりだからね。そこで一緒に飲むことが、友人を作る最良の方法よ。

このシーン・レポートで、記すべき全てのバンド、レーベル、ファンジンをカヴァーするなんて到底無理。とはいえ、オーストラリアのシーンは絶え間なく成長しているし、変化と進化を続けている。

この原稿で言及されていることを調べていけば、きっとここでは触れられていないことへと辿り着く。そして、あらゆることが、どのようにしてオーストラリアのパンク・シーンへと繋がっているのか、分かると思う。

私に情報を提供してくれたみんな、どうもありがとう。フォトグラファーのみんな、Kelly LeechにBad//Teeth、Lee Stefen、Glan Schenau、Sigheil、そしてブリスベンのセクションで協力してくれたTVSTDのJaneとSHACKLESのMarkにも感謝しているわ。

Space RitualのJonとHelta SkeltaのKyleにはパースのセクションで、タスマニアのアンダーグラウンド・ミュージック・シーンの情報に関してはJulian Teakle、アデレイドに関してはBoy Toyに協力してもらったわ。それにFacebookでも、この原稿のために数えきれないほどの人たちに協力してもらった。

もっと知りたいことがあったり、記述したことについて連絡したいことがあったらstitchesinmyheadfanzine@gmail.comまでメールしてね。



INTERNAL ROT Photo by Bad//Teeth



deranged insane

DERANGED INSANEは2000年に日本(長野県上田市)で結成されたブラジル人による初めてのグラインドコア・バンドなんだ。ZAGIO EVHA DILEGJのメンバーも途中から在籍していたけど、2004年にメンバーはブラジルに帰国してしまう。しかし、帰国してからも現在まで、変わらぬノイズと残虐なグラインドコア・サウンドを世界にばら撒き続けているんだ!!

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■君の長野の友人たちに、このDERANGED INSANEのインタヴューのことを伝えるつもりだよ!彼らはきっと気に入ってくれるはずさ!やぁ、Kiko(ドラム)、調子はどうだい?

「ヘイ、Rafa、全部順調だよ。そうだね、僕には今でも長野や札幌、名古屋に友人がいるのさ」

■君たちは日本でエクストリームな音楽をプレイした最初のブラジル人だよね。バンドの歴史やディスコグラフィー、初めてのショーについて少し聞かせてもらえるかな。

「このバンドはフラストレーションから生まれ出たのさ。Cynthiaと僕は結婚すると、日本に引っ越すことを決意した。それが2000年のことさ。彼女はパンク・ロック・バンドをやっていて、僕は2つのグラインド/ノイズのバンド(TRAUMA ACUSTICOとROTTEN ANGER)をここブラジルでやっていた。日本に行くためにバンドを止めなくちゃいけなかったのには、本当にフラストレーションを感じていたんだ。それで僕たちはDERANGED INSANEを結成したってわけ。デモを2000年に録音して、2011年の1月に日本へと渡った。日本での最初の一ヶ月の間に、僕は練習用のドラムを買い、Cynthiaはギターとアンプを買ったんだ。それで、TRAUMA ACUSTICOはUNHOLY GRAVEとスプリットLPをリリースしていたから、僕はTakahoに手紙で連絡をしておいたんだ。そうしたら彼らはひと月後、僕たちが暮らしているところの近くで演奏してくれたんだよ。僕たちはショーに足を運びみんなと会うことができたってわけさ。当時はデモをたくさんディストリビューションしていたから、その縁でMY MINDS MINE(※オランダのグラインドコア・バンド)のショーを長野でやることができた。他にもMUGA、IDIOCY OF GROTESQUE、POWER OF IDEA、UNHOLY GRAVE、D.I.E.、MELT BANANA、FLASH GORDONといった数多くのバンドもね。数年後にはZAGIO EVHA DILEGJのTakemaeにヴォーカルとして加入してもらった。それから札幌のMUHAMMAD ALI CAMPAIGNとのスプリット・テープやANTIGAMAとのスプリットCDをレコーディングしたね。他にも『Blast Nights』といったコンピレーションにも参加した。ブラジルに帰ってからは、Fernando Carcaçaをヴォーカルに誘って、LITTLE BASTARDSとのスプリット7インチをレコーディングした。僕が知る限り、LITTLE BASTARDSは日本のベストなバンドの一つだよ。そしてCarcaçaが抜けてKidが加入。彼はex TRAUMA ACUSTICOでもあるんだ。その後にUNHOLY GRAVEとのスプリット7インチをレコーディングしたね。このラインナップでは、他にもオランダのINTUMESCENCEとのスプリットCDや、PATISSERIEとARCHAGATUSとの3 Way CDもリリースしたよ」

■今のDERANGED INSANEのメンバーは誰なのかな。ラインナップについて聞かせて。

「唯一残っているオリジナル・メンバーは僕だけさ。Cynthiaは数年前にクリチバ(※ブラジル南部の都市)に引っ越してバンドから去ってしまった。彼女は今、CROTCHROTでプレイしているよ。現在のラインナップは僕がドラム、Kidがヴォーカル、Gustavo(PACTUM、ex PSICODEATH)がギター、Tiago Bergmanがベースだよ。SUBCUTとのスプリット7インチと『Armageddon Cantuum』CDをこのメンバーではリリースしているんだ」

■歌詞のテーマは?どうやって歌詞を書いていくのかな?

「全ての歌詞はKidが書いているんだ。僕はTRAUMA ACUSTICOの頃から彼の歌詞がずっと好きなんだ。テーマにはそれほど変化はなくて、暴かれた人間の苦難であったり、反転する価値観、それに人類という名の病魔についてもね。新しいラインナップになってサウンドは変わったんだ。デス・メタルの影響がかなり出ているよ。だけど、いつだってグラインドコアに立ち返るんだけどね!」

■最近リリースされた『Armageddon Cantuum』についても聞かせてほしいな。

「『Armageddon Cantuum』は1stフル・アルバムさ。多くの曲は、以前のメンバーで作ったもので、スプリットとかで既に発表したものなんだ。新曲は3曲だけ。フロント・カヴァーはAugusto Mirandaによるもので、録音したのは2013年のこと。リリースしようとしたんだけど、なかなか興味を持ってもらえなくてね。CDでリリースする価値がないなんて何人かに言われたよ。だけど僕たちは発表したかったんだ。2015年になってKarasu KillerやRotten Foetus、Intervençao Cultural、Cipreste Negroといったレーベルが協力してくれることになった。それでCDでリリースできたん

日本時代







だ」

■みんなはバンドで生活しているのかな?それとも、仕事を持っている?ブラジルでバンドをやる上で、最も困難なことは何かな?

「仕事をしないでバンドをやるなんて不可能だよ。練習するにも、レコードを買うにも、旅行するにもお金がかかるからね…。メンバー全員、仕事をしているよ。バンドをやるのなんて簡単さ。僕たちは90年代の初期からバンドを色々とやってきたけど、今じゃリハーサル・スタジオはあるし、安価な楽器も手に入る。それにインターネットもあるからね…」

■最近ショーはやっている?ブラジルや海外へのツアーの予定は?

「ここロンドリーナ(※ブラジル南部の都市)にあるBarbeariaというバーで無料のショーをやったばかりだよ。何曲かをビデオに録ってもらったから、それが発表されるのも楽しみにしているんだ。最近だとサンパウロでも2回ショーをやったね。初日はZapataという会場でCRUEL FACEやHUTT、BANDANOSといった素晴らしいバンドと共演した。翌日はClash ClubでNILEやSATAN、CEMITERIOと共演したんだ。演奏はずっと続けていきたいし、僕たちのCDをもっと世に広めたいね。海外でもプレイしたいけど、実現するにはもう少し時間がかかるだろうな」

■現在のブラジルのアンダーグラウンド・シーンについて、どんなところが良くて、どんなところが悪いと思う?何かサポートは受けられる?

「アンダーグラウンド・シーンからお決まりのアティテュードや規制がなくなって、偏見のないものになればいいなと、僕はずっと考えているんだ。一般論なんて言いたくないけど、ここのインディペンデント・シーンには常識ってやつと嫉妬が溢れ返っているよ。ナイスな人たちももちろんいるよ。協力してくれたり、長年の友人たち、良いセンスを持った人たちも増えているように思う。サポートはしてもらえているけど、それほどじゃないな。レーベルは再発モノばかりやっていて、新しいバンドには見向きもしないからね」

■新しいグラインドコア・バンドが今のブラジルでは数多く輩出されているよね。この復興をどういう風に見ている?この事実をどう考えている?

「素晴らしいことだよ!つけ加えるなら、昔からのバンドも未だに活動的だし、再始動したりしているよね。ブラジルのバンドのレベルもすごいよね。CRUEL FACEのライヴを最近見たけど、ものすごく感激したよ!」

■ブラジル以外の国のバンドでは、どんなのが好き?何か挙げられるかな?

「BRUTAL BLUESをよく聴いているよ。PARLAMENTARISK SODOMI(※ノルウェーのグラインドコア・バンド)のメンバーがやっているバンドなんだ」

■日本に戻りたいと思う?懐かしい?

「日本でのギグが懐かしいよ。ライヴハウスには良い機材が揃っているしね!それに友人たちのことも懐かしいな。だけど仕事は全然懐かしくないよ、すごく日本で働いたからね。一日に12時間もだよ。もし日本に戻れるなら、もっと真っ当な仕事に就きたいね。そうしたら戻りやすくなると思う」

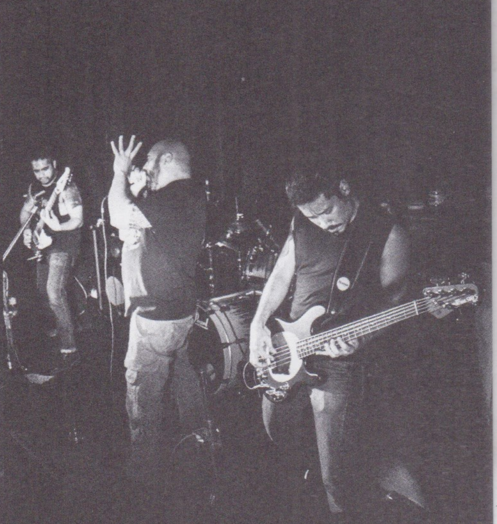
■何か読者にメッセージはある?

「読んでくれたみんなと、リリースに協力してくれたKarasu Killerに感謝を述べたい。もちろんリリースに関わってくれた他のレーベル、Rotten FoetusにIntervençao Cultural、Cipreste Negroにもね。君たちがいなければCDのリリースは実現できなかったからね。どうもありがとう!」

Contact punknoise@hotmail.com







ブラジル時代

LASHING SPEED DEMONS VOL.20

はい、早いものでこの連載も20回目となりました。あの(どの？)DOLLで俺が最後にやってた連載「LUCIFER SAM'S DINER」が(DOLL廃刊により)19回で終わったことを思い出すと、EL ZINEも歴史を持ったものだなどと感慨深いです。さて今回は、以前に本誌VOL.4とVOL.8でやって好評だったらしい(？)、EL ZINE誌上のインタヴューその他で名前が登場するハードコア以外のバンドなどを紹介するコーナー、その3。バックナンバーめくりながら、つらつらと書き進めてまいります。 TEXT:大越よしはる

BLACK WIDOW/SACRIFICE



本誌VOL.13、SATAN'S SATYRSインタヴューで、フェイヴァリット・アルバムの5位に挙げられている。ステージでは全裸の女を悪魔の生贄にするようなパフォーマンスで、かのBLACK SABBATHと並んで黒魔術云々と言われたバンドだが、それも英国的なシアトリカルさの顕われに過ぎず、音楽的にはサックスやフルートもフィーチュアして、ダークなハード・ロックでありながらもジャズやフォーク色もあるブリティッシュ・ロック。
(CASTLE COMMUNICATIONS CLACD 262)CD 1970年

KING CRIMSON/RED



本誌VOL.11、「METAL PUNKやろうぜ！」より。TERROR SQUADのギタリスト、大関氏がこのアルバムのタイトル曲を宅録でコピーしていたとのこと。EL ZINE(しかも「METAL PUNKやろうぜ！」)でこのバンドの名前が出てくるとはまったく思わなかったので大変吃驚しました。しかし74年の時点で、どんなバンドよりも言葉通りの"ヘヴィ・メタル"(＝重金属)な音楽を演っていたのがこのバンドだったとつくづく思う。
(ATLANTIC P-6394A)LP 1974年

THE CLASH/THE CLASH



本誌VOL.8、スコット・ヒデオ・ゴトウ(DEFIANCE/BURNING LEATHER)のインタヴューより。今現在ハードコアを演っているような若いパンクスのルーツがTHE CLASH…というのは、けっこう意外な感じ。90年代以降にパンクを聴いたり演ったりするようになった人の話を聞いたり読んだりすると、SEX PISTOLSもRAMONESも遅いとかユルいとかいう声が多いから。そのへん以上に速いR&Rにとどまらなかったのがこのバンド。
(EPIC/SONY ESCA 5270)CD 1977年

KRAFTWERK/KRAFTWERK



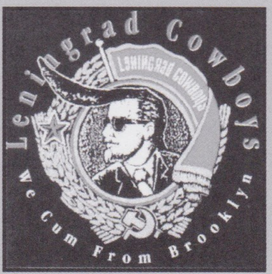
本誌VOL.12より。高円寺のRECORD SHOP BASEに、昔はこのバンドが置いてあったとか…。『AUTOBAHN』(1974年)以降の作品でシンセ・ポップ/テクノの元祖として知られるが、この1stアルバムではシンセ導入前、フルートとオルガンをフィーチュアしたミニマルな反復音楽を演っていて、むしろNEU!に近い(っていうかドラムはNEU!のクラウス・ディンガーだ)。ちなみに初期3作は正規再発されてません(コレはブートCD)。
(GERMANOFON 941001)CD 1970年

CREEDENCE CLEARWATER REVIVAL/CREEDENCE GOLD



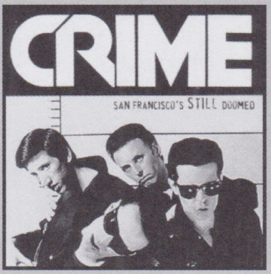
本誌VOL.8、"9 Questions Terror For Hardcore Punk Labels"(ハードコアのレーベルに質問する特集)に登場したアダルト・クラッシュ(デンマーク)のオーナーがフェイヴァリットに挙げていたバンドのひとつがCCR。アメリカのパンク/ハードコアでは、「Bad Moon Rising」をはじめとしてCCRをカヴァーしているバンドはやたらと多い。70年前後に活動していたのにヒッピー/サイケ色がほぼ皆無の武骨さ故なのか。コレはベスト盤。
(FANTASY FCD-9418-2)CD 1972年

LENINGRAD COWBOYS/WE CUM FROM BROOKLYN



本誌VOL.12より。NAT RECORDS板垣氏がライヴに出かけて暴れて警察沙汰になった、というのがフィンランドのこのバンドのライヴだったという…。アキ・カウリスマキ監督の映画『レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ』に出てきた人たちだが、実在のバンドだというんで驚いた。イメージ通りロシア民謡風のメロディも織り交ぜながらホーンなんかも交えたノリのいいR&Rだけど、何より出オチみたいなルックスが凄かった…。
(BMG BVCP-246)CD 1992年

CRIME/SAN FRANCISCO'S STILL DOOMED



本誌VOL.12、ヴィデオ・ディジーズ・レコーズのインタヴューより。このバンドが7inchでやっていたアプローチが好きだったということだが、こんな70年代西海岸パンクを今聴こうと思ったらCDで探すしかない。それにしてもこのやさぐれ具合ときたらどうだ。何しろメンバー全員警官の黒い制服を着て、それで曲名が「Yakuza」とか「Samurai」とか(笑)。単なるRAWパンクと侮るなかれ、SONIC YOUTHがカヴァーしていたりもする。
(SWAMI SWA126)CD 2004年(1976〜79年録音)

MC5/'66 BREAKOUT!



本誌VOL.13、AC4インタヴューより。なるほど、AC4というバンド名は、MC5を多少意識していたのですね。で、プロト・パンクとして絶対に外せないこのバンド、オリジナル・アルバムはもう今更だなーと思ったので、初期音源集をセレクト。結成間もない頃のライヴで、THEMやビッグ・ジョー・ウィリアムズ、ボ・ディドリー、そしてジェイムズ・ブラウンなんかのカヴァーも演ってます。ビート・バンド然としたジャケット写真もナイス。
(TOTAL ENERGY NER3023-2)CD 1999年(65〜66年録音)

DEMON/NIGHT OF THE DEMON



本誌VOL.12、SHITFUCKERのインタヴューは実にユニークだった。その中で出てきたのが、このNWOBHMバンドのギタリスト、レス・ハントがDISCHARGE『GRAVE NEW WORLD』に参加していたという話。DEMONのマネージャー、マイク・ストーンはあのクレイ・レコーズを主宰していた人だから、なるほどという感じ。ジャケットのおどろおどろしいイメージに反し、オーソドックスで渋いハード・ロック、再結成して今も現役。
(ルビコン・ミュージック RBNCD-1511)CD 1981年

MINISTRY/ΚΕΦΑΛΗΞΘ



本誌VOL.16、スロヴェニアのDORNATAインタヴューより。見た目からしてUK82な感じのRAWハードコアな人たちが、影響源としてDISORDERやENTと並んでこの人たちの名前を挙げているのはちょっと意外。元々エレポップだったのが、スラッシュ・メタルとハードコアを大胆に取り入れた結果として、速くて重いデジタル・ハードコアに。ギビー・ハインズ(BUTTHOLE SURFERS)を迎えた名曲「Jesus Built My Hot Rod」収録。
(ワーナー WPCP-4566)CD 1992年

MX-80 SOUND/BIG HITS/HARD ATTACK



本誌VOL.9、LUCIATIONインタヴューより。EL ZINEでこのバンドの名前を目にするとは予想もしていなかったし、ましてブラック・メタルの人がこのバンドの名前を出すとは。GIZMOSやPANICSなんかでお馴染み、インディアナ州のバンドだが、1976年の時点で既にポスト・パンク的なサウンドって、完全におかしいだろう。サックスとギターがフロントで暴れ回り、ベースとツイン・ドラムがそれを支える、オーパーツ的な異形のロック。
(CAPTAIN TRIP RECORDS CTCD-411)CD 1976/77年

SIGH/葬式劇場



本誌VOL.13、カナダのレコード・ショップHAMMER CITY RECORDSインタヴューより。この店がそろえている日本のハードコアのバンドに混じってこのバンドの名前があったのにはちょっと驚いた。ちなみに俺が初めて買ったブラック・メタルのアルバムというのが多分コレだったんじゃないかと思う。北欧起源のブラック・メタルに独自の日本情緒を取り入れたバンドが、更にポップさをも取り入れようとした異色のミニ・アルバム。
(CACOPHONOUS NIHIL 17CD)CD 1997年

RADIO BIRDMAN/RADIOS APPEAR



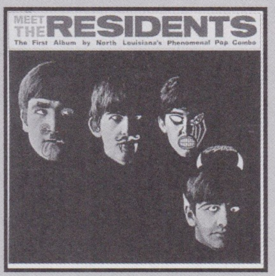
本誌VOL.10、INEPSYインタヴューより。コレも意外なところで、EL ZINEでこのバンドの名前を出すのは俺ぐらいだろうと思っていた(笑)。NYやロンドンのパンクの影響ではなく、デトロイト・ロックなんかの影響を元に南半球はオーストラリアで独自にパンク・ロックを作り出したオリジネイター。キーボードを含む6人編成でハード・ロック色もありながら、出てくる音はやはりパンクとしか言いようのない、スピード感満点のR&R。
(CITADEL CITCD-550)2CD 1977年

TINA & THE TOTAL BABES/SHE'S SO TUFF



本誌VOL.8でインタヴューされているCAROLINE AND THE TREATSのキャロラインちゃんが、バンドのリーダーであり彼氏でもあるモルテン・ヘンリクセン(THE YUM YUMS)から最初にもらったCDがコレだとか(インタヴュー中では『IT'S TINA TIME』となっているが、それはアルバム名ではなく曲名)。THE TRASHWOMEN～BOBBYTEENS他のティナによるプロジェクトの唯一のアルバム。実にキャッチーなガレージ/パワーポップ。
(SYMPATHY FOR THE RECORD INDUSTRY SFTRI 668)CD 2001年

THE RESIDENTS/MEET THE RESIDENTS



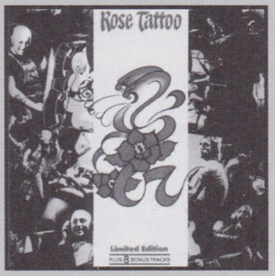
本誌VOL.11より、チェコスロヴァキアの80'sパンク・バンドF.P.B.がチェコ語でカヴァーした「Svatý Pes」の原曲「Fire」はTHE RESIDENTSのデビューEP「Santa Dog」収録曲で、1stアルバムがCD化された際にカップリングで収録された。THE DAMNEDやKILLING JOKEを聴く一方で、この米国地下アヴァンギャルドの帝王に影響されたとは、かの国のパンク・シーンの特異性を見る思いが。F.P.B.の演奏はYouTubeで観られる。
(EAST SIDE DIGITAL ESD 80222)CD 1972/73年

友川かずき/犬―秋田コンサートライブ



本誌VOL.16、KNAVEインタヴューより。日本のフォークには遠藤賢司や三上寛など、ジャンルを超えてパンクな破壊力を持ったシンガーが何人かいるが、友川かずき(現・友川カズキ)の声とギターは破壊力というよりも殺傷力と言った方が(銃刀法で取り締まられそうだ)。頭脳警察人脈でもあり、なるほどそれは元祖パンクですね。このライヴ盤でも頭脳警察の石塚俊明らを迎え、異様なテンションの尖りまくった歌唱と演奏を聴かせる。
(キング KICS 8817)CD 1979年

ROSE TATTOO/ROSE TATTOO



本誌VOL.8、イタリアのメタルパンク・バンドCHILDREN OF TECHNOLOGYインタヴューより。AC/DC直系のハードR&Rに激渋のスライド・ギターと塩辛いヴォーカルをフィーチュアして人気を得たバンドの1stアルバム。MOTORHEADやAC/DC同様、メタル界だけにとどまらないトータルなR&Rとして聴かれるべき…とか思っていたら、あの「パンク天国2」で紹介されてました。やっぱり英国Oi系とかに影響与えてたらしい。
(REPERTOIRE RR 4103-WZ)CD 1978年

TURBONEGRO/SCANDINAVIAN LEATHER



本誌VOL.16、ドイツのHYSTERESEインタヴューより。ノルウェイから飛び出した爆裂変態R&R軍団、コレは再結成アルバム。メンバー全員のゲイっぽいいでたちに、ヴォーカリストは明らかにキング・ダイアモンドを意識したメイク…と、見た目からしてかなりとんでもないバンドだった。ベースのハッピー・トムはTHE VIKINGSやTHE YUM YUMSなどガレージ/パワー・ポップ系のバンドでも活躍したりと、一筋縄では行かない人たち。
(BURNING HEART BHR 169)CD 2003年

少年ナイフ/LET'S KNIFE



本誌VOL.14、E.A.T.E.R.インタヴューより。90年代のロッキンオンならいざ知らず(?)、EL ZINE誌上でこのバンドの名前が出てくるとは予想もしていなかった。しかも1981年結成のバンドに対して、2013年の時点で"めっちゃ可愛い"って…。しかしこのバンド、結成から34年(!)が経った今も(オリジナル・メンバーは一人ながら)ちゃんと現役で、ちゃんとポップでキュートでロックしているのでした。故カート・コベインのアイドル。
(MCA MVCD-3)CD 1992年

ZZ TOP/FANDANGO!



本誌VOL.13、ドイツのレコード店STATIC SHOCK MUSIKインタヴューより。パンクを演ったり聴いたりしているような人でも、相当多くの人がヘヴィ・メタル/ハード・ロックからエクストリームな音楽に入っている…というのを、DOLL読んでもEL ZINE読んでも実感する(俺もそうだった)。それにしてもこのアルバムの前半(アナログA面)のライヴは凄い盛り上がり。「Backdoor Medley」での怒涛の2ビートはほとんどハードコア。
(WARNER 3271-2)CD 1975年

SHAKIN' STREET/S.T.



本誌VOL.16のZEXインタヴューで、インスパイアされたバンドとしてこのバンドが筆頭に挙げられていて驚いた。確かに個性的なバンドではある。一応パンク・バンドの括りでフランスから登場した連中だが、実際にはかなりハード・ロック寄り。アメリカでのデビューとなったこの2ndアルバムでは元THE DICTATORSで後にMANOWAR(!)のロス・ザ・ボス(G)が加入して、ハードにロックする音楽性は更に全開になっている。
(COLUMBIA NJC 36499)LP 1980年

V.A./LOVE, PEACE & POETRY Asian Psychedelic Music



本誌VOL.11、スペインのLAS SEÑORASインタヴューより。キャプテン・トリップから"シェリルのサイケデリック世界一周"という邦題(笑)で国内配給もされていた、辺境サイケのオムニバスから、アジア編(SEÑORASのメンバーが挙げていたのは日本編だったが)。トルコやシンガポールや韓国の60～70年代サイケにはめまいがすること必至。発禁ナンバーとして有名な(?)モップス(鈴木ヒロミツ!)「ブラインド・バード」も収録。
(NORMAL CD 029)CD 1999年

ES GIBT KEIN WERT

今年の8月、数年振りに横浜・寿町のフリーコンサートへ行ったのですが、これまた久々に見た渋さ知らズのパフォーマンスがもう圧倒的に素晴らしくて感激したのです。ダンサーやペインター、暗黒舞踏の存在感は勿論ですが、あの異常なまでの熱気は、音源では決して伝わらないものだなーと改めて痛感しました。管楽器隊がズラッと前に出てきて吹きまくる様とか、バナナを持って躍る人魚姿のネーチャンとか、誰よりも"寿町っぽい"リーダーの不破氏の姿とか、未だに目に焼きついております。
地元のオッサンが突如「バカヤロー!バカヤロー!」と叫びだしたり(別に何かがあったわけではない)、色んな人たちが色んな感じにグチャグチャのままでいられる寿町の雰囲気が、また懐かしくもありました。そんなわけで、今回は渋さ知らズのレヴューなんてのもしちゃっています。完全に場違いですがご容赦ください。
話題は変わって以下にレヴューしたチェコの音源4枚は、SEE YOU IN HELLのFilipとトレードして入手したものなので、日本のレコード屋さんやディストロには入ってきていないかもですが、気になった人は彼に連絡すればどうにかなる、…ハズ。ヨーロッパのディストロには流れていると思うので、そっちからも入手可能かと。特にALIUSTERRAとROSA PARKSは絶賛オススメなのでチェックしてみてください〜。

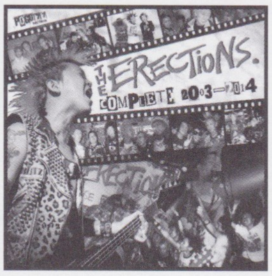
SPLIT/COMMODORE 64+RESTRICTION



チェコ・スプリットその1。COMMODORE 64は甲高い絶叫のスラッシュ・パンクで極々フツー!キャッチーです。そんくらい!RESTRICTIONがヤバい。90'sスウェディッシュ・クラストの三軍みたいな楽曲(とジャケ)に、悪い意味でチープな音質。全然格好良くないんだけど、何故かスピーカーの前でガッツポーズしてしまう自分がいます。一周半廻って気がつく魅力がここには詰まっているのです!

(Raw Zine Records/Dis-Šrŏt Records/Ultima Ratio/Hluboká Orba Records/etc)7"

THE ERECTIONS/COMPLETE 2003-2014



デモ2本にシングル2枚、未発表曲にオムニバス参加曲も収録した全23曲入りのコンプリートCD!活動初期から不変の、"Pogo Till I Fuckin Die"な90'sポゴ・パンク直系のスタイル。首尾一貫したブレのなさ、そしてキャッチーでFunなサウンドがやっぱりサイコーなのです!ブックレットもスパイキーな写真満載で楽しいし、詳細なインタヴューも掲載した冊子付きでカンペキ!

(Pogo77 Records Pogo73)CD

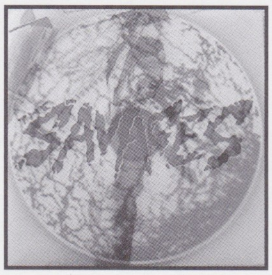
SPLIT/DISFUNKCE MYSLI+BAD AGE



チェコ・スプリットその2。DMはインスト・ナンバーからの幕開けで期待させておきながらの…、DIS系ではない大雑把なクラスト・コアで至極平凡。しかし、対するBAD AGEがヤバい(デジャヴ)。東欧的な灰色のメロディーに骨太のハードコア・パンクで、ポーランドのPRODUKTが好きな人もイケるはず!ただPRODUKTが好きな人が日本に一体何人いるんだって話しですけどとにかくBAD AGE、オススメです。

(Dis-Šrŏt Records/Ultima Ratio/Gogo Music Klub/Fusa Records/United Crusties/etc)7"

THE SAVAGES/ST



RAW DISTRACTIONSやROUGH STUFF、AV FALLなどで活動してきたメンバーによるハードコア・バンドのデモ音源。EXPLOITEDやONE WAY SYSTEMを彷彿とさせる極上のUK82サウンドに泣きのメロディーが相俟って胸をギュッと締めつけられる。表情豊かに歌う日本語詞ヴォーカルもポイント高し!ジャケットの紙質にもこだわりが感じられ、デモとは思えない完成度でスバラシイ!

(自主)CD

SPLIT/ALIUSTERRA+ROSA PARKS



チェコ・スプリットその3。Filipに、「お前はALIUSTERRAが好きだと思うよ」と言われて期待していましたが、よく分かっていらっしゃる!EL BANDAも彷彿とさせる、管楽器(多分サックス)が吹き荒れる悲哀のアナーコ・パンクで実に素晴らしい!そして期待していなかったROSA PARKSも、吟遊の如き物憂げなヴォーカルにアナーコ・メロディック・パートと激情カオティック・パートが交差するユニークなサウンドでこちらも秀逸!

(Hluboká Orba Records/Véva Records/Ultima Ratio/Malström/Rosa Punx Collective/etc)7"

TURTLE ISLAND/パルガンドウラン



昨年に発表された2曲入りシングルCD。タイトル曲はモンゴル〜琉球音楽の要素も感じさせるが、時代性と地域性をヒョイと飛び越え、どこまでもさすらい旅するかの佇まい。とても自由で広大で、どこにでもあるようでいて、どこにもない音楽だ。そして、『空空神々-KALAKALA KANKAN-』にも収録されていた乱痴気抵抗歌の"マサカサカサマ"は、よりダイナミック&パワフルになって再録されている。

(microAction MA/CD-8)CD

SEE YOU IN HELL/ST



そしてお馴染みSYIH!彼らの目下の最新作は、結成15周年を迎えた昨年にリリースされた2曲入りのソノシート。硬質なバーニング・ハードコアにタフなコーラス・ワークが冴えわたる"Odvolej"から、一転してミドル・テンポでメタル・クラストっぽい雰囲気をまとった"Proti Proudu"と、盤石の仕上がり。ギグのフライヤーを大量に掲載したデザインのA3ポスター付きで、それを見るだけでも、彼らがどれほど精力的な活動をしてきたかが伝わります。

(自主)Flexi

渋さ知らズ/渋彩歌謡大全

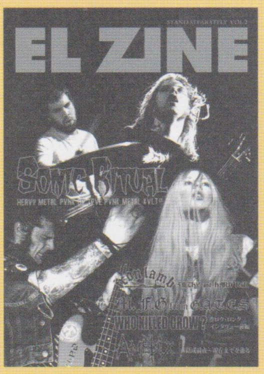


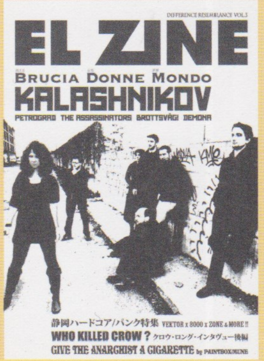
ライヴから数日経っても熱に浮かされた状態だったので、目下の最新作だと思われる2012年発表の歌謡曲カヴァー・アルバムを購入してみました。ゲスト・ヴォーカルが多数参加しており、遠藤ミチロウが地を這うように唄う"夢は夜ひらく"を聴きながら安酒をあおり、三上寛の情念渦巻く(否、渦巻き過ぎている)"黒い花びら"で悶絶・慟哭する他ない。独立独行にして極限のフリー・ジャズ。

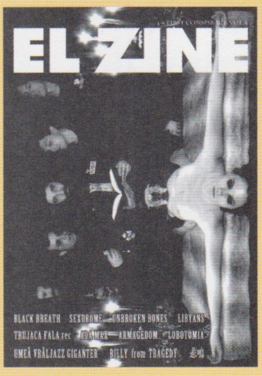
(WAX Records TKCA-73836)CD

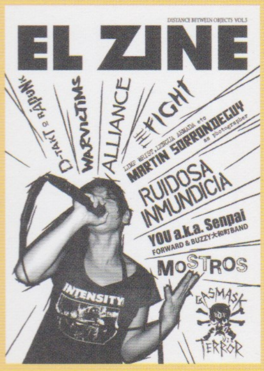


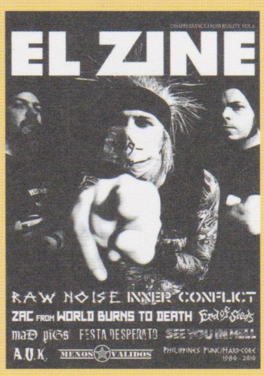


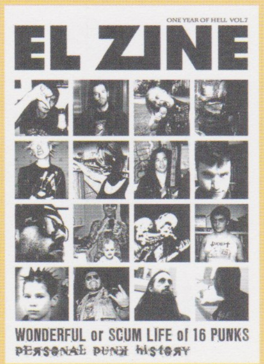


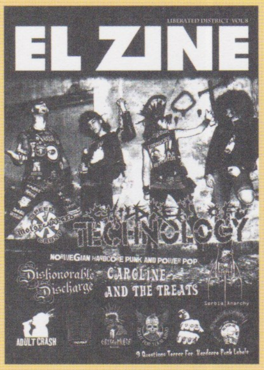


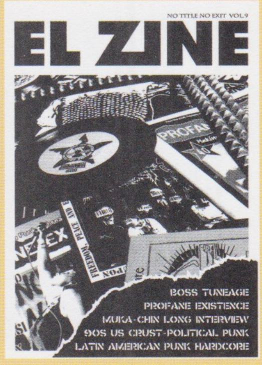


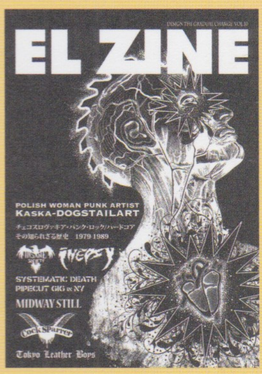


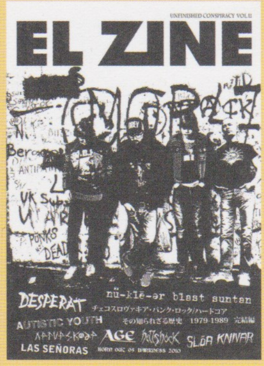


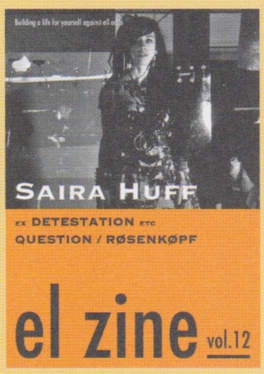


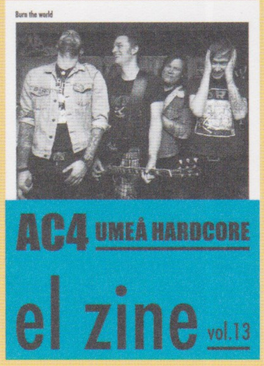








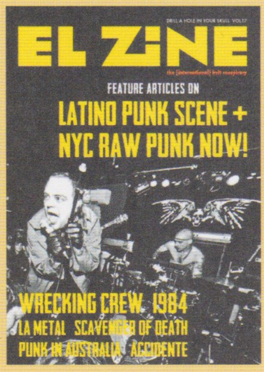














VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13 ARE SOLD OUT! THANKS FOR READING! FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

"メタル・パンク必聴ディスク・ガイド"で二ツ木さんが、「山路氏から数年ぶりに連絡…、まぁ言われることは唯一つ、"原稿書いてくれない?"ってこと」と書かれておりまして、更に"死んだ方がまし"では北村さんが、「とある日、久しぶりに山路さんからメールが来た。〜俺にインタヴューをやってもらえないか、とのこと」と書かれていらっしゃいます。「ここだけ読むとまるで僕は、"原稿以外の用件では一切連絡をしてこない糞野郎"のような印象を持たれてしまうなぁ…」なんてことを思いつつ、先日、信号無視して横断歩道を渡っていたら、見知らぬ小学生男児に「赤信号なんですけど!!」と叱られ、「こんな子供に叱られるなんて糞どころかチンカスだなぁ…」と涙が止まりませんでした。次号は年末くらいに多分出ます。Stay Shit!!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

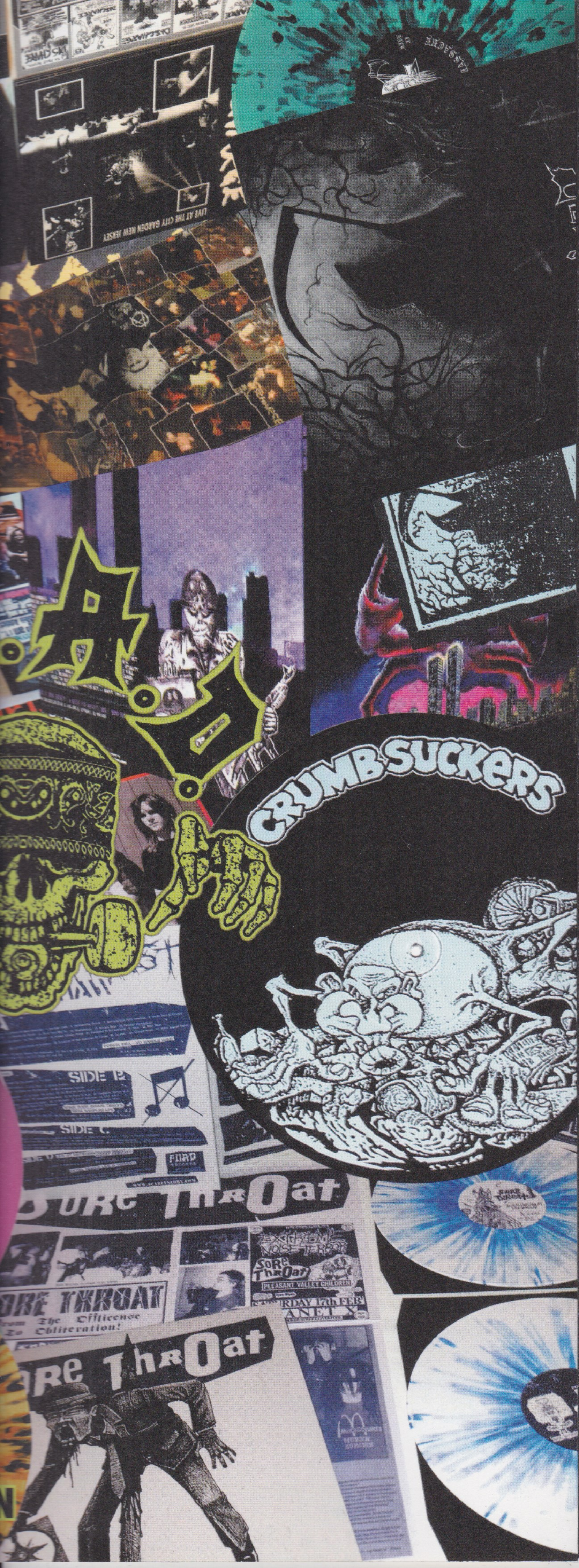
EL ZINE vol.19　2015年10月20日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます



EL ZINE VOL.19 600 YEN

the [international] kult conspiracy EL ZINE ENERGY, IMAGINATION AND SPIRIT VOL.19



the [international] kvlt conspiracy EL ZINE ENERGY, IMAGINATION AND SPIRIT VOL.19

